

川柳塔

創刊大正十三年 通卷八六七号



白川協加盟

No. 867

八月号

第5回 川柳塔まつり

<役員会>

と き 10月9日(土) 午後1時-2時半
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F生駒
(近鉄上本町・地下鉄谷町9丁目下車)

<同人総会>

と き 同 日 午後3時-4時半
ところ 同 会 場
議 事 平成10年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告
平成11年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

<記念句会>

と き 10月10日(日) 午前10時開場・午後1時開会
ところ ホテル・アウリーナ大阪 3F葛城
表彰式 路郎賞・川柳塔賞・渺湖賞・茴香の花賞・一路賞・各地柳壇賞の表彰式を午後1時から行います。

兼 題	「つかむ」	(和歌山)	川 上 大 輪	選
	「時計」	(広 島)	森 井 菁 居	選
	「人 柄」	(青 森)	小 寺 花 峯	選
	「おかしい」	(島 根)	原 章 峯	選
	「五」	(大 阪)	高 杉 鬼 遊	選
	「追 う」	(事前投句)	橋 高 薫 風	選

◎各題2句・出句締切正午・4時半終了予定

会 費 1000円(当日いただきます)

<懇親宴>

と き 同日午後5時-8時
ところ ホテル・アウリーナ大阪 4F金剛
懇親宴会費 7000円(会席料理)

宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8000円(朝食付)

◎事前投句および懇親宴・宿泊の申込みは本誌127ページの申し込み用紙に明記の上、8月31日(火)までに本社事務所あてお願い申し上げます。

懇親宴・宿泊の御送金(句会費をのぞく)は同封の払込用紙でお願いいたします。

主 催 川 柳 塔 社

旅人・福寿草・私達

橘高 薫風

が型は同じ、『私達』も変わらない。

『福寿草』は昭和三十年七月一日發行。両先生の名吟佳句は枚挙にいとまがないが、今回は長男ロンドンさんの急逝時と、その一周忌の句を揃えてみたい。

路郎先生の句

学校の横に住みて

子を死なし学校に子の多いこと
おおきな事実子が死んでいる
まだ弟があるようにいう悔み聞き

ロンドンの一周忌に

お父さんはやはり川柳々々言つてるよ
お前がいたらと思ひ出すと煙草ばかり喫う

お父さんはネ覚束なくも生きている
お父さんの神経衰弱がわかるかい
湯さめするまでお前と話を夢に來よ

蓼乃先生の句

長男のロンドンを喪いて

弟へ残す形見のかたボール

ロンドンの一周忌

まぼろしであつたか死んだ兄の裸
一周忌かしこもこも草萌ゆる
一周忌こんな蒲団で寝ていたか
紺紺今はアートのために裁つ

香を焚いてまざるる事も凡夫なる

『私達』は『旅人』と『福寿草』の間の厚さで三百六十頁、不朽洞会員（路郎の門下生）のうち参加を希望した百五十名ほどの作品集で、物故された名作者の句も収められている。一人五十三句掲載の作者もあれば七句だけの人もある。

路郎先生は作者の個性を伸ばすのに秀れておられたので、多士済済の故にまた多句彩の趣である。

その中で今なお川柳塔で活躍、購読者としてご支援の諸氏の句を列記する。

聊はどれもはげてる一等車 侃流洞
水害の駅から今日も応召兵 形水
入院の妻に月賦があつたのか 文秋
みんな寝てしもって母のいい月見 紫香
保険屋もいそいで去んだヒステリー

大阪へ来た団体は走らされ 雄々
觀光地ただで遊ぶす様に書き しげお
奥様にされて市場を出て笑い ト占
折詰を開けば妻は値ぶみする 梨里
月横に動くと思れば汽車曲る 柳慶
秋はよしこんな所にこんな花 水客
お年玉貰えば子供去ぬと云い 杜的
愛論

川柳雑誌社發刊の句集に三部作とも言える三冊がある。それは路郎先生の『旅人』と蓼乃先生の『福寿草』、門下生の合同句集『私達』である。

『旅人』は先生の川柳生活五十年に際してのモニュメントとしての發刊で、昭和二十八年十月三十日であつた。

縦十六糎、横十二糎、厚さ四・五糎の変型上製本で、片方の掌にすっぽりと収まり、ずしりとした重量感を覚える。

二階を降りてどこへ行く身ぞ

という七七の十四音字の句を巻頭に千百十句が収録されている。一頁に一句のところ、二句や三句の頁もあれば、一句一句も一行で書かれたもの、二行三行と分かち書きになつている句、それぞれ作者の呼吸に合わせて姿が決められている。

『福寿草』は厚さは路郎の三分の一だ



座右の句

恋人の膝は檸檬のまるさかな

(薫風)

私の句

背な流す萎びた母が手に残る

緒方 美津子

川柳塔 八月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 旅人・福寿草・私達

ナマケモノ

橋高 薫風 …… (1)

川柳塔 (同人吟)

麻生 アート …… (2)

佳句感想

橋高 薫風 選 …… (4)

自選集

橋高 薫風 …… (52)

川柳の群像 北川絢一朗

東野 大八 …… (56)

誹風柳多留二四篇研究

2 …… (58)

水煙抄

河内天笑選 …… (62)

大空のこころ

(103)

橋高 薫風 …… (87)

秀句鑑賞

「同人吟」

板尾 岳人 …… (60)

水煙抄

西原 艶子 …… (91)

ナマケモノ

麻生 アート



いきなり私ごとで恐縮ですが、亡父路郎は大変な努力の人でありました。その反動？でもないのでしょうか。私は大変なナマケモノ。

イソップ物語というキリギリスで、生れついてこの方徹底してそんな生き方をして来たように思います。只、自然に流れてゆく人生、自然に逆らわない生き方。と言えば一応カッコイイ人生観のようでありますが、半面私のナマケ心を正当化させる恰好の口実となったことも確かであり、真に宗教的な心を培ってくれたことも事実です。そして、その事は亡き母霞乃によってなされたキリスト教の教育でありました。

山を移す信仰に生きんかな

サンデー晴五女はバイフル持つて出る

水仙白く我をいましむ

信心の寺は昼寝によいところ

交渉に邪魔な正直者を連れ(霞乃)

渺湖抄

茴香の花

「敵」

一路集「許す」

「雲」

初歩教室「姿」

『川柳からつ』二百号記念句会走り書き

七月本社句会

各地柳壇（佳句地十選／坊農柳弘）

矢野佳雲さんを悼む

柳界展望

八月各地句会案内

■編集後記

八木千代選 (88)

西出楓楽選 (92)

青枝鉄治選 (94)

神原秀子選 (94)

小熊江美選 (95)

吐田公一 (96)

仁部四郎 (98)

月原宵明 (100)

みつ子・希久子 (104)

柳界展望 (119)

矢野佳雲さんを悼む (121)

柳界展望 (123)

八月各地句会案内 (124)

■編集後記 (124)

座右の句

美しい顔して夜叉を飼いならす

(雄々)

私の句

落武者は己の影を踏んで行く

本吉宗光

尚富を地に積まんとす もんじゆの炉

山上の垂訓雀ふとり居り

わが坐すは弥陀の膝なり策無用

み仏をハラハラさせて生きて来た(アート)

それでは亡父路郎の場合はどうだろうか？

と句集「旅人」から数句拾って見ました。

亡母や私の場合は先に宗教があつて其処から句が産まれたのに対して、亡父の場合は、

先ず川柳がある。その川柳の行きつく処から産まれて来た境地であると私は思います。

即ち川柳は「人間陶冶の詩」でありました。

路郎の作品数句をごらん下さい。

子よ妻よばらばらになれば浄土なり

君見たまへ蒨葎草が伸びてゐる

その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ

無常とや猫も錦魚も死んで見せ

凡聖一如元旦のころ知る

見渡すとユダのころをみんな持ち

いずれにしても人生という「旅」は面白い

もの。私も皆さまのご指導ご鞭撻をいただき

ながら人生という「旅」を大いに楽しんで行

きたいと思っています。



橘 高 薫 風 選

島根県 堀 江 芳 子

移植の世なのに片目をあげられぬ

洗面の水後悔に揺れてます

芍薬のふんわり咲いていとおしや

一円玉おまえの役も大きいね

のうまくさんまだ総べてのうまくさんまだ

あーんしてごらん飴玉入れてあげ

枚方市 海老池 洋

入道雲むくむく謀反そそのかす

筆跡は似て人柄は大違い

一升ビン僕の面影かも知れぬ

膨らむと人間臭くなる財布

芝居ならとんだ不倫も美しい

継ぐ嫁もいない漬け物石の鬱

堺市 桑 原 道 夫

満員車なかにバニラの香もまじり

聖家族順に巻貝耳に当て

粗大ゴミ捨て場にジュゴンのごときもの

牛の口からくちやくちやの万国旗

月よりの使者待ちかねて煙草吸う

電柱に筋金入りの蟬の殻

和歌山市 川 上 大 輪

火の海を泳ぐ被告も原告も

独走態勢コース外れていた私

練り山葵ツーンとこれは直訴だな

渋滞が続く私の動脈も

合言葉もう使われておりません

一人より怖い集団の沈黙

和歌山市 川 上 富 湖

夥しい体臭のする古本屋

文学の少し手前で売れている

海月ふわり頑張らなくていいんだね

プロポーズ君を終身刑に処す

落ち林檎こんな筈ではなかったに

楽しんで生命線を描き足そう

宝塚市 嵯峨根 保子

じよっぱりの桴のしなりは天で鳴る

抱擁力あるのはかすみ草の方

会うて来た温みですごす三日ほど

そら豆は女のみどり晶子の忌

グリーンサラダとパスタを食べる秘密基地

貧乏は頓智でぐぐり抜けている

西宮市 秋元 てる

神武 綏靖……無駄なるもののなつかしく

上澄みを待つ癖恋も持ってかれ

だんだんと抑えの効かぬ声になり

何処にでも居場所があった古里よ

母の日の幸せ亡母へ先ず供え

貧乏の仕方上手下手と老母

鳥取県 新家 完司

泣くほどのこともなかった父の葬

人類の未来が臭うゴミ捨て場

がんばって生きているのに小さい影

どっかりと大地に座る誕生日

どこへ逃げてもにんげんという奴がいる

誰も来ぬ山で果てたし月を見て

堺市 宮本 かりん

吊り橋の中程にある小宇宙

寝ころんでも立っても変りない空だ

ずんどうのラインも軽く妻の夏

深いなあわたしが掘った溝らしい

謀叛抱くきのうと同じ顔をして

魂をゆきぶる唄よ八月忌

河内長野市 加島 由一

わが道を行くとは気楽フリーター

ビタミンの補給に少し回り道

誘ったら危ないことになる予感

いいことがあったか皿を拭く手付き

心から慕い誘いを待っている

約束を守らぬ美しい小指

吹田市 古川 喜美子

オホーツク僕も鷗も旅の身よ

叱ってる前のテレビは今くるよ

快復期ナースに叱られるほどに

ひとり言犬は後からついてくる

盲導犬公園に入り歩をゆるめ

風船のひとつ公園出たがらぬ

弘前市 斉藤 岳

植物園にハンカチツリー見に行こう

はし打ちのトキにいのちの音がする

植林の汗に美味しいにぎりめし

高一の孫がテストを抱いてくる

ガウデイのいのち吹き込むのみの音

白いバラ咲いて瑠璃ちゃん歩きだし

呉市 槇田英詩

世紀末益々固い血の絆

着替えて和尚が唄う恋の歌

老いて候ジャンプは膝が伸びただけ

顔の皺骨身削ったその挙げ句

古本屋少し暗くて椅子も無い

待ち惚け癒すホームのワンカツプ

竹原市 小島蘭幸

五十一歳 同級生の通夜にいる

十三回忌 父の盃にも酌がん

妻も知っている美しいひとと逢う

茶碗を洗う一人は楽しいことではない

洗濯物を畳むやさしい父である

師の句碑が一つは欲しい坂の町

岸和田市 田中文時

母さんが万事休したらしく寝る

静養の温泉宿で二日酔い

中道を唱え軸足右左

よく稼ぐ満身創痍ダンブカー

大志捨てエリートよりも大工職

形見分け誰にも合わぬ五尺の身

唐津市 田口虹汀
博多祇園は娘の氏神で詣ります
卵酒ぐらいじゃ逃げぬ夏の風邪

蓋の有る湯呑みで呑んで見たくなり
初茄子は亡母 秋茄子は亡父が好き

正坊の閑人閑話噛みしめる
句会が済んで兄貴が死んでくれました

唐津市 久保正剣
水漬がストンと落ちて夏の風邪
すばらしい変化球です始球式

喋ってるギャルの日本語なんちゅうのか
かしら右すれば歩調の揃う民

ボトルの底に沈ませているシークレット
勲章を吊るすと誰も走らない

唐津市 山門幸夫
その未明ピットで訣れ石飛磔
セルビアの列に残るは俺一人

わが余生流れる雲に語りかけ
ついて来てよかったねえと傘寿坂

立て歩け翔べよとトキの育て親
美房さん拳手の出会いをもう一度

大阪市 渡部さと美
催促のこちら向けてる大あくび
古希近い自慢を聞けば上機嫌

寄付しようその気でジャンボ籤少し

公園にボツンボツンと男とは

コーヒーを苦く自分を叱るため
来阪の八十路に感動する六十路

羽曳野市 三好専平

核シェルターお墓のように見えてくる

セクハラで光源氏が罪になり

たたかれて折れて曲がった釘の意地

都合よくボケて正気で生きている

特売の靴しか履いたことがない

竹トンプ飛ばしてみた五月晴

米子市 石垣花子

曾祖父がまだ種を播く差配する

毒舌の毒消えるまで背を向ける

横向いて出せる器用な舌が無い

ひとりぐらしへ大波小波打ち寄せる

瀬戸際に間に合いそうな助け船

こめかみの梅干が効く花曇り

弘前市 櫻庭順風

はからずも叙熱感激満ち溢れ

叙熱うれし教育一途こつこつと

春秋の間 夫唱婦随のかしこけれ

拝謁の妻を動かす置換弁

お言葉は一言一句噛み締める

色留の内助の袖は妍極む

八尾市 内海幸生

一すじの煙となった妻の旅

ひとりでは何処へも行けぬ筈なのに

妻を恋い母恋い祖母恋い経を読む

神ほとけ拝み倒したのに召され

気の毒な声で窓口テキパキと

今日からはひとりベルトをきつく締め

米子市 茂理高代

公園の樹から思い出刻み出る

鳥の声何故にこんなに着着ける

逝った子に似てる姿の後を追う

何時からか香のかおりが好きになる

雨音がやまず浄土の子を思う

苦と共に老いし我が身のいとしさよ

唐津市 市丸晴翠

敵が来た火気厳禁でやり過ぐす

リストラで堅固な父の箍ゆるむ

待たされて間欠泉のわが想い

小川から消えたためだかは宇宙飛ぶ

着飾って手応えのない男の子

物置の中に眠っている童話

羽曳野市 榎本吐来

あっさり男を躲すイヤリング

深更の妻の怒りに愛を観る

軽口が明日を支える縄のれん
生真面目がひっそりと飲むひとり酒
騙されて騙して粹な老夫婦
上乘せの薬薦める医師の業

豊中市 安藤 寿美子

雨しとど山のタヌキはどうしてる
胃袋がねじれるほどは怒らない
ひとり旅帰りの切符どこやった
性格は変わらぬものよクラス会
どこからかタイガースの旗出してくる
ばあさんも時にはきれいな服を着る

八尾市 篠原 いつふみ

歳老いてインコも牝が強くなる
猫がまた聞かされている嫁の愚痴
おばちゃんが座席の隙間こじ開ける
普通の子普通に怖いことをする
貧乏の昔話をする余裕
古稀過ぎて未だ治らぬ人見知り

柳井市 弘津 柳 慶

眠られぬ枕へ過去を呼びもどし
オイあれが死んだよと電話口
電話口孫を少しからかって
老人の欲へ詐欺師の甘い口
父の日に孫から何にも届かない
大波へ負けてたまるかぶちあたり

大阪市 西出 楓 楽

缶ビール一本今日のごほうびに
自転車を飲酒運転しています
浮世とや蛇呑む蛙きつといふ
よく笑う人の隣の席をとる

ウーロン茶で酔える男に油断せず
梅雨よ来い読みたい本がたんとある
寝屋川市 堀 江 光子

詫びに来て一席飲んでゆく男
男の子自分の城を早も持つ
近ごろは鶴も折れないカブセル錠
静かだが欠ければ穴のあく男

美しい姉を弟誇りにし
君も男だろうと止めさす
寝屋川市 岸 野 あやめ

年寄りにアメリカ村は恐いとこ
息抜きに天童よしみがピツタリで
同窓会ハメ外さねば損みたい
友逝って旅もグルメも色が褪せ

割勘でお酒に慣れる新社員
先輩と飲めばコンパとちがう味
先輩と飲めばコンパとちがう味

失業率の中に入っている私
コーヒーの味にうるさい定年後
生きていることが大きな役目です
海口市 三宅 保 州

血統はどうあれたくましい雑種

真夜中になるとごそごそしてる母

こっそりと医学書読んで医者嫌い

竹原市 時 広 一 路

蟻の眼に人間様の白いシャツ

縄電車の終点にある花の駅

カルテ気にしないお任せしてるから

野良犬に私が鬼に見えたのか

髭足してみても自画像気にいらぬ

お隣の車の音を聞く寢床

鳥取県 鈴 木 公 弘

言い訳は破れて捨てる紙コップ

野つ原に座った牛の眼と出会う

春日には穏やかそうな山だった

雑踏に浮かぶ犬掻きうまくなり

太陽を背にゆっくりと歩きたし

封じ手をして一枚の置きどころ

倉吉市 野 口 節 子

ざくざくと太古偲ばす廃寺跡

出陣の朝だ濃い目のお茶所望

一言を飲んで晴れ晴れして帰る

吹雪く日も開けて待ちます母の門

上を見てぶくぶく泡を吹いている

表札から見ると美人の住まいらし

岡山県 富 坂 志 重

ふくれたりしぼんだりして暮す今日

空箱はいくら溜めても空の箱

呆けないよあの世で亡夫さがすまで

あといくつ祝えるだろう誕生日

老人のための力の使い様無し

いい事が有ると命がおしくなる

岡山県 小 林 妻 子

お風呂の底に戦艦大和沈んでる

胸元のすき間を任すネックレス

どんこは承知田植靴の使命

三面鏡どれほど無理を頼んでも

借りて来た喪服はだあれにも内緒

あき缶が転ぶ悲しい世紀末

岡山県 矢 内 寿 恵 子

慟哭の涙地を這う敗戦忌

炎のかたち風のかたちで修羅の舞

謎は謎太古静かに眠るべし

マスメディア人を斬つたり刻んだり

欠け皿に盛った平和がゆれはじめ

あやとりの橋が遠い日に戻す

町田市 竹 内 紫 鏑

変体仮名習わず老いて歌碑めぐり

全通のバスを降りては石畳(箱根旧道を歩く)

日時計は補正が要るよ万歩計
運動不足同士対面動物園

回送も拳手は忘れずバス同士

詰将棋ようやく飛車を右折させ

鳥取県 奥谷彩子

掌の中に王手の駒を遊ばせる

わだかまりすんなり解けて聞き上手

夫婦なる縦糸横糸もろくなり

フルムーン愛ゆつくりとまだ紡ぐ

居心地の良い傘子等は翔び立たず

うっかりミス一人笑いになぐさめて

西宮市 牧 渕 富喜子

ニユース一面ニホンカワウソとき二世

はしり梅雨ほつとのど奥しめりたる

行き止り昨日の時を溜めている

軽く見たメイ・ストームの跡始末

梅雨晴れ間すこし気合いを入れ過ぎる

さくらんぼ老母がうれしい顔をする

米子市 白 根 ふ み

北壁を仰ぐ素直になつてゆく

北壁の麓は山菜の宝庫

北壁は版画のように夏山に

夏帽子なつ草ふかく消えてゆく

寝不足の子をしたがえてキス釣りに

ぼくのキス遊んでくれる叔母にあげ

地下街の流れる波にまだ乗れる

公園に老人憩う花は葉に

UVカット気にせぬ父の歯の白き

抽斗の奥に古傷ペンダント

プレゼントこの響きにはつい揺れる

八月十五日ムンクも叫びつづけてる

和歌山市 田 中 み ね

のし袋に向かうと筆が畏まる

サッチーが姑でなかったのが救い

雲を掴む話が似合う酒の席

まだまだ女当人だけがそう思い

「おさいじやました」言葉覚えて旅終わる

自分の事美人と思う平和主義

神戸市 山 口 美 穂

一張羅を着て首筋にエレキバン

お仏壇の前に老母居るそれでよい

一まわり小さくなつて母九十

老母そっくりと言われてさみしでもうれし

度忘れと誤魔かしただけ知らなんだ

小倉遊亀 赤が美事な春の花(院展)

岸和田市 高須賀 金 太

息抜きをしてる間がない梅熟す

新世紀雨水溜めて置かないと

立ち去った後の香りを大切に

酎ハイを飲む少年の反抗期

わたしならロボット犬は買いません
もうすこし静かに野球見れないか

大阪市 神夏磯 典子

御馳走は食べぬ八月十五日

まずいからまずいと言えぬお大臣

消しゴムに感謝して日々過ぎてゆく

晩酌で夫の旗色活気づく

まずい顔なのにファンが待っている

極楽と思える暮し茶がうまい

藤井寺市 高田 美代子

色白の女に似合う藍浴衣

ざるそばでいいなと思う三十度

真つ黒の猫が横切る黒い街

脱ぎきって竹六月の天をつく

マニキュアの赤サルビアと重なりて

わつと夏わたしも風鈴も寡黙

下関市 石川 侃流洞

父の日の父関白にしてあげる

まっとうに生き傍受法案気にとめず

もう寝るか猫に話して妻の留守

買いたいもの田舎にはない振興券

天命はいつまで続く紙おむつ

日の丸君が代 釈然とせぬ生き残り

大阪市 大塚 節子

立ち退きの庭あじさいの心映ゆ

新しい花芽にひかれ歩む母

タンクトップ無理やと思う齡となり

のぼらいでか昔のこいさん天守閣

ギブアップ城の二階で靴の番

踏切を渡れば逢える人なのに

奈良市 米田 恭昌

武者人形睨みをきかす四畳半

捨て猫と僕雨宿りする屋台

一代記妻に感謝で締め括る

どう風が吹いたか妻の軽い口

八咫鴉にナビゲートされ那智の滝

杉の木が邪魔する那智のフルシヨット

枚方市 森本 節子

犬に顔舐められ一日のプロローグ

幼き日の目にやきついた絵と出逢う

ガス灯のあかりが似合うおおえ橋

芝を蹴る駿馬をさばく騎手の鞭

ねこ避ける弱気な犬と散歩する

額あじさい青い小粒はエロスの石

守口市 結城 君子

一筋の輝き走る麦の波

老けぐあいさぐり合ってる長電話

吉村作治と共に楽しむピラミッド

雨よ降れ安吾全集待っている

季はずれの大きな苺値は聞かず

「水無月」を食みつつ思う姉のこと

黒石市 相馬 一花

カーネーション母は貰ったことがない

フェロモンが出るかも知れぬ赤を着る

どうしたら痩せるかケーキ食べながら

手洗いもせずにトイレを出る紳士

天井の節穴知らぬ子が巢立つ

美人だけ出るドラマには飽きがくる

広島県 藤解 静風

桃のまるさを手にして指で剥くいい日

ホクホクと描いてカボチャの絵が美味い

ガイドライン港をロックしたくなる

ハウスマカン過保護の味がしてならぬ

ウエストを優しくかばうアツパツバ

もったいなや雪花菜が産業廃棄物

西宮市 菊池 トミエ

柿若葉辻の交番いつも留守

古里も変る遠慮の有るところ

わらべ唄思い出してる鼻眼鏡

世紀末つかまるものの無い怖さ

無期限の片道切符持っている

ガーデニング覚えられない花の名が

寝屋川市 籠島 恵子

約束をまた忘れてる夏椿

生き方を見つけた人の目がきれい

忙しい人と呼んではティータイム

バードウォッチングペランダに置く遠眼鏡

足もとに水平線がしのびよる

六月の雫と流してゐる計報

鳥取市 上田 宣子

シナリオにいつも加わる太い影

歯ざしりへ少し拳をゆるませる

大伽藍いつも飛天に耳を貸す

飛行機雲ほどけるまでを無の時間

道草の好きな自転車買ってきた

深緑を観にゆく二個のにぎり飯

鳥取市 富山 檳榔樹

潮が満ち孫の産声詩になる

喜びも嘆きも呑んで潮満ちる

浮き世にもステンドグラス張り詰める

無限への道に轍のシルエット

頑固さを父の盆栽耐えている

手の平へ幸せ作り生きてます

犬山市 早川 盛夫

仲良しになろうね小学一年生

石蹴って蹴って下校のひとりぼっち

梅雨楽し登下校にある水たまり

分らない事ばかりなり生きている
目標はひとつ雑魚には目もくれず
おい居るかなどと悪友らしく来る

鳥取県

幸家單車

売れ残り仕込み半額セールする

我が家では猫も家族の座にすわる

満員の列車大きな荷を背負い

約束を守らぬ訳は別にある

猫の目で見れば人間隙だらけ

仕込まれた技術が後で活きて来た

大和高田市

岸本豊平次

医療出費五百三十円と交通費

日がのびた窓を眺めてティールーム

市場籠煮方も聞いた頃もあり

君が代を聞けば昭和天皇の背な

反抗期過ぎたか孫が電話に出

若葉マーク飛行機だつてある筈だ

大阪市

町田達子

亡妹の墓参俄に思い立ち

幾年経ても戦死戦災死は悲し

神秘なり鹿島の海に沈む陽よ

幾年月を歌う喜びも悲しみも

いつばいの話茶の間が更けてゆく

美術館「乾山と京のやきもの」展

雑踏にわたしも影も傷だらけ

砂川市

大橋政良

悪い子でないと親ならそう思う

大器晩成もう晩年をとおり過ぎ

さよならの背幅未練と書いてある

控え目に飾りボタンが自慢する

弘前市

佐治千加子

獅子吠ゆる如く万朶のさくら散る

東山魁夷 描きし道歩む

この道の右折の先にある視界

虚空より風鐸の音花吹雪

空の風うみねこ巢立つ日も近く

弘前市

高瀬霜石

墓参り父の桐下駄履いて行く

核家族だけど絆はちゃんとある

老母が待つ芋の煮っころがしが待つ

僕の血の中を流れる浪花節

ふるさとや夢追い人がすれ違ふ

弘前市

須郷井蛙

日本の料理はやはり畳部屋

愛犬が私を風にくれる

千手観音借りたいほどの農繁期

晩酌で体消毒しています

パパの酒時々ブレイキ故障する

弘前市 小寺花峯

少年の頃の記憶に青い海

不揃いの時計で子等を信じきる

ブランコが軋めく音は風を乗せ

木漏れ日を受けて気高い石仏

当選のダルマに虚偽の目を入れる

弘前市 蒔苗果林

綺麗事言った心があわてだす

小言呑みお茶はゆるりとまたなめる

若い日の恋にお札がしたくなり

草こぞりコレステロール解くいきれ

好きな傘買って雨待つ梅雨休み

弘前市 相馬銀波

この汗も無駄を覚悟の靴を履く

弱音吐くたびに盃はしくなり

風評の語尾に鋭い刺があり

悪友の肩もときどき頼もしい

ハードルに挑むと蟻の性になる

弘前市 一戸ツネ

新緑が散った桜を褒めている

使節団やはり桜の美女が来る

卍の街津軽じょんからあいや節

卍の里曲る死角のさわら垣

いちにちの出がらし飲んで締めくくる

弘前市 福士慕情

八月は僕の生まれた月である

裏木戸の軋みは風か恋猫か

好きだから少し意地悪してしまふ

喉元に刺さる小骨を持ち歩く

引き金に手を掛けている隣の子

弘前市 高橋岳水

自らを裁く他なき日の夕陽

少しずつ本音が浮いてくるグラス

肩寄せた日の温もりを忘れかけ

徒食する掌に重くなる飯茶碗

止り木に夢のかけらをぶら下げる

弘前市 今愁女

今ならば孝行できたと悔やんでも

惚けてても一一九番知っていた

花の命とうに過ぎたがまだ楽し

まず土を仕入れてからの花壇苗

プランターを増やしただけのガーデン

十和田市 阿部進

はっきりと言った一言誤解され

虎の子が儲け話に顔を出し

懸命にバツイチママが生きる日々

親子牛遊ぶ牧場に風かおる

親敷いたレールの上を歩かされ

十和田市 小笠原 敏 人

大宮市 八 田 敏

寺社見学又の思いをいつもする

バスツアー休憩毎に食べる人

旅先で味見の酒に酔っている

現代から遠いドラマに魅せられる

僕の餌残せと熊が寄つて来る

青森県 西 谷 大 吾

飢えし日のははを想えばソバの花

鬼だつてさみしい時は花を摘む

椿散る虚栄の彩が空しくて

散骨は宇宙銀河と決めている

ちょこなんと座っているのが親父です

青森県 諏 訪 柳 々

平和つてこんなに人の殺し合う

釘打てば桎目の板も割れやすし

さみしいじゃないなんかお話ししようよね

白神の山いっぱいの鋭気吸う

梅雨入りや心素直に濡れるかな

仙台市 川 村 映 輝

顔面麻痺好きなんども囁られず

カラオケに行つても音痴は音痴なり

杖を曳く妻のお供でスーパーへ

金魚みな猫に捕まり池淋し

低金利税はそのまま据え置かれ

新団地人と野鳥が巣を架ける

図書館がとなり便利でせわしない

スイミング女性パワーに気圧される

墓地に来て武蔵野らしき風に遭う

探し物ふえて余生も忙しい

八王子市 播 本 充 子

乾杯の真ん真ん中に哺乳ビン

ブランドを着て赤ちゃんが落ちつかず

献体の予約息子に止められる

気を付けて帰つておいで予選落ち

リクルートスーツを酷使しています

横浜市 菱 田 満 秋

彥星を探して君の一周忌(吉本青風君)

八月十五日の赤紙が語り草

結局は長生きをした方が勝ち

血の絆父の一字を孫につけ

眼の前で書き込むカルテ異状なし

横浜市 清 水 潮 華

おだやかな一日足の爪も切る

行く当てはないがかかさぬ朝化粧

励ました人から逆に励まされ

もう一度とぶ気にさせた褒め言葉

生きていて良かった今日が早く暮れ

横浜市 菊地政勝

愛妻も勿忘草が好きらしい
年金じゃ足が出ますと言われても
死んだなら保険しつかりおりますか
君が代と日の丸なんではいさらには
長考に厠の蜘蛛が先に出る

横浜市 後藤早智

飛行士の視線で見てるエコロジ―
エコロジ―アリ一匹にできること
エアコンを切り緑陰の風貰う
もうカラスやっでは来ない土作り
新任地より花便り茶の香り

静岡市 安本晃授

夏草の匂いが好きな農夫婦
悔いはない裏街道の土性骨
階段を昇り降りする母の唄
言い張った語尾がもつれて風になる
逆立ちと土下座を嫌う曲り角

富士宮市 渥美弧秀

人生の機微秘めて咲く富士薔
挫折した幼友を見舞った掌の温み
黄泉路から親友の歌ったセレナード
三猿が守り足りぬか凡夫婦
梅雨明けて詩と音楽が躍り出す

静岡県 蘭田 蓼 沓

保育器で手足を伸ばす自己主張
家庭不和の中に頑固な父が居る
満ち足りて尚満ち足りぬ子等の欲
灰皿へ今日の不満をねじ伏せる
一期一会駅はコントを生み続け

可児市 板山 まみ子

言訳を一口添えて晩の膳
特売のキャベツ毎食出てもらう
一石も社会に投げず土いじり
何色の蝶になるやらこの毛虫
Gパンをすつきり着たい水泳着

富山市 舟渡 杏花

いつまでも濡れてる傘を叱りつけ
一期一会のまぶたに残る辻が花
バックミラーを忘れていた不覚
ラーメンでいいわと言ったのは昔
万歳が終り両手の寂しそう

富山市 酒井 輝

総入れ歯それから磨く日に三度
人生の幕をD O C O M O が遠くする
面接で父は税史ともう言わぬ
管理職手当ですよと妻がくれ
物陰で見てるイジメで無い喧嘩

富山市 島 ひかる

京都府 稲葉冬葉

愛されて愛して誓い合う二人
肩の荷が降りて新たな荷を担ぐ
藁の家木の家レンガでも不満
沢庵をみじん切りするこれも愛
試験管いのちを作る罪を積む

富山県 増田 紗弓

生駒市 麻生 アート

反対をされるとやたら走る癖
どくだみの白さをそつとしておこ
雑念をふりきりナースシューズ履く
病棟の夜明け静かな海が見え
好転を申し送れた夜勤明け

京都市 山海 友熙

生駒市 北山 悟郎

南禅寺辺りの水は祭り好き
三十六峰祇園囃子は子守唄
関雪の世界で古都は生きている
京訛りおんなひとりが生きている
女坂登りきれない夏の章

京都市 都倉 求芽

大和郡山市 坊農 柳弘

にぶい陽へ蝶もだらだら飛んでいる
自然への罪かも知れぬ殺虫剤
大仏さんの手相が一度見てみたい
旗振りが老人力とおだててる
墓参りアヒル新幹線で姉は来る

ハムスターを友に少女期過しけり
やつと娘と小さい輪がかけました
鬼心仏心ワイングラスが二つあり
自作自演の幸せに良しとする
よく働いた古い鉢に暇を出す
一度でいいカンラカンラと笑いたし
つぎつぎと声の恋人ラジオから
昔踊ったタンゴ ミロンガ遠くなり
人間の知恵越えて来る蟻の道
七十七今もさまよう羊にて
老人の血青菜奇麗に洗いさり
ウッブンを大空向けてカッとばす
不器用に歩き続ける足一本
欲捨てれば心は軽く清し
老人の残り火馬鹿にしてならぬ
阿波おどり不況蹴散らす足さばき
愛一途カンナは赤く赤く燃え
旅ひとり恋を納めに風の盆
夏風邪もやっぱり玉子酒が効く
俄か雨シャワー代りのキャンプ村

奈良県 中原 比呂志

自面自賛幸せよぶというホクロ

福耳のあたりうろつく貧乏風

福耳で清貧健康だけが優

ふっ切れぬ迷い鉛筆を削り

頬杖でまともらぬまま夢の中

大阪市 津守 柳伸

国産にこだわる姑のビーナッツ

鴛鴦のペアーほのぼの高千穂峡

発着へ静まり返る空の旅

初恋へタイムスリップさくらんぼ

来て騒音来ずに不安な血の絆

大阪市 川端 一步

あじさいの彩であるじの顔が見え

いねむりをしかけた僕に矢が当る

寄り道もいいではないか孫十五

貧者にも二十四時間という宝

嘘だとは分かっているでも出さぬ口

大阪市 寺井 東雲

六月四日カバも口開け歯の掃除

ご話の休み時間にコーヒー飴

百点の嫁惚れさせた子を褒める

鼻の汗嘘がみんなに読まれてる

手回しに男女併用名を用意

大阪市 榎本 落児

絶品の干物みつけたうれしさよ

ダイオキシン地球の声が聞こえます

読んでみたい絵本があった買うと決め

法隆寺手水舎の字に涙みあり

長谷寺の観音さまは恋もきき

大阪市 川原 章久

肩寄せて三年坂の一つ傘

お静かにオバチャンこはバスの中

年寄りはややおまけで鐘三つ

匿名の相談欄は嘘だらけ

妻小言酒も煙草もやめたのに

大阪市 北 勝美

咲く花の弁の数にもある主張

介護が日課まだまだ逝けぬ米寿生き

スプーンを持ってない妻をいとおしき

菊挿し芽 去年の花をもう一度

新聞テレビ介護のニュースへ釘づけに

大阪市 河井 庸佑

出る杭は打たれる覚悟自己主張

順調に進み過ぎへも気を遣い

喋り過ぎ相手に利用された悔い

対立意見今日は負けるが勝ちで行く

秋に入るしばし我慢という暑さ

大阪市 井上白峰

謙遜の影に自信が見え隠れ
苦勞性またも火中の栗拾う
方円の器に馴染むお人好し
自分史を粉飾しての厚化粧
生命線信じて辞めぬ酒煙草

大阪市 本間満津子

長生きしたわ そうやなあ そのあと無言
句を忘れず旨い露地もの探しても
柱へおでこ小さな瘤で有難う

食べてみてえわが家家伝のお塩昆布
熱い心に運が味方をしてくれる

大阪市 鈴木トヨ子

人生の引き際見事な亡母だった
厄納め帰りの足の軽なこと
嫁姑ガラスの城で恙なし
客が来てやっと息抜き出来ました
いい嫁を当てたと思う喜寿の春

大阪市 小林周信

背伸びした男が歌うマイウエイ
追伸は予定通りのものらしい
部下連れて叱られに行く打合せ
相槌を打たれ話が延びてくる
緑陰に将棋名人リーグ戦

大阪市 杉澤汀

命までかけるほどでもない祖国
ご先祖の汗と涙の棚田撮る
達者かとお線香ゆらし亡母かえる
女人高野鐘は青葉を縫うて午後
検察のメス筈を縦に裂く

大阪市 松尾柳右子

少しだけ上がった年金のゆとり
孫来ればすぐ説教の丸い背な
緊張へ大きなクシヤミ波が立ち
握力をタオルしほりに知る低下
旅先に携帯電話落ち着かぬ

大阪市 川内叭笑

チャン抜きでいつの間にやら呼ぶ仲に
長者番付縁が無いのに見たくなる
いとし娘が結納金で買われ行く(娘婚約 2句)
恋故に終の住まいは北の果て
顔見知り増えるばかりで職は無し(息子失業中)

大阪市 岡本久峰

中内と旧知テレビへ釘付けに
初恋に似た黒髪のキャミソール
神戸コロッケぶら下げひとり飯食らう
帰りきて我が大阪の温かさ
クレーン唸る地方の時代に目をみはる

大阪市 清水絹子

向かいより五円安いに列がで
世はうつり年金せつせと子孝行
杖の翁先にお越しの待ち合わせ
商売ものつまんで塾へ寿司屋の子
喜寿近しいつまでのやばミズスマシ

大阪市 田中節子

何となく芝居がかったお節介
叱言幸兵衛舅も今じゃ仏様
おちよぼ口でふくれてるのかチューリップ
媚びているのかお為ごかしの泣き上戸
盆来れば悔いふつつと母想う

大阪市 中田あい子

資産守る老舗代々養子嗣ぐ
思春期のわが子と距離がありすぎる
ピカピカに鍋光らせる姉はミス
すぎた苦を笑うて話せる年となり
杉木立ぬけた遍路に光る海

大阪市 川久保陸子

激論の後は仲間とコップ酒
きのうハブラシ一つ捨てました
ひまわりのような母です古いネガ
アンケートそれからの事わからない
錆釘の主張斜めを押し通す

大阪市 板東倫子

店閉じるドミノが倒れて行くように
客去んでママも自分の顔になる
サラ金のボスが高額納税者
芹茗荷添えて地酒が故郷から
みどりの日ガーデニングの花の詩

大阪市 玉置英子

何か求め只管歩く遍路みち
そちらでも枝雀ファンになれますね
サクランボ帰りの遅い娘待つ
進物にあちらさまへは花山椒
子を褒めることは今でもまるで下手

大阪市 奥田良子

笑うこと少なくなつて梅雨の入り
ヘルパーはどんな人かと梅洗う
母の夢助けもとめて明け易し
短夜の三途の川へ向かいおり
鉢植のくちなし咲いて更衣

大阪市 稲本凡子

惚け過ぎぬようにと頭へ言い聞かす
運動会たった一人に父母祖父母
苦勞した甲斐は娘に背負われる
カルチャーへ行つた結果が出てこない
居候に我が家の空気乱される

病癒えるまで降りつづけ雨よ雨

堺市 黒田真砂

心の中の雨にたずねてみる明日

咲く花も散る花もあり庭の景

星月夜あの世この世にある未練

慰めて空しい風に会うばかり

堺市 柿花紀美女

母のスカートしつかりつかみ姉娘

かぎりある命へ妹と今日ひと日

喜びを根こそぎ持つて娘は嫁ぎ

障子貼りかえてまばゆい城となり

鉢植のパセリ老いの食卓に

堺市 志田千代

真っ白のハンカチうまい芝居する

お芝居のように葬式すすんでる

子供歌舞伎ボーイソプラノ見得を切る

ここは一つ芝居にのってやらないと

見逃がしてならぬ芝居の咳払い

堺市 神原文

阪神ファンと信じて話持つてくる

天国へ扉を開く貴腐ワイン

何にでも飛びついてみる母さん似

このように育ててくれたのは夫

老人と思わないのは油断かも

夏服は女の季節男の目

遠来に昨日別れたように遇う

ゆさゆさと大きな月が出て味方

漢方の湯気ゆつくりと優しゅうに

ティファニーの時計古びず髪に霜

高石市 浅野房子

踏み切りで高架になる日待つている

エンドレス生きる限りは飲むくすり

アート展ベレーの似合う人ばかり

リビングで昔の映画見えています

下積みのキャリアが光るアドバイス

貝塚市 池田寿美子

八月の想いを合歓の花によせ

葉ざくらの下で介護の意見など

ヘアークット昨日に変わる風の彩

涼しげな皿にテラスの梅雨料理

世紀末とにかく生きるケセラセラ

和泉市 西岡洛醉

顔の皺苦労働ねた妻も古い

分身の歩幅守って影法師

五分粥に生きる命を預ける

運命の一步を賭ける青い空

太陽に向かう素足の軽やかさ

岸和田市 原 さよ子

古稀すぎて低いかがとの靴にする
息抜きのはずの趣味でも燃えてくる
夫とする散歩はいつも氏神さま
占いに凝って名前を二つ持つ
お賽銭上げて気のすむ母を連れ

岸和田市 原 苑子

幸せの笑顔が映える訪問着
着ることの無きよう願ひ喪服縫う
ばあちゃん形見生かした娘の晴着
降臨のごとみどり児を捧げ抱く
子の嫉して下さいと保護者から

岸和田市 長谷川 呂 万

夫々の神を信じて多神教
だんじりは泉州の街駆け回る
生い立ちはどうあれ今の君がいい
縄のれん取り敢えずのあて冷や奴
ノムさんが純金になる百貨店

岸和田市 井 齋 一 齋

番人に番人がいるお役人
月よりも近い標的に誤爆する
越境に群がる魚奪いあう
長い不況粗大のごみが質を変え
泡三つ友が欲しいと言う金魚

岸和田市 井 伊 東 吉

大戦の悲惨忘れた防衛論
今年夏暑い予報に気が減入る
冷蔵庫開け閉め増える梅雨の入り
国技だと言ってはおれぬ相撲界
不用品倉庫代りになる実家

泉佐野市 山 本 蛙 城

何てこと天に銃射ちはしゃぐ国
カルチャーのダンス男が不足とか
傍聴法軽く日の丸なお軽く
コソボ停戦あとあじ迷彩服に似て
眼の手術日帰りですと言う笑い

八尾市 生 嶋 ますみ

賞味期限めがねかけかえたしめる
散歩するコリーの顔は哲学者
半生の日記を焼いて未練なし
久しぶり娘と歩くおしゃれして
駅の隅敗者のように吸う煙草

八尾市 宮 西 弥 生

雨の朝和食にかえる旅気分
風景が夏に進んで水の音
花すんでしずかに戻る詩ごころ
梅雨はれ間つづいて透けるのも女
世界遺産観光マナーを心得る

八尾市 高杉千歩

えんやこらせ終生の地や河内八尾
二千年へ脱皮したくてヨーロツパ
フルコース半人前も食べられぬ
鳩ぼっぱばあちゃんだってピアニスト
持主が三度も変る両隣

八尾市 宮崎シマ子

膳まがりの夫へ合わすハイハイハイ
先方が折れたと互いに言うている
人助けの話がはずむ船溜り
花詩集興奮をした母が読む
ポケットに端数の小銭風薫る

八尾市 高橋夕花

他人さんに飲んで頂くナポレオン
言いたきこと言えず雨だれ聞くばかり
出嫌いの夫に従う書道展
夫婦してゆく末語る梅雨晴れ間
もう少し生きねばならぬ爪を切る

八尾市 村上剛治

食べてチヨンだから毎日がんばれる
耳底に怒りを溶かすわらべうた
汗流し摺んだ運を手で囲う
立つ虹に背を押されてプロポーズ
悪友が支えてくれた立ち直り

八尾市 村上ミツ子

代筆の文字に力が入り過ぎ
耳栓をしても聞こえるせみの声
いすとりゲームやめると座る椅子がない
数珠を繰る小さな幸も数に入れ
ちびた石けん二つびたつくつつける

八尾市 長谷川春蘭

冷や奴やたらに崩し鬱はらす
孫のプラン梅雨前線にゆさぶられ
生かされて生きる倅せ豆御飯
望郷の念たちがたし遠蛙
牡丹の白に不浄はゆるされず

八尾市 吉村一風

いい話持つて地酒と娘来る
年金で生きる欲出る顔の艶
父の声聞かぬその日は落ちつかぬ
ボケベルを持つてヤングの気も分かり
うちの嫁てきばき私まで使う

八尾市 神原まさと

新しい靴が腰痛誘い出し
湯加減で同じ玉露と思えない
現役と話がずれる同窓会
癌検査肉をとられただけで済み
生きられる水を求めている螢

松原市 玉置 重人

曾孫ヨチヨチ私の骨を抜く
あり余る時間があつて何もせず
夫婦ですおんなじものを食べてます
パチンコで振興券を使うてはる
毎日が大切大切に歩む

松原市 小池 しげお

春宵や考えごととは後回し
スーパ―へ行けばいつでも居る男
真実は言えず男は捨てられず
改札の向きは別れた時のまま
葬式が済むまで偉さわからない

羽曳野市 吉川 寿美

よもぎ餅噺ばなしと割り切れぬ
ポケットの中で握っている未練
仏像と深い話のひとり旅
何の野心も持たずそら豆天を突く
蛇行した伝言てにをはが替わる

羽曳野市 酒井 一壺

門構えだけで暮らしがわからない
水の出る蛇口にいつも有難とう
人柄と立派な住まいつり合わぬ
新緑になると行きたい寺がある
新緑のシャワーを浴びて散歩道

羽曳野市 福田 満州

おかえりと蛙合唱してくれる
大切にしすぎてどこへ置いたやら
すかたんと蓼食う虫と半世紀
すかたんの妻を残して逝かないで
捨てられず十年前のブラウスで

藤井寺市 福元 みのる

美女の基準こうも変るか四世代
美人だと思いこんでる出たがり屋
整形美人心まではとゆかぬもの
学級崩壊教師の幅の見直しだ
末孫にパソコン操作習う齡

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

公園の池の小さい橋が好き
愛情を月の大きさと答え
溶け合うて蛭になった覚えあり
沙羅の花地はオアシスと心得る
縄とびで叱られた日に戻りたい

藤井寺市 楠 昭子

落ち込んではおれぬ妻子を守らねば
夫留守こんな部屋が広いとは
鼻声が高いおねだり言う兆し
噂まき散らしストレス軽くする
仏壇の座ぶとんだけが本音知る

富田林市 藤田泰子

棘有つてこそこのバラだと思つてゐる

そのうちに馬にも乗つてみるつもり

性懲りもなく瘡蓋を剥がしてゐる

去勢した猫と静かに春の宵

虹が出てやつと私の雨季終る

富田林市 片岡智恵子

期待した椅子はとんでもない硬さ

白いご飯に抱かれて光るさやえんどう

笑つてゐる写真すこし減つてゐる

夕陽しずむ海で詩人になつてゐる

蟬籠の未央柳がいと美しい

吹田市 山本希久子

生きざまの灯よはかなげに螢とぶ

切り札のエースはないが負けられぬ

封書一通ときめきを秘す花の午後

あじさいはブルー友人の喪に服す

終局は意外に早い恋螢

吹田市 瀬戸まさよ

広すぎて圧倒されるジュンク堂

熟年のハデな水着がよく売れる

ストレスを喋りまくつて無くす術

誘ひ合いごみ収集日くるカラス

教材につゆの箕面へかたつむり

吹田市 石原靖巳

定位置に妻が眠つてゐる安堵

合点と言われて嘘がうろたえる

父の日は花より酒があればいい

緑青がじわり浮かんだ第九条

リングからだんごへ歌の五十年

吹田市 野下之男

小さくても胸を反らして朱鷺の雛

灯台の明かりに見える夫婦愛

嫁はんに空耳使う年の功

鉛筆の芯も尖らせ待つ時間

アクションを妻の長風呂見せてくれ

枚方市 前たもつ

感謝するために三度の食事とる

小さくとも捨てずに植える葱の苗

幼稚園のアヒルが死んだ大事件

定期的に歯科医へ通うエライ人

好きでなかった父に似てくる絆

枚方市 鈴木政子

桐の木よ孫もボツボツ適齢期

男性で一番オシャレはお坊さん

残雪に映える穂高に満喫し(奥飛騨紀行 3句)

下山バス振り向く峰をガスが満ち

露天風呂友と二人を月覗き

枚方市 寺川弘一
金婚式同じ匂いになりました

六十年わたしを抜けてきた空気が
京都から風を運んで来た扇子
人生を真面目に生きて怒りっぱい
うちの子は法器晩成だと思っ

大阪府 谷口 義

新緑の中を護送車走り抜け
とりあえずホウレン草を食べておく
不幸だと思つたことのない金魚
八百長の相撲も稽古しとかねば
いけずは病氣死ぬまで直らない病氣

大阪府 森下 愛 論

左手が生きて生きたる朱のグラス
素寒貧よばれる酒へ本音吐く
千鳥足くらの酒でやめとこか
朝寝して昼寝宵寝と生きてます
寺町を通過して人生しみじみと

大阪府 安永 春

雨降らず紫陽花が泣きよりますよ
面白いことないかしら風に聞く
砂ぼこり残した道は消えました
盗る物も取らぬ空巢を騒がたて
他人はひとライバル自分だと思っ

茨木市 堀 良 江
抱き切れぬ程に大きくなった嘘

ご機嫌になれば頭を叩く癖
無雑作に肩書並ぶ名刺出し
喜怒哀楽その数ほどのしわの数
再見を約束しないドラが鳴る

茨木市 藤井 正 雄

公園に花あり恋の四季もあり
新聞で兜を作る孫の守り
自分史の巻頭くにの山と川
人許すことにも慣れた皺の数
母の目の合図は父の低気圧

茨木市 井上 森 生

絵から出た虎の話を信じよう
世直しの歌か水田の藁
のはほんの日々背広を脱いでから
康成百年愛しむころ墨の跡
嘴で世紀の殻を割って出る

高槻市 川島 諷云児

青春は戻ってこない砂時計
一歩ずつ子の足音が遠くなる
トラブルが嫌いでお辞儀ばかりする
倅せはわが娘に勝る嫁がいる
冗談が焼け木杭に火をつける

高槻市 井上照子

寝屋川市 森 茜

きつと又会おうと握手離さない

蔓のない朝顔きつと偏屈だ

OB会還らぬ日々を笑い泣き

叙勲にはいくらもろたと情けない

竹藪の雀追い出し人が住む

高槻市 傍島克治

陰口を言うから席をはずせない

七人の敵より妻に身構える

雌伏十年色あせてくる青写真

何事ぞ無神論者の宮参り

出し惜しみして老人力を蓄える

寝屋川市 平松かすみ

八月の東西南北 南無阿弥陀

肩書が三つもついた町内会

役所から老人ですと言うてくれ

検査日はノーマイクでと注意書

足摺へどの橋渡って行こうかな

寝屋川市 高田博泉

野仏はだまって見てるからこわい

盆休暇お世話かけても帰ります

夏休みタフな子供に舌を巻き

名門も合併したり消されたり

くたびれた靴で明日も宮仕え

はかなげな人のルージュが濃くなる

ご無沙汰は姑も臥っていた葉書

極彩色の寺も極楽浄土なり

ときどきは漂白剤に晒す首

良い名前つけて貰っている名札

寝屋川市 江口 度

菖蒲園子等はざりがに釣っている

しまなみ海道 景を愛でつつベダル踏む

すんなりと決まる案から先に出す

暗黙のルールか灰皿置いてない

不意に来る計報の多い歳となる

寝屋川市 酒井 勇太朗

代表になった途端に燃えつきる

酔うほどに許せぬことが彷彿と

酔眼の美女に睨まれ身が竦む

相場の目経済うとい妻が上

月一度心洗いに孫が来る

寝屋川市 北岡 波留吉

感泣して妻抱き締めた復員日

腕白も素直に拜む原爆碑

散った筈の戦友と出会った九段坂

大陸で命拾った暗い青春

日本の空一際映えた復員日

豊中市 田中正坊

喜寿古しダブルセブンとしゃれてみる

まだ十年あるので保険解約し

大正ははるか昔となりにけり

恥ずかしい句ばかり並ぶ句文集

誕生日アイスワインの栓を抜く

豊中市 吉田 あずき

二上山悲運の歴史稜線に

空豆と話すわたしも空が好き

不意に海見えて呼吸が変わり出す

たそがれの巢に子つばめの口並ぶ

父の日を父でない日にして欲しい

豊中市 井上直次

辞書繰って明日の言訳考える

約束をしているかのよう今朝も会い

夫婦にも個性があった風邪薬

年金者小さな財布握りしめ

愛しさが過ぎたか奮開かない

豊中市 湯浅馬洗

喜寿祝 妻の支えて尾瀬めぐる

水芭蕉見たさ一念妻と杖

残雪が溶けて戻った水芭蕉

足元を確かめのぞく水芭蕉

集合に間に合い汗の鳩待峠

豊中市 松岡久留美

子沢山労苦にたえて母つよし

正直で我が家はいつもガラスばり

向かいのホーム会いたい人が立っている

口べたで思いのたけが通じない

同窓会互いに老いてうら哀し

豊中市 滝北博史

足音を隣家の犬に疑われ

ピンクのバラに未央柳の黄が似合う

眼を病んでもラブレターだけ読める喜寿

出世すると意外に多いデメリット

しくじりをポストに入れて気付いても

箕面市 岩津 ようじ

子は宝 宝が金を食いすぎる

よくもまあ点滴ミスに輸血ミス

雅やかに疲れて帰る冷泉展

許されぬ恋を何とかするドラマ

もう亡母に死なねば訊けぬことのあり

箕面市 出口セツ子

悲喜愛憎言い合う相手居て楽し（結婚記念日）

腕枕されて鼓動を聞いている

口紅の赤乱れた日もあるんです

プレゼント幸福過ぎて恐くなる

書くことが無い幸福もある日記

箕面市 椎江清芳

大阪府 米澤 俣子

入り口で消えるお供の影法師
灰皿に通らぬ自我をねじ伏せる
お別れの握手花束持ち替える
階段を一つ登ると敵が増え
ダム出来て狸囃子の寺も消え

池田市 栗田久子

和歌山市 古久保 和子

降る星のこの安らぎをあなたにも
フェロモンに蛾もわたしも操られ
叱ってはみたが理由が見当たらず
浜風に昼顔淡くそよいでる
夾竹桃 朝な夕なに夏の色

池田市 岡本 吉太郎

和歌山市 青枝 鉄治

女文字余りきれいで冷たいな
ごみ箱にした地球もう許さない
運命の分れ道すつとやって来る
心では許していても口にせず
幼子の清らかな目を見反省す

大阪府 榎山隆盛

和歌山市 福本 英子

六月の日記は雨の物語

雷鳴が一つのヒント謎が解け

開運の朔日まいり欠かさない

いくじなし思わせ振りの恋のまま

失った恋も時間に洗われる

レトロ調などと流行おくれです

スピーチのさわりを本で仕入れとく

ご破算にしたいひとこと胃にもたれ

嘘だとは知りつつ乗っていたわたし

お妃のおめでたのごと朱鷺の孵化

和歌山市

勿体ないと思わぬこともダイエツト

補聴器を外し無敵の父になる

どちらにも免疫力のない世代

脱いだ靴の形のままに客の声

拍手した手から乾いて行く会議

和歌山市

億の金釣る磁石持つ金バッジ

顕示欲強い男の二枚舌

待ったなし今日も潮満ち潮が引く

子は宝ときに宝で苦勞する

忠告ははつきりしてる友の語尾

和歌山市

窯の火のまだままならぬ釉

奥山の狐のその後聞いてない

ブライドを緩め金魚の糞になる

訪問販売もう怖くない犬を飼う

人前でシャツが好きだと言ひそびれ

和歌山市 堀端三男

俄雨に逢つてさよなら言いそびれ
ひらがなの自分史ぐらいなら書ける
醉わないと本音が吐けぬあかんたれ
無調法よと笑つた淑女虎になる
返しきれない恩を残され先逝かれ

和歌山市 榎原公子

あじさい忌やボな仕事に追われている
大の字になつて悩んでいる小事
雨しとど母娘が背負う離婚歴
登園拒否ベッドの中に雨が降る
螢火を追えば父なり母であり

和歌山市 山田高夫

自己暗示眠り薬が効いてきた
不治の身と知り悶悶の夜を明かす
かきむしる胸のつかえが吐き出せぬ
帳尻を合わして閉じた終の幕
一陣の風が吹き消すいのちの灯

和歌山市 桜井千秀

のらりくらりと誤魔化すつもり蝶が舞う
誘惑に脆くて返事軽くする
体温は低めでわたし情熱家
辿り着いた頂上風が吹き荒ぶ
駄目押しの一手空振りだったとは

和歌山市 木本朱夏

紫陽花の径過ぎて風着くなる
寂寥をあつめ紫陽花着い毯
紫陽花の白は寡黙に人を守つ
蓮の葉の破れから見る地獄変
佐用姫の袖が重たい唐津は雨

和歌山市 福井桂香

櫓が軋みゆるりと時間やり過ぐす(大津水郷めぐり 2句)
魂が葦の間に間にたゆとうて
スカイレストラン琵琶湖一つをのみ尽くす
待ち時間パステル調の病院で
雨垂れを明日へ繋ぐネックレス

和歌山市 堀畑靖子

六月の変りアップが売りきれる
いつもの場所で今年も飛んでいた螢
ハプニング続く生命線をみる
宇宙食たべると夢が壊れそう
こんにくを私ごのみの味にする

和歌山市 岩本美智子

時計草 時の記念日忘れない
同じ刻 病夫と分かち合っている
ふたりだけの時間を神はやつとくれ
裏返すことはもうない砂時計
想念は通じるものよ五月晴れ

和歌山市 楠見章子

山深い峠の茶屋で飲む紅茶
少うし嫉妬うしろ姿のいい女
ちよつと誉められても元氣出るわたし
向日葵が満開きらり雨あがる
老人力耳は驚かなくなった

和歌山市 山口三千子

出遅れて私の指定席がない
子育てを終えて余生の介護論
人並みの尺度で夫測れない
失点を許してからの空回り
孔雀仙人掌の命は短すぎ

和歌山市 玉置当代

お茶摘んでつんで今宵も老母ひとり
チュンチュンと昼寝の耳を刺激する
親一人子供ひとりのもたれあい
またチャンス掴みそこねてから励む
まだ余韻残して燃える乱れ髪

和歌山市 垂井千寿子

思いやりという雨待ってる都市砂漠
CMの縁無いダイヤよく光る
見ない振りしようナイフが光りそう
健康な顔が住んでる陽の匂い
リストラという泥舟に乗せられる

和歌山市 細川稚代

十年の歳月埋めた日記帳
過去形にするにはバラが赤すぎる
造花にも寿命があつて捨てられる
築二十年ボツボツ不調訴える
聞き役に回り会合恙無し

和歌山県 中後清史

半世紀風化してゆくきのこ雲
鳩が舞い降りて風雲急を告げ
言論の府で拙速な口封じ
対岸の火事ではないぞこの火の粉
火が付いてから踊りだす平和呆け

神戸市 中村ゆきを

青年僧さわかにかにして疲れおり
悲しみよバイバイこんなに晴れた日は
手を握り野仏様にみつめられ
駅裏で子猫抱いてる落ちこぼれ
炎天下女行商骨太し

神戸市 池田善守

衣食足り心乏しい子があふれ
金よりも時間いっぱい定年後
愛すれば汚いの文字辞書になし
神戸まつりパレードの花サンバ行く
この不況病院さえも人まばら

神戸市 木村 貴代子

学ぶことの楽しさ知らず町あそび
少子化をなげき母にも深夜勤
百色の緑で描こう五月の絵
大本営よみがえりくる傍受法
残業はなくしサービス受けてます

芦屋市 黒田 能子

冷房の部屋で食べてるかき氷
打ち水の匂いの中のにわか雨
ゴミ置場やはり豊かな国に住む
髪染めず私は私らしくする
許し合ういずれ一人になるふたり

尼崎市 春城 武庫坊

逆風があるから男磨かれる
味よりも腹が空くからよく食べる
不登校の児童が画く黒い雲
今年の務め果して桜緑衣着る
友眠る護国神社の温い土

尼崎市 春城 年代

無駄骨を折ったが夕陽美しい
絵手紙の百合が匂うて情け匂うて
老いたなと今ほど切に思わざり
花たちに語りかけたら風匂う
やさしくて夫のくせの迷い箸

もの言わぬから美しい搔き氷

チェンバロの音色 青春悔い多し

諦めも憎悪もストロー折り曲げる

解り易いことだ天気が顔に出る

胸の支え治まったらしピアノ止む

尼崎市 的場 十四郎

子を育つマリア近頃遊びすぎ

夏帽子深めかぶっている若さ

臨終もさわやかだったと言う一生

赤いバラ咲くと古疵目をさます

ためらわず長い不況に立ち向かう

伊丹市 山崎 君子

うちの萩年に二度咲くお利口さん

たてがみをリボンでおしゃれダービー賞

愚痴きいてくれる友あり熟睡す

冥土の花見往復切符あったなら

原爆忌百合あなたの顔になる

西宮市 亀岡 哲子

ささやかなプライド箸を箸置きに

下駄を履く粋なら負けぬ父の足

罹災地に戻る約束あり計報

賑やかにドッコイショとて良き集い

忙しい夏だ阪神勝っている

西宮市 門谷 たず子

入院の話に沈むレモンティー
齒ブラシが一本になる梅雨じめり
いわし雲 石切さんへ詣ろうか
照る日曇る日それでも飯は炊けている
蝸牛 無題の生を演じきる

西宮市 西口 いわゑ

日記帳去年の今日も微熱なり
夫妻 世界それぞれ本がある
トランプに人間軽くあしらわれ
大ジョッキ此の世はみんな華になる
はさみでは切れないもののある浮世

西宮市 奥田 みつ子

あじさいの封筒 雨に濡れて着く
少年のかなしみ石を蹴っている
空っぽの頭を活字通り抜ける
久しぶりほおずき鳴らす姉いもと
定年を知らぬ書齋のペン冴える

西宮市 山本 義子

身についた我慢なかなか抜けきれず
タンポポの安住の地がない世間
足腰に問いかけプラン立てている
三面鏡見なくとも済む老い化粧
年金で日々自由とは淋しいね

西宮市 井上 松煙

鶯よ雲雀が聞けず佗しいよ
朝市に目を皿にする主婦の顔
公園のバラにアベックよく似合い
子を叱る先ず深呼吸一一回
きつちりと割勘にする老婦人

西宮市 長谷川 淳

横着が先端技術生んでいる
今の吾梅雨の晴れ間に似たところ
大掃除亡父に見せたい物が出る
七光り同じ臭いの社長室
怖いけど懐かしがっている地震

宝塚市 黒台 伊佐武

貸と借 妻にはいつも借ばかり
トラブルをチャンスに変えて仲直り
古稀なんて俺には何の用も無い
強がりと言える間は安心だ
はつきりと言った寝言は覚えなし

姫路市 古川 奮水

目かくしの背なに嬉しい笑い声
沙羅の花盛者必衰頭垂れ
芯のある言葉が融けぬ半世紀
お百度の歩幅にそうた石畳
ジーパンの軽い動きは妻の影

相生市 中塚礎石

労働歌とんと聞かなくなった春
古希迎え同期の桜散りはじめ
居酒屋の味を覚えて厨に立つ
寝たきりの喜怒哀楽は目の高さ
念仏が聞こえてきそう蟻の列

兵庫県 大谷幸次郎

点滴で静かに生命補給する
仕舞風呂ニユース遠くに聞きながら
追い風も逆風もない風見鶏
病床で作る笑いに囲まれる
酒たばこやめてしっかり薬飲む

鳥取市 岩原喬水

強精剤変えても多分駄目だろう
雑草と貧乏いつも根が切れぬ
右左分らぬ孫の罪で済み
かぎりない欲が顔から読みとれる
うちの子はのびのび育てあかたれ

鳥取市 杉本孝男

連れ歩く犬のおしやれは美女に勝ち
背かれたショックも母は子に見せぬ
敵に勝ち己れに負けた日の誤算
捨てた親友社長になって逢にくる
餌せびる鯉にも上手下手がある

鳥取市 植田一京

スケジュール一ぱい抱いたままに梅雨
風の彩うれしい時は見えてくる
いろはにはへと月日流れていったきり
自由とは深い寂しさかも知れず
昨日より今日は前進していきたい

鳥取市 倉益一瑤

どくだみを一輪活けてわが宇宙
またしても花屋で足を止めている
引き金を引かぬ勇気を誉めてやり
前髪に眉間のしわを隠してる
ライバルの挑発に乗り震度七

鳥取市 福田登美

模索する余生に花の種を蒔く
愚かなる者も極楽夢に見る
飽食の罰を怖がる戦中派
躓きが平気になって傷が増え
かつこ好い男に見える夏祭り

鳥取市 岸本宏章

パパよりも大きくなれと肩車
ライバルに少し弱味も見せておく
処分場反対してもごみは出し
どんぐりも頭一つを抜けたがる
ノーと言う鬼をこころで飼ひ慣らす

鳥取市 岸 本 孝 子

極楽と思える今をラップする
一日一善至難の業と思ひ知る
六畳の城で私をみがいてる
鉛筆と遊ぶに丁度いい雨だ
臆病でいつも浮輪が離せない

鳥取市 武 田 帆 雀

愛嬌はないが裏切る眸ではない
子の夢に長い梯子を買ってやる
焼き鳥で喉越しがよいビヤの月
片方の耳で判断してならぬ
先頭に出たいが背なに傷がある

鳥取市 坂 田 和 歌 子

ゴッホさん私も耳を落としたい
戦闘の女神の乳房みごとなり
雲雀野に雲中菩薩おめみえか
阿弥陀さま見ながら描いた曼珠沙華
唇にホクロが二つ無口なり

鳥取市 西 村 黙 光

受け止めの願いを託し畑買う
鋤を打つ浮き世離れた別天地
種蒔くと野鳥が札を言いくる
鶯や雲雀や鳩に歌習う
鶯は顔を洗って出直せと

鳥取市 前 田 一 枝

点滴がポトリポトリと身に入る
死ぬよりも生きる苦しさ重くなる
久し振りに思い出せない顔と顔
夜遊びに丁度程よい月が出る
父の日に父のない子にしたくない

鳥取市 近 藤 佳 子

風邪薬のど飴とどく母の日に
嫁ぐまで夢はぐくんだ茅の屋根
おしゃべりの風が名指しで人を刺す
はんなりと吞もうよ友よ花と酒
歯ぎしりをしてるまチャンスすり抜ける

鳥取市 徳 田 ひろこ

お揃いの浴衣が好きな揚げ花火
銀の匙すこし曇って大人びた
ひまわりに嫉妬はしない月見草
右ひだり嬉しい顔で通りゃんせ
茄子トマトが私を讃めてくれる朝

鳥取市 両 川 洋 々

エゴを許すと神よ地球が死にますよ
極楽に今日も空席などは無い
もう一枚の舌でキリストさえたます
口下手な鬼を一匹胸に飼う
デスマスク静かな亡父も癌でした

鳥取市 春木圭一郎

裸銭にぎりおまけを買ったところ
リストラへ裸一貫出直した
何もかも捨てて裸で駆けて来い
これ以上みにくい裸見たくない
裸婦像の前で化石になる私

倉吉市 最上和枝

カタログで選んだ靴が足に合う
小さい嘘一つポッケの中にいる
一杯のコーヒー雨を褒めている
嬰兒の白は何色にも染まる
言い訳を考えている鎌の月

倉吉市 松本よしえ

髪染めるおしゃれ染めないのもおしゃれ
囀りの下手な雲雀で嫁が無い
ネクタイが颯爽と出るワンルーム
どの部屋も花を飾ってひとり住む
使わない部屋でコトリと音がする

倉吉市 山中康子

愛しさを抱けぬ背丈にひとりごと
傲慢に刺のひとつもさしたがり
紫陽花のこころを覗く今日の彩
あれこれと梅雨の晴れ間のドッコイシヨ
一億の味方をつけてトキ育つ

米子市 木村富美子

手を引けば節くれ立った母の手よ
節目には姑と母とを真似ている
さよならの合図だまって手を振ろう
助けての合図何度も出している
もう背伸び叱ってくれる人もない

米子市 青戸田鶴

椿守長い歩みの花ひらき
泰西の名画の中で夢心地
風呂敷の母の包みはなんだろう
二千年まではどうにかもつだろう
弟の事が気になる日暮道

米子市 政岡日枝子

宝物ばかりで掃けぬ子供部屋
物差も老いて世相を丸くみる
陽に当たった枕で心地よい夢よ
包丁が上向いてる逃げきれぬ
塩壺が嫁の好みに変えられる

米子市 林瑞枝

絵手紙の長さ机上を食み出した
燦々と朝のポストが陽を弾く
真夏の詩生んだ飛び魚の銀鱗
大阪城望むホテルでティータム
谿谷に逢いたい花が咲いて待つ

米子市 澤田千春

吉報に土堤の自転車歌いだす

泣き顔は三面鏡にたたみこむ

活断層近く大地の呼吸聞く

いつの日か行きつく場所は花の園

泣く想い束ねて軒に干しておく

米子市 田中亜弥

振り出しに戻る大きな賭けをして

中途半端で泣くからいつも疑われ

赤ちゃんが泣くとみんなが寄ってくる

わたしの影が背伸びしているので可笑し

目と耳が丈夫で合図なら受ける

米子市 驚見正子

絶壁の一本松に憧れる

ふるさとの川は元気だ鮎届く

ボートナスをもらう日鮎が二匹つく

養殖と一目で分かるうちの猫

大漁旗帰って鰯のフルコース

米子市 光井玲子

必死に今を咲く私振りむかぬ

凡々と背伸びはしないかたつむり

長生きをしたい只今節食中

ボート漕ぐ父に若い日がゆれる

何もかも包んでくれている無口

米子市 永井三津子

戻ってと叫び泣いても夫は亡夫

今日もまた神に生かされ試されて

結婚を急げいそげと花が散る

親の声届かぬ青いスニーカー

逆境に必死で生きた解れ髪

米子市 中井ゆき

死ぬるまで夢の尻尾をはなさない

港にはエキゾチックな風がある

ひたすらに虹の真下に向いてゆく

余白にももう役どころ書いてない

次の世も花守させて阿弥陀さま

米子市 神庭詩郎

無意識に相づち打っていた不覚

一杯の味は屋台のコップ酒

窓口の事務で決定権持たず

金で済む話で無いが額でもめ

誓文払い空クジ無しでティッシュくれ

米子市 木村春枝

シナリオの通り自演の幕おろす

絡まれた腕がだんだん重くなる

五月雨にゆめと失意が絡み合う

疾しさに達磨大師の目を恐れ

終の家と信じ落葉を掃いている

米子市 門脇晶子

遊びの絵かく友達がよって来る
手の鳴る方へ倒れかかって行くからだ
背伸びしすぎて小さい石にけつまづく
高い堀出て来た犬もえらそうに
天もストレス溜めたか今日も曇り空

鳥取県 原 みさを

政局はどうあれ今日の田を植える
農政の知っちゃあいない青田風
漱石集安静剤に枕元
トキ解るとんと平和なトップ記事
父の日の父のわさびが効いている

鳥取県 上田俊路

昭和期を支えた父も腰曲る
頑なに恨んだ父の柩負う
野辺送り雨の日選ったわけでない
司馬遼を手につくりと道の駅
ガラス張り政治本音を語らない

鳥取県 土橋 はるお

お隣の鯉が死ぬのも気懸りな
毒舌をワツハツハーと聞き流す
マツチ箱持つと病気が出て来そう
宝くじ買えと讒言言ったよな
五時から翼ひろげることにする

鳥取県 西川 和子

夢に見る父はいつも兵隊さん
無心らしい切り出すまでの間が長い
結論がぐらぐら先に進まない
その日から家がぐらぐらし始める
夢でも知恵を下さいお父さん

鳥取県 土橋 螢

緑の蔭に死に場所を見つけたり
背を向けて父も涙を拭いていた
諍いに絡んだ渋いお茶を飲む
昭和史の影絵螢が飛んでいる
七十歳の笑顔をコピーして置こう

鳥取県 岩崎 みさ江

芽はすでに土の中から天を知る
素焼とや水も光も弾かない
今だ今だと時の太鼓が鳴り響く
ひよっとして昔を掘って見たくなり
魂を燃やしたわたしの灯とす

鳥取県 土橋 睦子

寝たきりの姑をささえている会話
褒め殺しされて買いい気を覗かれる
薇薔の花紅く咲かせてまだおんな
カーテンの隙間を覗く柿若葉
先輩は裏も表も知り尽くす

鳥取県 権代 康女

庭先で鳥が子育てする我が家
花回廊 大山見えて気がなごむ
あの村とこの町働く度がちがう
青春が今もさわやか亡父の手記
顔見れば言いたい事も口ごもる

鳥取県 さえき やえ

花しょうぶあなたはうちの外交官
花畑子らの心の居場所かな(こなたと花 3句)
口に筆くわえて画いた絵を見せる
花しょうぶ とつておかえり母さんへ
肩パットはずして花の旅に出る

鳥取県 塔 寛子

振興券貰えるほどの世過ぎです
ほどほどに呆けて我が家の温い日々
座も定まり嫁はや二児の母となる
難民にミルク一匙届けたし
娘の生きざま私そっくりいいのかな

鳥取県 西原 艶子

長話にんげんひとりさらけだし
両耳へうわさ話がからみつく
横文字が氾濫 不消化多くなる
束ねるかカットしなさい長い髪
胃も腸も洗えるほどにお茶が好き

鳥取県 谷口 次男

算数の出来ぬ兄ちゃん大学生
空っぽの列車が止まる無人駅
家という終着駅が荒れている
ひと言で元気をくれるお婆さん
平和ボケ怒ったように月が出る

鳥取県 石谷 美恵子

コピーして撒きたいようないいニュース
あり余る薬の中で病んでいる
招待へ二の足を踏む裏の顔
スタイルの話へ黙りこむ私
来世紀へ飛躍ただいま準備中

鳥取県 近藤 春恵

にこにこしながら肚をさぐり合い
ふる里を偲ぶ貝がら節唄う
近過ぎて母の愛にも気づかない
のど仏ごくり動いて決断す
留守番を花に預けて旅に出る

鳥取県 山本 正光

戒名をもらい暗記がまだ出来ず
晩酌が美味しく今日も胃に感謝
あやふやな歩幅にもある力瘤
気兼ねなどしなくていいよ空財布
忌は巡る今年も茹だる熱帯夜

朝寝した窓に鋭く時鳥

鳥取県 林 露 杖

ワンカップ紙めつ車窓に句想練る

聖子読む衰えきつた読書力

アイボロボつまり大人のタマゴッチ

介護保険どんな顔して出てくるか

鳥取県 橋 本 多哥由

自画像を気に入る老いる影法師

泣き笑いあくびをしてる暇がない

苦戦して電話作戦当選す

古傷にふれて前には出られない

人間で多情多恨をくり返す

鳥取県 太 田 幸 枝

古稀すぎた女の翼たためない

仰向けば大事な物を見失う

とげのある薊花びんでポーズとる

口数の少ない夫があざむけぬ

目的があつて苦勞も夢になる

鳥取県 田 村 きみ子

いい天気でござりますな地藏さま

子を思うように野菜と話する

旅のお方とラクダに乗ってきた休み

銀の馬車乗るのは夫と決めかねる

石蹴って見ようか傾知でるかもね

心地よい素足砂丘の私語を聞く

足早に月日が逃げる世紀末

すぐそこの海が呼んでる無人駅

過疎の村昔ながらの味がする

その後が大変拗ねた子の無口

鳥取県 黒 田 くに子

にこにことあんばん食べるおばあさん

不意に妻旅に出ますとおびやかす

ふらふらを励ましている仁王さま

変身へ気炎をかけるサン格拉斯

姑の留守なんと気楽に昼寝する

松江市 舟 木 与根一

三世代百足の足が纏れてる

駆け足で大団円にするドラマ

あご紐が少し弛んだ夏帽子

すこしはしゃぎ過ぎたお見舞して帰り

ママさんに叱って欲しく飲みにゆき

松江市 佐野木 み え

見栄はって買った晴着は着ないまま

蚊やりたき一人の夜をいとおしむ

朝市のトマトあの頃の味がする

母さんの袖を今日も出してみた

日展の絵 松に緑の千鳥城

ローカル線赤いかわらの診療所
出雲市 吉岡 きみえ

枇杷熟れる思い出ばかりつきまとう
雨蛙お前も思案の道たどる

無理をして笑えば涙が先に出る
人の声欲しくテレビのつけっ放し

出雲市 久谷 まこと

仏法僧三者三様道一つ

リストラの近い窓辺で陽にやける
入れ知恵でしどろもどろの解答紙

ためらった一瞬の隙打ち込まれ
年金のお陰フルムーン旅を練る

出雲市 石倉 芙佐子

ある予感月は真っ赤に中天に

玉子二つぽこんと割って老い二人

雨の日は紫陽花色の服を着る

風呂敷包み開いて閉じて元才女

逢いたくてひよどり越えの坂もこえ

出雲市 竹治 ちかし

気付かないうちに相手に値踏みされ
神様も四五人寄ると難しい

責任はいつも相手にある戦

言い分がお互いあっている無言

許されるお酒が旅の朝にあり

ストレスを捨てに行きます舞い扇
出雲市 小玉 満江

ああ青春都忘れの花いとし
のはほんと生きてお迎え待っている

しきたりを固く守った祖父の墓
老人証入湯料の割引券

出雲市 板垣 草丘

介護法体重加味を忘れなく

環境と家人をあてに鳥がくる
筈が他人になって伸びてゆく

笹巻きが茹かりましたと浮いてくる
だっこちゃんブームあれから妻と四十年

出雲市 小白金 房子

念入りな化粧娘も花ざかり

面倒な話はよそう青葉風

美しい田園見まもる農の詩

肩車まつり囃子を児に見せる

朝星夜星育てた亡母の深い恩

出雲市 岸 桂子

例外を認めてからの妥協ぐせ
赤信号に決断を追られる

芸のないままに我が家の犬も老い

鉛筆をまとめて削る外は雨

消しゴムの使えるうちの逢う瀬かも

出雲市 園山 多賀子

殴った肩を抱き合う師弟愛（アルシーアル同窓会 3句）

高らかに校歌少年の貌になる

袖分かつホームに涙また新た

私の何処叩いても出る埃

俸せに酔って気付かぬかくし味

鳥根県 松本文子

ふらふらだけとお迎えはお断り

新しいドレスが似合うジャスミン茶

呪文唱えるように豆腐切っている

サンダルひっかけて自由な鳥になる

養虫の暮しを真似ているような

鳥根県 伊藤寿美

息子のような医師の笑顔に縋りつく

脱走したくなる病院の夕間暮れ

父の日ね入院の妻ポツリ言う

自己過信かがとを折った赤い靴

入院ベッド幸田文を読みふける

鳥根県 堀江正朗

軍神になれず米寿を白い杖

老いた顔想像しつつ箸握る

気短になってむしゃくしゃ掻き回す

空想は無限に続く花の道

いい気分うたうと湯舟出られない

鳥根県 森 茂美

山藤の風に遊ぶか峽のみち

フルムーン位が僕の妻孝行

三食をけちって旅の支度かな

勇ましや戦争知らぬ議員たち

還らない友を偲んで佇つ夕陽

鳥根県 小砂白汀

ライバルが元気であるから寝ておれぬ

髪そめて背から肩をたたかれる

わが影を踏んでおりますいい月夜

あそこまで期待されては負けられぬ

熱戦へ水をさす気かコマージュル

鳥根県 柳原秀子

手袋を洗が残した五月晴

さよならとくれたきれいなさくらんぼ

カステラと紅茶サックス聞きながら

雨ポツリポツリと落ちて洗う鍬

草焼きのけむり目に沁む夕鳥

鳥根県 西村早苗

雨読晴耕逢う約束の日も入れる

夏曆とところどころの俄か雨

ある物で決まりいつものおもてなし

逢いましうとはフトしたはずみから

お疲れの顔でうな井食いにゆく

岡山市 井上 柳五郎
予定日にひ孫きつちり呱呱の声

子も孫も女ひ孫に男の児
無愛想なレジヘだんまり籠を出し
思ひ出を友のたよりが捲き戻す
ホトトギス若葉の森に戻り啼く

倉敷市 田辺 灸六

名残り坂落花余韻の旅衣(悼三林坊師)

雨漏りに耐えたあの日の夫婦愛

生き残る心の支え妻達者

船頭の舵取り妻を褒めてやり

能登棚田観光資源美女田植

倉敷市 井上 富子

田植機にエールを送る雨蛙

添寝して昔話を二つ三つ

今夢を形に変えているロクロ

ふっくらと心が熟れている会話

手作りの茄子がメインのフライパン

岡山市 二宗 吟平

子や孫とくるくる寿司で和む春

漢詩読む古人の学の深さ知る

まず一杯引つ掛けながら作句する

町自慢旧の遷喬小学校

手や足をポキポキ老大講演会

岡山市 山本 玉恵
路地裏の方程式に試されて

おだてにも乗ってみようかつけまつげ

一筋に土に生かされ生きて来た

独り居の自由慣れた欠け茶碗

仮りの命後生大事になされませ

岡山市 大石 あすなろ

花菖蒲飾り明日来る人待つ

大地みな飲込むような深呼吸

年金で加減乗除がうまくなる

苦労したことは語らぬ丸い石

仲のよい家族が絡む洗濯機

岡山市 荻野 鮫虎狼

噛みしめる空気が美味しい隠れ里

終い風呂今日の敗北認め合う

反骨の怒声は海が聞いてくれ

潮時を忘れ老いらくの恋続く

反論があるらし妻の主導権

岡山市 福原 辰江

あけて見て案外だった遺産分け

あの言葉永遠の別れになろうとは

金婚の宴へ照れているふたり

愛してるなんて言えずに五十年

首縦に振れば楽になるものを

胸のトゲ溜飲下げて安堵する

岡山県 福原悦子

台所リズムが戻る退院に

子の帰る場所はいつも空けておく

大地踏む子はしっかりと自立する

ためらいの隙間に福が逃げそうだ

広島市 森田文

小鳥さえ傷つき合うて生きている

清流に沿う温泉の釣り仲間

宿泊はもくれんの間よ姉妹旅

湯の里は山の煙の立つところ

温泉から帰った風邪を叱られる

竹原市 古谷節夫

日めくりの重さひしひし歯を磨く

たたかいを終えると酒がよくまわり

ぬるま湯の音譜に合せ流す背

引き出しのキシミが進む六十路坂

梅雨明けへ老若男女よく喋り

竹原市 森井菁居

運勢は吉だが歳を取り過ぎて

ふるさとも昔嘶を忘れかけ

以心伝心妻もビールを買って来た

毎日が発見 毎日書く日記
絵葉書になりふるさとが光りだす

耳おぼろ静かな音がうせてゆく

竹原市 三宅不朽

春秋に富む歳でない笑つとく

図書館の夕日みつめただけで昏れ

ヌード集 泉かれたなと思う

カーブ負けまだ陽をあびている朝刊

竹原市 石原淑子

愛しとどつばめの巢立つ青い空

町並みの格子戸くぐる江戸の風

バラソルと少し太めの影が好き

むつかしい初めて聴くように返事

夢終るサマージャンボ宝くじ

宇部市 平田実男

昭和一桁賞味期限は見ない振り

あんたって駄目ねと言って駄目にする

孫達と一緒湯船も嬉しそう

居るだけでやすらぐ妻と共白髪

かじられた頃は生き生きしてた脛

香川県 木村あきら

酒タバコ続け長生きするつもり

短世を蟬懸命に鳴いている

セメントがホタルも棲まぬ川にする

灰色の手が白手袋で土下座する (選挙)
無位無冠今日もお陽さん西へゆく

美しい胸をはだけた検診日

香川県 工藤吟笑

狭き門論吉とどん潜り抜け

合格だもう神様に用はない

何はなくとも百日紅真つ盛り

壊される日も遠くない祖父の倉

香川県 成重放任

野遊びをまた一ページ書き添える

検査日が近づくほどにさわぐ胸

親の背を越したと孫のほくそ笑む

取り壊すわが家に老婆手を合わす

草取らずそつと見守る雲雀の巢

香川県 池内かおり

風邪癒えてやつと阪神巨人戦

一杯のムギ茶がうまい草薙り

御墨付き亡姑に貰ったしいうゆめし

ひとまわり大きくなつて子が帰国

検査結果下手な芝居を見抜かれる

香川県 山地マツエ

誕生日バラの花買う七十歳

学のない亡母が人から慕われる

五月晴鬼一匹を飼いならす

旅に出た子を追っている北の地図

不器用な悪女でいつも出おくれる

頼もしくまたうとましくなる絆

香川県 神保坊太郎

峠こすごとに若さを脱ぎながら

風向きが変わる私もかわらねば

追剥ぎの手つきで脱がす子沢山

どの家も声が聞けない次郎三郎

松山市 丹下美津子

短気に吞気神はバランスよく結ぶ

このお灸効きましたかと問う主治医

元祿繚乱昨日見て来た所が出る

息継ぎの井戸そうかそうかとのぞき込み

庶民には遠いところで備前焼き

今治市 野村京子

風ことり謀反へ動く深い闇

散骨がきらきら海の彩にとけ

結んでも開いても遠いしあわせ

ありがとうばかりが溜まる丸い背な

老いてなおレモンの艶を選っている

今治市 越智一水

愚妻です花あれも植えこれも植え

老妻が留守できれいに髭がそれ

はるかのように竹の葉散っている

水音に聞けば無心になれと言う

金稼ぐよりむつかしい使い方

菜園が来いと無線で呼んでいる
高知市 北川 竹 萌

孫婚儀妻の髪染を塗ってます
筋金はあれど体がついてこそず
金のない話相槌うつてます
四捨五入米寿の夏を張りきって

高知県 赤川 菊 野

しあわせな今を封印しておこう
平手打ち食らったような計の知らせ
モンゴルで見るまん丸い地平線
ナツメロを聞いて男が泣いている
中国語ひとつ土産に旅帰り

北九州市 梅田 宣 司

度の合わせぬ眼鏡が欲しい時もある
この世からあの世を覗く古い井戸
無言劇夫婦の雨期はいつ晴れる
価値観の相違笑って居られない
祝傘寿急に背中が丸くなる

唐津市 山門 夕 ミ

お手洗入れかわりつつ暮が弾み
幽玄の闇に二人居ホタル追う
願わくばお手々繋いで三途川
子離れをしたか山鳩夫婦来る
孫の本将来見たし寿命なし

大活字スポーツ記事の大魔術
唐津市 仁部 四郎

耳打ちを先ず雑音として記録
昼の月私を訊問するつもり
勲章を断る勇氣出ぬ遺族
小人はカネの話に耳が立つ

唐津市 宗 水 笑

日の丸よ国旗はみんな汚れてる
親類に受刑者なしと言える運
戦争の理由は勝者が決めること
他所の子に末は任せて産まぬ人
信用は本人よりも免許証

唐津市 井上 勝 視

明日の予定山程あつて生きられる
大人にはなりたくないともう大人
カードから値切る楽しもぎ取られ
大胆な水着は海に入らない
ごめんネと子持ちシシャモに詫びている

唐津市 山口 高 明

今晚が峠ですなと軽く言う
兄嫁に少うし胡麻を搗つておく
念願の百組真近祖母が逝く
隣国に負けない武器を持ちたがる
出張の国へ持つてくカップ麺

唐津市 樋口輝夫
定年後二度目の正札つけてみる

五十年紆余曲折の万華鏡

油売りついでに噂の種を播き

馴染みでもやっぱりかかる消費税

死に花も咲かせず九条こと切れる(憲法)

熊本市 永田俊子

神楽殿誰も舞わねば蝶が舞う

テポドンのお話を逸らすかつば酒

湧き水の瀬音に嘘が言い出せぬ

以下同文の一生でしたカスミ草

米寿米寿と囃され彼岸をふと忘れ

熊本市 岩切康子

佇めば元氣を出せと草が伸び

玉になる護身の虫に負けちゃった

内視鏡ポリプ消えた良いお告げ

面会へ好きな煙草を押し消され

叱られて笑われたって好きな道

熊本市 高野宵草

咲きすぎに容赦をしない生花の手

庭に木が多くて困る初夏簪

実を育て安心したか豌豆枯れる

Uターンまず方言に癒される

遠足のリュックではしゃぐキティちゃん

八甲田雪回廊が春を呼ぶ

八十歳そろそろ写経始めます

八月の笛も太鼓も火を好む

八月の雲はだんだん白くなる

弘前市 岡本花匠

強がりを書いて佗びしさ残る悔い

みほとけのともしびに生き夫婦みち

六月無礼ステテコ姿悠然と

多情仏心 男を試す向かい風

八戸市 島田昭治

他所の子に孫と同じく声援す

孫走る亡妻に見せたい涙出る

親切な看護婦さんに片想い

正義感あるが町内費渋りがち

奈良市 天正千梢

花冷えに雛流さるる加太の海

接待の草餅うまし遍路笠

朝粥で喉をしめして目を覚まし

香芝市 大内朝子

新緑に酔うていのちが若くなる

二度三度転んだぐらいなんだんねん

さらけだすわたしを好きと言うてくれ

朱に燃える恋はこの世のなごりかも

庭の草伸びてる老母が病んでいる
大阪市 津村 志華子

三代味噌汁スーッ番茶粥

蔭口がとっても好きな風媒花
子の居ない寂しさ知ってる母子草

大阪市 清水 利武

タイガース首位が何時までつづくやら

芋の子を洗うプールでダイエツト

陽灼けする事も忘れた立話

美房さん同期の桜すすり泣く

大阪市 辻川 慶子

朝どりのそら豆持って友がくる

あの時の亡母の助言がいま生きる

ひとり居のこの安らぎと寂しさと

雨降れば雨のリズムに合う若さ

大阪市 宮本 欣史子

幸せな一日眠るのがおしい

言い訳にただなんとなく耳掃除

信心の友が一番先に逝く

頼りたい絆へ悲しい肩すかし

岸和田市 岩佐 ダン吉

核ゼロの記念切手はまだです

山は削り小さい緑飼うヒト科

難民の子の目直視ができますか
君が代に疼く思いはないですか

ユニークな文字に絵ハガキうけている
岸和田市 芳地 狸村

占いの字画信じて生きている

欲ばけてけちだと顔に書いてある

年金の額に合わせる特売場

岸和田市 藪野 けい子

愛されて自信があつた記念日まで

寄り添って好きとも言わずおーいお茶

ちよつと持つてと手伝うはめに庭掃除

はめられて鏡の前で身にまとう

藤井寺市 中島 志洋

食べかけの氷気になる長電話

からからの喉へ一氣に氷水

お若いと言われ照れてる首の皺

芝居だと解っていても泣かされる

河内長野市 井上 喜醉

ストレスが浮いた我が家のしまい風呂

古稀すぎてまだ生きそうな顔の艶

首位阪神なにわのビールよう売れる

賞め言葉みんな見ると出てこない

河内長野市 植村 喜代

帰るまで笑顔の孫に有難う

老い二人喋ることない孫を待つ

なるようになると思つて生きている
人の心も変わるものかと哀し過ぎ

大東市 児玉 蛙

ふるさとの顔になつてゐる辻地蔵

羅漢さん今日は笑顔で立っている

やりくりがついて二つに割るリング

散策の六十はまだ通過駅

交野市 山川 日出子

日本の国旗と国歌証です

同色の汗に染まったボランテイア

梅雨半ば孫に人形の作り方

梅漬ける古い手袋若い服

寝屋川市 太田 とし子

朝顔が咲いてパジャマがまだ脱げぬ

赤が散り黄色が咲いた忙しさ

ペラペラと羨ましいなヌード集

思いきり万歳叫ぶ空がある

寝屋川市 坂上 高栄

百度石笑顔の消えた渦に居る

なせばなる此の一念で本を読む

朱鷺育つ飼育係の苦は知らず

空爆の停止帰らぬ人の数

枚方市 二宮 山久

一合で事はたりますうさばらし

昨夜まで啼かぬ蛙の大合唱

夫婦喧嘩たまにはしたい仲の良さ

トンネルの向こうにおソラの夢がある

池田市 藤井 計光

心の暗黒を甬うような砂漠

過去未来殺到させる熱い恋

花束に届かぬ愛がもどかしい

花に酔い酒に酔つてゐるペアルック

和歌山市 山根 めぐみ

ひとりぼっちになると優しい鬼あざみ

檜山へ一寸下見に出かけた

警戒警報フイに優しくなるあなた

才女だな心乱さぬ立ち泳ぎ

海南市 谷口 義男

卒業の無い趣味だからファイト湧く

極楽の門開け待つて居たように

人間のエゴで狂つて来た地球

何気無く吐いた一言導火線

伊丹市 小熊 江美

一徹で頑固な彼に惚れている

病院でうっかり風邪を移される

雨蛙うっかり潰すとこだった

老人の性か頑固になるわたし

西宮市 刈田 泰司

肩叩き笑顔の中で笑わぬ眼

出る杭をモグラ叩きのように打ち

男にも似合うエプロンよく売れる

男運こんなものかと白髪染め

川西市 松本 ただし

売薬で風邪があつさり抜けてゆき
割り引券貯めても只にしてくれぬ
三分で肩を叩いてくれる医者
付いてこい言えぬ茶髪のおとこ唄

鳥取市 石上 悦子

野良猫が魚一匹さげて来る
新入りのメダカが消えた水槽だ
励まされ病人あとにする見舞
おろしたら靴のサイズが左右別

鳥取市 美田 旋風

新知事へ夢がふくらむ目安箱
道端で子らを見守る母子草
ブライドは守ってほしい介護の世
欠点が長所になって湧く自信

倉吉市 淡路 ゆり子

温め合う心に芽ぶく家族の和
堂々と日本の空へ日の丸泳げ
分刻み主婦の手足はよく動く
怖いこと何もないんだ無一文

倉吉市 米田 幸子

オアシスは四畳一間のアパートよ
実るまで待てずすっぱい実を齧る
やっとな手の届く頃には年をとり
浜っ子はきつぷがよくて情がある

倉吉市 山本 玲子

薬包紙もう千羽目の鶴になる
合うも八卦合わぬも八卦だが頼る
花講釈いずれがあやめ杜若
寝返った口約束に印はない

鳥取県 吉田 孔美子

配りもの十三軒を猫連れて
返事せぬしつぽも温い熱がある
仕方ないオマエはこっち隔離だよ
くすりだよヒラメをオブラートで飲ます

鳥取県 羽津川 公乃

初夏の風薫りも彩も光らせて
愛想笑いで医者之苦言を受け止める
落漬けた午後は句箋と睨めっこ
毛染め止め年相応の姥桜

鳥取県 國森 武子

青空を貫くつもり竹伸びる
ふんぎりの悪さいつしか性となり
返事するリズムで嫁の心しり
ペアでした命枯れても夫は夫

鳥取県 津村 八重子

新茶つむ初夏の日差しをあびながら
日の長さ昼寝の夢に甘えてる
卵酒をのんで老骨きしまない
銘柄のしょう油にはねる生きづくり

鳥取県 乾 隆 風

銭湯に左遷の首が浮いていた
下げどまり暗い景氣に火をつける
となりから眼鏡一泊して帰り
飯盒の酒で別れた兵の墓

鳥取県 乾 喜与志

ただいまの声待ちつづけ卒寿なり
勲八等瑞宝章に養われ
同じ陽を浴びた草にも伸び縮み
松根に消えた跡目の松並木

松江市 川 本 畔

新聞を揃えて男甘やかす
螢が光る泣いて笑ってまたひかる
睡蓮が過去を隠したがっている
テーブルが君を遠くへ引き離す

松江市 安 食 友 子

何かしら盛られたような副作用
手の震え一過性だと軽い医者
何じやもんじやホワイトパンチくれました
金平糖がはじけたように見える星

松江市 浦 辺 静 江

強がりを言つては母の背に隠れ
メイキヤップすれば女性にそっくりで
いらだちを転換させる深呼吸
カタログが涼しい品をつれて来る

出雲市 富 田 蘭 水

しじみ舟 六道湖映えてつつがなし
釣り書に見合の数は書いてなく
アンテナをめぐらし過ぎて旅に迷い
同窓会つきない朝が速すぎる

岡山県 江 口 有一朗

遠くない死へ実感が未だ湧かず
ダイオキシンの卵を孵化させず
名も知らぬ花に見上げる広い空
くたびれた顔解きほぐす高笑い

竹原市 岩 本 笑 子

生き方はどうあれ五十路の椿咲く
花菖蒲行かせてならぬ人という
親という辛さ夫のヘルメット
国境の無いツバメなり夫婦愛

美祢市 安 平 次 弘 道

投げキッスそんな昔もありました
沸点の違いがわかるのも女
どこまでも夢を追います蜃気楼
消去法わたしが消えていいですか

麻生路郎の幻の名著復刻

『川柳とは何か―川柳の作り方と面白い方』

B 6 判・266頁頒価2000円(〒340円)

お申込みは川柳塔社事務所まで

佳句感想

橘 高 薫 風

外来語の句

英語だけではない。よく例に引かれるのが大阪が発祥のアルサロで、アルバイトとサロンの独仏混交語だ。国際化とともに急激な増加は選者を戸惑わせる。

ポーナスで父の腕前疑うな

資本家はキャラクターまで買ったがり

麻生 路郎
平成不況は長引きポーナスの大幅減はまだしも、カットされる企業も多い。ポーナスは頻繁に使われる語だが、キャラクターなど硬質なカタカナ語が句に生かし切れているのは先生の幅の広さであらう。

ヒヤシンスの音沙汰でなしパンの事

麻生 葭乃
女流らしい趣味のやりとりと見せて、生活苦を言ってきた便りである。若い才が進る。

表情を殺してYES・SIRと云う

奥村 丹路
物品にはメイドインオキユバイドジャパンの明示があつた時代、米兵が上官に靴を鳴ら

して敬礼し、イエスサアと言っていた口ぶりだ。ごもつともごもつともを通したのが日本人だ。以来、恥の文化は薄れて消えた。

登園拒否ベッドの中に雨が降る

榎原 公子

幼稚園児の抵抗は、朝のベッドから出ようとしない。そのよつな時は梅雨期であるうとなかうと、涙が出ようが出まいが関係なく、ベッドの中は陰湿度九十%を越す。

グリーンサラダとバスタを食べる秘密基地

嵯峨根保子

緑野菜のサラダとマカロニやスパゲッティの軽食で、これという特徴もないのに秘密基地であるのは、お昼をすませたあと飛び立つたのしみがあからで、女同士は他愛ない。現代性があつて下句が味だ。

飛行士の視線で見るエコロジ

後藤 早智

かつては鳥瞰図と言つた。今は飛行機から宇宙船の規模で宇宙の生態観察に焦点の行く

時代となつた。若い視線のたまものである。

初恋ヘタイムスリップさくらんぼ

津守 柳伸

「母は毒婦処女の桜ん坊 葭乃」の句を思い出させる。外来語が本領發揮した。

プロポーズ君を終身刑に処す

川上 富湖

夫唱婦随と思えばはや婦唱夫随的になり、たちまちにまた逆転する。句集『二重奏(デュエット)』を出したカップルは、互いに鎬を削つていて気持ちがいい。

実際プロポーズの言葉でがんじがらめになつてしまつと、終身刑の判決を受けたも同様子が巣立つたあとも憎性あるのみだ。現代のことだ、女性からの求婚か。

よく稼ぐ満身創痍ダンブカー

田中 文時

公共事業に注ぎ込む予算の高はダンブカーの疾走に比例する。泥まみれ、土砂満載の姿と、排気ガスのすさまじいのが象徴するよつに、満身創痍の猪にもなぞらえられる。

八月十五日ムンクも叫びつづけてる

緒方美津子

終戦記念日にしずかに平和を祈る脳裏には、阿鼻叫喚の絵が存在する。ムンクの叫びに似たと捉えた作者にたちどころに共鳴した。

自選集

宮口笛生

藤井明朗

黒川紫香

酒くさい口で言い訳通らない
朝からの酒へ中毒手が延びる
缶ビール一気のみして畑仕事
五〇パーの休耕田の草の守り
貧乏で良かった達者しています

譲る気で話すところが通じ合う
小国の内戦 難民どうする気
演歌聞く酒も楽しく酔うてくる
談笑がつづくさわやかなさくら土手
ふる里に孫等残して盆帰省

誰か来たのかと思えば風だった
夕焼けがとてもきれいな塔の坂
ごはんです一人帰ると皆去んだ
もやい舟 風が川面を走ってた
ひと刻の暇 人形とにらめっこ

八木千代

波多野五楽庵

野村太茂津

野田素身郎

紫陽花の毯 ゆらゆらと人恋し
紫陽花寺は曇り 姿も臙げに
封筒の中は重度の処方箋
漢方薬の効き目 観念した頃に
おかげさま 夏の呼吸を思い出す

明日なんてだれも知らない雨の音
買いたった絵の具はみんな涙色
女郎花 球根はもう捨てました
人間を忘れて花に立ちつくす
ごめんなさいお詫びの言葉言いそびれ

遠会釈白内障という無礼
気心が優しいだけでつまらない
毒舌が冴えて気配り無視される
気配りが優しいあなたに従おう
何冀と生きて楽しいことばかり

今度は僕が母が乗ってた車椅子
僕に似て息子も敷かれていた模様
暗がりが好き地下街の喫茶店
泳げるか不安がよぎる後遺症
梅雨晴れ間やりたいことが万とある

正本水客

整然と敗戦の将背をむける
裏道を歩いて来た人と思われず
桶の音山の湯を思い出す
水涸れた川をみているバスのゆれ
帯きゅつと締めて女はまけていず

小西雄々

節節が休むと痛む葱坊主
天空へ夢を持つ目で仰ぐ城
涙腺が弱く人情もてあます
左遷地で不協和音の白い朝
ほどほどの幸せ何時も手の平に

高杉鬼遊

量やが来るので早く起こされる
改札につかまりましたピンポンポン
先妻と時々逢っているらしい
空爆をするよりほかにない面子
人前で喫うのをやめただけのこと

月原宵明

河涸れてもう輪が描けぬ水すまし
平凡と言う幸福に気がつかず
笑わせる和尚の法話しびれない
顔中で相槌を打つ忙しさ
二度三度帯を叩いた嫉妬心

藤村 女

色々な恋が生れた盆踊り
名物のPL花火で湧かす町
遠花火ながめて足りる歳となる
八月の臉に浮かぶ黒い雨
仲直り早くて少ない傷で済み

恒松町紅

稲光り滞りなく会終る
正直な鏡に無茶を論される
おめでたい話に時間忘れてる
二人力だからレールが軋まない
もう八十まだ七十と使いわけ

金井文秋

二十一世紀見る夢だけは叶いそう
足は弱って来ても毒舌冴えている
ひよつとしての不安を医者も持っている
鑑定の名人失敗歴も持つ
追いつ返す気へお迎えはまだ来ない

遠山可住

強烈な愛一年でさようなら
美人薄命ほんならうちは大丈夫
父の日があつて静かに過ぎてゆく
救急車妻の予感が当らない
さっぱりの風が浴衣へ来て遊ぶ

松川杜的

シヤボン玉五月の空は飛びやすく
オルゴール娘はむらさきの夢を見る
さわやかに写経の顔を春の風
待ちぼうけお前もそうか吾亦紅
風光る追伸の一語あつたかし

西田柳宏子

ぜんそく退散有難かつたフルタイド
嘘つかぬ体重どか減り二〇キロ
オベまでの検査検査にくたびれる
オペOKいつてくるぞと眠らされ
麻醉とけばんやり生きてるなと思ひ

阿萬萬的

自画像に筆を入れたい時もある
漫画のような日々もあります老夫婦
生々流転人生無駄が多過ぎて
単細胞に老化で言葉数が減る
ドナーカードの役にもたため齡となり

板尾岳人

あっちこっちこはアメリカ星条旗 (ロサンゼルス)
一日の離陸してゆく二〇〇〇回 (ロス空港)
背広着てネクタイ締めてあやしまれ (サンディエゴ)
ライトショー二〇〇万個の西部劇 (ラスベガス)
ピラミッド型のホテルで世界一 (クルソールホテル)

辻白溪子

買う程につくと新品買わされる
恥かいてあんた笑っておれますか
涙出てドラマおわりに近くなる
お茶漬の味がおいしい旅がえり
よく笑うので善人と間違われ

小林由多香

竹槍で勝てるいくさと思ひ込む
ひとり住みゴミの分別にも迷う
金はないけれど黙って見ておれぬ
和菓子から四季の色香と味もらう
不況でも晩酌だけは欠かされぬ

河内天笑

ご祝儀を工面したのにもう別れ
シドニーへわれらがイレブンの強さ
単純明快で日の丸素晴らしい
バランスのよい日の丸よ永遠に
「君が代」は「われらが代」なら有難い

橘高薫風

末法の世に降る羅生門の雨
日の丸のおいたわしくものしずか
葡萄一粒一粒七十四の溜息
海美しければうつくしで佐渡哀し
大文字消えて一転先斗町

川柳太平記

(255)

川柳の群像

北川 絢 一 朗

東 野 大 八

「新文化体制の一翼として全京都川柳作家を打って一丸とする大京都川柳社を結成し」

の宣言で発足した昭和16年3月16日の大京都川柳社結成記念大会に、北川牡丹は長崎出張中で出席していなかったが、6月1日の護国神社朝詣での会には、紅顔をほころばせていた印象が深い。

朝の6時に神社に近い東山二年坂の阿古弥茶屋に集まって作句、36人の英霊の句帖を御祓と祝辞で献句した。

英霊に団服の肩動かない

牡丹

それから終戦までは、人も会もちりぢりのがたがた、20年9月21日の川柳忌に木屋町水月の奥座敷に口伝えて集まった18人から京都柳界はそれぞれのグループに別れ動き出した。

昭和16年牡丹を絢一朗と改めて、うるさい

京の三長老（藤本蘭華・後藤千枝・紀二山）を頭に載せ、小坂ふじ弥と腕を組んで京都川柳社の先頭を歩くことになった。

十年程して三長老に御隠居願ひ、京都川柳社を解体、他社フリーに呼びかけて平安川柳社創立の青写真を描いたのは「全京都川柳社を打って一丸とする」のあの時の宣言文が、彼の頭と胸に深く残っていたのではないかと憶測している。

彼は大正5年10月3日滋賀県泰荘町に生れたが、その江州人の根性、室町で鍛えた商才交友の広さをよき肥料に、戦後復員後転身して創業した天工堂は、しっかりした二男三男の後継者も育って益々ご盛んだ。

作家火野葦平氏との出会い初めは知らないが、紹介されたときは親分子分の間柄とみた。

氏の在洛中は、駅から駅まで何日でもつき切りでお世話する京都の秘書だった。「平安」創立二周年記念号に氏の「鈍魚はなし」の随筆を寄稿して貰い『平安』の誌価を高めたのも彼の功績だった。それが一年後の35年1月24日の朝のラジオ、テレビは「火野葦平死す」の悲報を伝えた。平安2月号にその弔文を書いた絢一朗は「先生の死はマスコミの殺人だ」と言って、肉身の死別以上の悲憤に沈んでいた」（昭51・12刊『川柳平安』還暦作家特集・伊藤入仙記・要約）

この「川柳平安」は、昭和52年6月平安川柳社創立二十周年大会を最後に解散、なんとこの社は福永清造・伊藤入仙の「京かがみ」田中秀果・西沢清二らは「都大路」を、旧平安の編集スタッフ中心の31名もまた昭和53年9月に「川柳新京都」を創立。見事に三分裂してしまっただ。

記念大会には、なんと五百人以上の柳人を京都市のトップホテルの会場に集めたこの平安誌の隆昌がまるで嘘のように三分裂して消滅しようとは、全国の柳人たちも呆気にとられ、何が一体原因でこの始末か、今もって正面切って説明されていない。

柳界の一大論客を自任する石原青竜刀でさえ「不可解千万な平安の解散、一体何があつ

「なんだ」と小生の手許までその詰問状が来たことだ。当方も全くこの件については五里霧中、絢一朗御本人あての質問しても、彼は「言うに言えないこれにはワケがありまして……」と言ってきたきりで、一切応答なし。

いずれにしても颯爽あたりをはらう態の『川柳平安』誌への未練もあって、筆者は絢一朗主幹の『川柳新京都』への肩入れは主幹のこの人への一種の人懐っこさに由来する。

昭和31年に『京都新聞』への柳壇要請、爾来40年間にわたり死去するその日までその選者を担当し続けた律義さと、師・紀二山への哀切こもる心くばりは、その主宰誌『新京都』への献身的な奉仕と併せ、当方へはこころあたたまる人間の肌合いを強く感じさせたものだ。彼の唯一のこの世への置土産たる『川柳句集・泰山木』（平成7年2月刊）の箱入美本は、次の一句から書題を採ったものの由。

粥十日泰山木のひかる窓

平成11年1月13日、多年病臥中の病院で永眠した。 齢82。

絢一朗と筆者との初対面は、平成8年6月大阪で催された第一回オール川柳創刊記念大会の選者室だった。

「いつも格別のお世話になりました……」の鄭重なこの老人が小腰をかがめての御挨拶

に、当方も相応の会釈を返した事だ。

世慣れたいかにも苦勞人といったこの蕭洒なお人柄に、日頃から抱きつづけてきたこの人へのイメージが生き返るような初対面の出会いであった。

「いつの場合でもインスタントの粗稿ばかり、決してお札などといった一切のご懸念は抜きに願います。もし、そんなお返しでも貰えば爾今一切おたくには書きません」と念を押した。どういう会社なのか、天工堂としか頭にならない当方は、零細企業で小人数の社員しか居なくて、その上に『新京都』という隔月刊ながらの柳誌経営、失礼ながらその思い込みのままの判断から出たものだった。

左様、この川柳誌にはもう五、六回もつかぬことを書きとばしてきたもので、その都度京特産の可愛い竹の子やら、最後には舞妓の帯ほどの大昆布に、干しいたけをどっさり組合せたのが原稿のお礼で届けられ、内心仰天したもので、今もそのまま冷蔵庫の棚の上にある。

「この人に原稿の礼をするとはひどいこと叱られるので……」

といった編集後記を眼にして、心から苦笑したものだ。それほどこの品のいい、『川柳新京都』の風趣の本が大好きだった。現在でも、こ

の本向きの原稿の構想を頭においている分が二、三たまっている。

「その片腕は戦争でつか、かないまへんなあ、鉄砲玉に眼玉がないので、飛んでいくままですがな。わたしも高射砲隊で苦勞しましたが、六十発に一発当れば儲けものの高射砲には、敵のヒコキもなめよりましてな」といった茶のみ話も、今となっては懐かしい思い出の一つとなって残っている。

この本の編集長とかいう、村井見也子さんもいい方で、原稿やらこの方の名手らしいパソコンの校正毎に、何がなしの京菓子も頂いたことで、今だに心の底で恐縮し続けている次第である。

『川柳句集・泰山木』は、常に机辺に置いて収録されている約五百句近い絢一朗作品をよく開いては楽しんでいる昨今だが、最後にその中から絢一朗作品晩年の味をあげておく。

生きようと指を広げたとき悟る 絢一朗

日ごろめつきりさよならを泣くよ

ふくよかに一会の花のいま盛り

自己主張なら香煙もうそうそくも

引き際の美学なんにも語らずに

骨鳴って身のほとりだけ雨が降る

最後まで黒いぞ私を焼くけむり

▼次号は「伊志田孝三郎」

誹風柳多留二四篇研究 8

粕谷 長生・山田 昭夫
伊吹 和男・大野 秀二
小栗 清吾・橋本 秀信

清 博美・佐藤 要人

48 女房に恥をかゝせるやまひなり

粕谷 毛虱か、梅毒などの性病か、それとも腎虚か。礎稿としては腎虚ととりた。

亭主が腎虚になったとなると、「あの女房は相当に好き者だ」と周囲に言われ、病気になる。亭主よりも当の女房が恥をかく事になる。

女房も亭主もはぢな病氣也

第四 28

清 賛 この女房は美人なのでしよう。女房が恥をかく、でよろしいのですが、女房が亭主に恥をかかされたと書いた方がより正確になると思いますか……。

佐藤 同。

49 柿の木の下へ氣付を持てかけ

粕谷 柿の木は折れやすい。実を取ろうとして落ちたのであろう。その結果、氣絶して氣付けが必要と相成るのである。

小栗 本句は実を取ろうとして落ちたというよつな実際の出来事を句にしたのではなく、柿の木から落ちると怪我がなならないという俗説を踏まえた句、と思う。『諺語大辞典』に「柿の木から落ちると三年しか生きぬ」俗説」とある。

清 やはり実際に木から落ちて失心したのです。知らせを聞き氣付け薬を持って駆けつけるのです。

佐藤 賛。

50 主人相しらすめかけ八色をもち

粕谷 「主人相知らず」は文句取。『唐詩選』に「主人不相識」とある。

妾は別に色（間夫）がいる。そのことは妾も色も（周囲の人）分かっているが、それを分かていないのはただ一人主人だけである。つまり、色（間夫）は主人を知っているが、主人は色を知らないのである。

死人相しらす存生よりの間夫 一〇六 8

店中で知らぬハていしゆ一人り也 七 18

小栗 賛。文句取が言いたかったまで。

清 同。持つてまわった句解は必要ないでしよう。かえって、句の面白味を半減させてしまふ。

佐藤 同。

51 なんとちへかとわるい知恵を出し

粕谷 本句は二文字、字足らずである。勝句刷には「い」と補足してある。

句は、わるだくみの計画である。おそらくは吉原行きであろう。

四ッ人り寄るとけしからぬ悪ルいちゑ

傍四 9

山田 賛。やはり「なんと」の次に二字分脱

落しているのでしょうか。

大野 仲間内ではよい知恵だが、一般から見れば悪い知恵。吉原行きに賛。

清 「わるだくみ」と解釈しては、この句の面白味がフツ飛んでしまふ。いい知恵なのである。

なお、二字脱と言われるが、「なんとちへか」とでも通る。七字・八字の破調句に編纂しなおされたのかも知れず、軽率に二字脱字とも言えない。

佐藤 同。

52 いんどうをわすれたやうに和尚い、

粕谷 葬式の最後にする経文や法語を引導というが、いつも葬式の一番最後に行うので、それを坊さんが忘れていたから最後に言うと、変わった視点で葬式を見ている句。

いんどうハ思ひ出してハ何かい、

明二桜5

いんどうハとんと死人をしかるやう

安元礼5

ひつくりさせるがいんとししまひなり

安五信3

山田 「忘れていたから最後に言う」ではなく、とぎれ／＼にお経を読むので、あたかも

「忘れたやうに」というのではないか。

小栗 「引導」を辞書で引くと礎説の如く記述してあるが、そうではなくて、葬式で、最後に和尚が「喝」と一声、大声で叫ぶことをいうと思う。この「カァーッ」という前は低い声でボソボソと経文を唱えるだけなので、突然の大声にびっくりするのであるが、主題句はそれを「忘れていたのを思い出したように」と表現したものである。小生の記憶によれば、これは和尚が死人を叱ってこの世への思いをたきらせる（成仏させる）ものだという。

清 同。礎稿も山田・小栗説のように言いたいのであろうが、文章が未成熟なのであろう。

佐藤 同。

53 松過のけんくわハ暮の相手なり

粕谷 暮れに借金取りと喧嘩したが時間切れで終わった。年が明け、松の内はお互いに自重したが、松が過ぎてからその喧嘩が再燃した、ということだろう。

あてもない松に預けてくれをぬけ

八10

伊吹 賛。江戸時代の人が、いかに正月を大切に思っていたかがわかります。

清 借金取りとの攻防を喧嘩と表現するだろ

うか。小生は年忘れの席あたりの喧嘩を持ち越したと思うのだが。

佐藤 礎稿でよいのではないか。

54 三人になるハじきさというとなば、

粕谷 三人目は子供だろう。この言い方にトゲを感じる。その理由は、①妊娠してしまつたので、急いで結婚式を挙げた。②単に嫁の好色をあてこすつた。どちらともとれるが、いずれにしても鑑賞の範囲であらう。

伊吹 「辞葉」・「三人」の項の主題句の脚注に「孫の出来るを楽しむ」とある。夫婦二人なら自分のはけ者だが、孫が出来れば子育ての助言なども出来る、守も出来る。今が辛抱、孫が出来れば自分も仲間にはいつて楽しくなると思っている姑ではないか。

小栗 伊吹説に賛としておく。嫁をもらつて「二人」になつて、もうすぐまた一人増えるのを楽しみに、ということに。

橋本 礎の言うようにこの句あまり温かみは感じられない。しかし好色というより夫婦仲のよさを当てこすっている感じ。

清 橋本説に賛。夫婦仲の良いのをヤツカンでいる姑と考えていた。

佐藤 同右。

秀句鑑賞

同人吟 板尾岳人

17月号から

上げることにする。

熱い珈琲下さる妻という女

新家完司

多くの青春へのドアは川柳だった。大喜びで階段を登りはじめ、最初にあげたドアが、大阪万代池の麻生路郎宅だった。ちよび髭を生やした人が一冊の川柳雑誌を渡してくれた。それが川柳の深みに嵌って川柳を味わうことが出来た第一歩である。その後階段を上るのとドアをあけるのをくり返したが、一度として失望したことがなく、良き先輩に恵まれ、喜びは大きくなるばかりで現在に至っている。

僕に与えられた秀句鑑賞の前に最近一通のハガキに二句の川柳を書いたのが届いた。他人の句の盗作と言う。盗作が世に出ると困るのが選者である。例えば紙に描かれた水墨画を薄く剥いで二枚にする「相剝本」なる贋物もある。或る川柳家が一万句集を堂々と広げて課題吟に取り組んでいるのを目撃したことがある。他人の句を批判することは良いことだが上五・下五を変えて自分の句にすることは許されない。故高橋操子さんが「他人の句を真似ると、その句に心が無い」と言われた。敬意を表して巻頭句、準巻頭句二句を取り

僕の住むマンションの階下に、美味しいコーヒーを飲ませてくれる故川村好郎先生お氣に入りの喫茶店があり、毎朝食後座りに行くのだが、時々降らないでゴソゴソしていると「お茶入れましょうか」とうちのカミサンが言ってくれる。うちの女房・うちのワイフ・うちの嫁、主婦は気楽な稼業となったというより正体不明の呼称でもある。作者の奥様にお目にかかったことがないけれど、美人で容姿端麗、妻であり、女であり、一家を支える二つの柱のうちの一つなのだろう。

奥さんが美人で主人覚えられ 岳人

陽炎でとけるわたしの現在地

木本朱夏

面白い句だね。現在地は現住所でも、本籍地でもない。今現在作者が寝ていようが、立っていようが作者の足が地に着いている処。朱夏さんの句にはいつも瑞々しさがある。

そしてこの句は自然現象と人間の行動観察の面白さを十二分に伝える作品である。

六月僕はアメリカ西海岸のサンディエゴ市近郊にあるブラックス・ビーチの海辺に立っていた。かんかん照りの中で陽炎でとけていく自分を体験した。全裸で日光浴などを楽しむ光景はとてども日本では、さすがアメリカ万歳と叫びたくなるような風景だった。

草はまた萌えて別れたままの人

長谷川 春蘭

悲しさのあまり、と言うより悲しみの極頂において、雑草が枯れてもまた萌えるという動作に、別れた人を想い出す行動をとらざるをえない人間を問う作品で、それが深い感銘を与えてくれます。年齢を重ねられた作者だけの自我にとどまらず人間一般の貪婪な美の追求を見ることが出来る。

春蘭さん頑張ってますね。

雨が降るゆつくり母に手紙書く

土橋 睦子

私事で申し訳ないが今日(6/22)は僕の母が死去して十四年目の命日である。

母という字に弱い僕にこの句が飛込んで来たので取り上げよう。この句には、ある程度の演技があり、演出過剰と思う人が居るかもしれませんが、やはり母情という普通の感情

で古典性につながります。しかし母性愛、夫婦愛といったものは万葉の昔から、尽きない永遠の題材になっている。

雨の演出もよいが、ゆっくりもまたよし、母に手紙を書いた記憶はないけれど、この原稿を書き終えたら法隆寺近くの父と母が眠る墓へ参ることにする。梅雨の最中雨の日に、母の命日にこの句を見出させてくれた作者に感謝、ありがと。

燃える種いく度落とした火消し壺

川崎 ひかり

火消し壺はもう死語かも知れないが、五七五と奇麗に出来上がった川柳。

燃える種とは人間本来無一物という禅の悟りにも通じるものがある。

むかし竈さんの前で薪で御飯を炊いたことがある。そして燃え果てた木を消し壺に入れたことを想い出す。この句はそのような状態を詠んだ句ではないが、消し壺の中の間に直結するような力をもった川柳で、単純ではあるけれど感情を無限に広げてゆく深みのある句になっている。そして、なん度も落すに着眼した句。年を取ると人生はこういうものなのかと、耳をすませば消し壺の中から、聞えてくるように微妙さがこの句の気分を深めている。

消しゴムが働きすぎてやせました

富坂 志重

見えない木目を読む如く、モダンな句。やせましたとはうまい的確な句語を用いて巧みだ。ワザとらしく聞える川柳だけれど当然日常生活の情景をうまくつかまえていて、暮しに結びつく気持ちのいい川柳です。

消しゴムと、やせると言う組み合わせの不可思議なところをついた鋭さがこの佳句を生んだことになる。働きすぎもよいけれど、年齢を重ねる毎に仕事はほどほどに。川柳という趣味をゆつたりと幸せな状態で舞台の上で踊る俳優のように隠し味を身に付けたやさしくてきびしい川柳だ。

古くとも国旗国歌を愛します

山門 幸夫

日の丸にこだわる僕は戦中派

藤解 静風

右の二句を秀句鑑賞の的にする句ではないが、盗聴法・住民台帳法・日の丸、君が代の法制化等、ざわざわ、がやがや、日本国土の狭さもあるけれど、なんと我々も含めて気のない国民だと反省する毎日だ。

六月にロス・サンディエゴ・ラスベガスを旅行、アメリカ大国の広さ、大きさに圧倒された十日間、延長一七〇〇キロの高速道路は無

料、片側四車線、スピード違反はない、一三〇キロのスピードで正しい、いたる処の建物に星条旗が翻翻と揚つている。ここはアメリカだ、我々はアメリカ人だとスケールの違うおらかな国民性を見せつけられて、君が代だ日の丸だと国歌、国旗問題をがやがやと言う日本人同士の口論に嫌気がさす現状の情けなさが気になる。大らかに日の丸を揚げ、大声で君が代を歌えないものかと残念だ。

日の丸を揚げると軍事国家に戻るのか。
チャンネルをたくさん持つっているつばみ

政岡 日枝子

川柳の魅力の一つにこのような句がある。単純な流れの中で下五のつばみで人間が共感できる動きのように見えてくる。この句のつばみは、椿だろうか。桜か胡蝶蘭なのか、僕ははなやかな花よりも、雑草のつばみがよく似合うように思うが、作者の胸中の花は何の花の蕾なのだろうか。

花の生命力の急がないで着実に進行してゆく自然の風景が目には浮ぶようだ。そして、つばみは庭の広狭や人間の貧富にかかわらず等しく季節循環の恵みを与えてくれる。

以上秀句鑑賞という対話の時間の短さが小聲で唄うような喜びに変って行く。

“ありがと”

水煙抄

河内天笑選

河内長野市 大西文次

堺市 梶本哲平

団体さんお着き徳利勢揃い
柳には雪折れがない長寿法
田圃道村の選挙で舗装され
千枚田一役買った村起し
割勘で大酒呑みに誘われる

綾部市 藤田芳郎

割れ鍋へ妻の火加減水かげん
食べるものみんな美味しい試着室
挑まねば山微動だにしてくれぬ
雑踏の触れ合う肩の皆他人
胴長短足それがどうした米の飯

大阪市 亀井円女

ハードルを越えたあの日のあの若さ
眠る前心の汚れをチェックする
ロングラン三夜つづいた亡母の夢
息子のようにどこか気になる小淵さん
クラス会きれいに老けて口達者

窓あけて寝よかみどりの風浴びて
同期会先生米寿生徒古希
苦勞して負けさせた分税が取り
そんなことあった判決やつと出る
介護という善意を金におきかえる

横浜市 金森徳三

類が類呼んでる恐い医療ミス
空爆が終り地雷がまた残る
鑑定に出して宝が一つ減り
整列を終えた早苗の関の声
父の日は心配するな酒でよい

横浜市 山梨雅子

姿勢よくしないと服が悲しそう
ハーモニカ吹くと夫も歌いだす
栄転の名刺実家へ見せにやり
無料パス見せる手つきも慣れてくる
一年の老い認め合うクラス会

京都市 高島啓子

ご近所は鍵のかかったドアばかり
口出しを控えておこう子のくらし
探検をしたいと思う梅田地下
幼年期ここで遊んだ法善寺
好きな人待つてゐる時間までも好き

伊丹市 延寿庵野鶴

欠けてるがしつかり喋る縄文土器
車座に筋金入りの鬼がいる
仮面脱ぎ地酒を交わす旅の宿
サバイバルしんどい顔は見せぬ主義
チェーンソー命断ち切る樹の呻き

三重県 佐々木森哉

死に神が闇で嗤っているいのち
腹に棲む鬼が今夜も酒を乞う
ご臨終 時計の針が哭いている
ハンガーに孤独を吊つてふて寝する
別れたひとの涙と思う 雨止まぬ

堺市 和田つづや

童心にかえる 草鞋を履くだけで
場違いなところで讚美歌聞かされる
筋違い怒鳴り散らして酔うている
茶髪でも国は守つてみせましょう
黄昏れて来たよズボンに折目ない

羽曳野市 永田章司

肩の荷と貯金が消えて子等巣立ち
関経連よ野村頼みは情け無い
純金は一寸行き過ぎ月見草
金融界後を濁して立った鳥
不景気で企業の姿勢透けて見え

羽曳野市 安芸田泰子

下手な嘘だから信じたふりをする
しがらみを避けて独りのままでいる
ときめきを忘れた鏡曇りがち
生きている証のように灯を点す
一人居の夕餉短し冷奴

和歌山県 坂東和代

長風呂の夫をそつとのぞきみる
ドナーカード折角だと言われそう
次の世も一緒になると恐いこと
ああいよいよ言つてられないこの世相
よい女だが本当の事を言ひすぎる

岸和田市 不破仁緑

歯の奥の山椒に活を入れられる
同窓会逢う度毎に丸くなる
独り酒 雨の音だけよく聞こえ
雨の日の逆光もよし花菖蒲
病院の待合室で健康法

横浜市 豊田羊子

エレベーター乗って髪型確かめる

友が来るさあ大掃除しとかねば

人間の名前でそつと猫を飼う

ここからは出ちやいけないと猫も知り

娘ののろけ聞いて夕餉の刻となり

横浜市 布山嘉信

子育ての鴨は健気な母子家庭

とき解る日本の闇に明かり射す

世話やかす子が母の日を忘れない

価値観の違いといわれ言葉のむ

路を煮る上手さよ世事に疎くとも

横浜市 北沢街湖

先輩と競う巢立ちのホーホケキョ

時差ボケにガイドの声も子守歌

待ちきれずお好み焼をへらで押す

八ミリにヒヨコヒヨコこれが私なの

阪神が勝つて夢か幻か

横浜市 近藤道子

長生きを望みポックリ死を願う

携帯を老いも若きも鳴らして

腰痛がくしゃみを止める息止める

阪神が勝ったニュースを二度も見る

イエスノーはつきり言つてうとまれる

横浜市 平達也

自分では立てぬ悔しさりハビリー

プライドがあつて寂しさ堪えている

利便だけ追つて人間駄目になる

腐っても鯛のつもりで生きている

はげましは齒の浮くような美辞麗句

横浜市 鈴江純子

未踏地に誘われている古希の脚

二人旅今が旬なのかも知れぬ

老いの日々何とかなるさ二人なら

未知数に期待の孫へ向きを変え

ジェラシーも込めて祝辞が述べられる

横浜市 芦田鈴美

草取りはどくだみの花散つてから

境界が分かる両家の披露宴

ナストマトガーデンングに含まれる

三月の暦残して子が巢立つ

大好きが犬にあいさつして通る

横浜市 山下省子

茶をいれてくれる夫を自慢する

木の芽どき過ぎて芽生える初夏のウツ

負けること覚えてからの夫婦仲

衣がえ早速街に見せに行く

糸引いてなめくじまでが自己主張

東京都 井上 つよし

真夏日を木陰伝いの万歩計

振興券貰ろて政策悪く言う

新潟県 高野 不二

踏まれてもひと花咲かす草の意地

へそくりが太ろうはずはない利率

飲んだかまだか忘れまた飲む薬漬け

五十年前に帰れぬクラス会

無為徒食せめて散歩のゴミ拾い

楽天家にもストレスと言う弱み

高速に入ると渋滞する都会

お見舞が気安う診断下してる

川崎市 和泉 あかり

滋賀県 中 宗 明

髪切ったことにはだれも無関心

予期しない祝辞言わされ無我夢中

空いているシルバー席で脚を組む

異動時期ひそひそ話 気もそぞろ

恋をしているのにお腹空いてくる

タクシーが止まってくれぬ俄雨

歯を磨く美味しいものが食べたくて

蜜月の旅路を重ね共白髪

泣き言は止めたと明日は言えそうだ

憂鬱も精密検査で吹き飛んだ

浜松市 田 中 知行

和歌山市 水 田 秀 男

洋酒一滴 紅茶におとし夏立てり

ハイテクの時代に背けカタツムリ

夏草に風の先見ゆ古戦場

定年がひたひたとくる縄暖簾

草を刈る美貌に会えり平家郷

そのけとペンツが走るハイウエー

酒蔵に入りゆく背なの暗くなる

関空で大阪弁のお出迎え

盆踊り誰も月など見ておらず

七転びしないようにと子と思う

札幌市 三 浦 強 一

和歌山市 森 口 美 羽

金か暇何れかがない人生さ

倦怠期カーテンの色変えてみる

年金が出るじいちゃんの玉手箱

胃袋へストレス詰めているあなた

バンザイをせず友送る下り線

伸びる芽を切らずに伸ばすのも情け

肩書をまた増やしてるお人好し

不意打ちの風に心を盗まれる

伏字まだ埋まらぬままに多喜二の忌

何を着ても安く見えない顔である

和歌山県 杉山 精子

効能も知らされぬまま処方箋
おしゃべりな花から先に売れていく
久々に持つ鉛筆の良き香り
近すぎて熊野古道とは疎遠
養生のベッドで爪がよく伸びる

田辺市 大峠 可動

炎天下命のために貰い水
風に習うて走って見たり歩いて見たり
横に点 点 漁火ゆれる牟婁の海
死も一度生きるも一度酒をのむ
世紀末写経に罪を背負わせる

尼崎市 田辺 鹿太

この歳で甘えに帰るところがある
ひと言が過ぎて真冬に逆戻り
豊かさの裏で心が涸れてゆく
ライバルは人さし指の先に居る
執着を断って父権の座を降りる

尼崎市 森安 夢之助

人形と会話上手な三歳児
押しつおされつ川を流れる人生よ
妥協して闇に光が見えだした
頂点の椅子へ残した僕の影
追伸の小骨が喉へ引っかかり

尼崎市 内田 美也子

生きているから味わえる鮭茶漬け
刻々と余白を埋める時計草
すんなりと仲間に入る話ずき
休む暇なく口動くバスの旅
出世した友のおごりの苦い酒

神戸市 船津 とみ子

五月晴れ今日も散歩の杖をつく
笑顔美人になりたい杖をつく身でも
友に会う友もわたしも杖をつく
明るい顔で珈琲館へ歩を運ぶ
丁寧にお化粧をする五月晴れ

兵庫県 山本 泰子

手ぶらでもちよつと寄り道したい家
万が一ということもあり宝くじ
草千里ねころぶ空の深い青
ダイエット考えてみる風呂の中
よし来たと昔包丁持った腕

兵庫県 安達 厚

もうあかんだけは言わないことにする
行きましょか行こうかまでの旅プラン
振込みで顔見せないで行くお金
顔あろて見てもピカソはわからない
凍てついた日など忘れて咲くぼたん

三田市 北野 哲男

タイガース強し黙ってもう一本
スーパ―で挨拶好きの人に会い
元気でなそんならまあとそれつきり
寝た切りも年金だけは振込まれ
真つすぐで突き当っては疎まれる

姫路市 服部 一典

就職難エステに走る男たち
赤ちゃんにたつぷり聞かすクラシック
妻の愚痴流れの中で渦が巻く
一人なら娘を生めと里の母
長い付き合い短い一生友が逝く

島根県 毛利 幸

廃屋の垣根のつつじ主焦がれ
減反の荒地棚田が世を写し
廃業の店の看板語りかけ
ファミコンに夢中の孫は耳もたず
同窓会昔の序列見え隠れ

島根県 菅田 かつ子

子も孫もみんな出かけて淋しいよ
皺の顔たててくれたる優しい子
難民の姿戦後の残影を
外食も時たまだから美味しいよ
笹ずきん被せてもらう笹だんご

出雲市 城 多喜

終章を燃やす火種を抱いている
優しさを身に沁みぬよう受けている
病名のつかぬ病を持っている
いい顔だきつと幸せしてるんだ
大嫌いな主人と言うひとは

出雲市 川島 和歌子

再会は涙と笑顔が入り混じる
妥協癖ついて進歩が見当らず
油断して昨日の場所でまたころぶ
羽目はずしバランスを取るお母さん
花回廊 花の数程出合う顔

出雲市 岡 あきら

草むしりすると野菜が喋りだす
朝の南瓜内気な雛花の囁き
面白い手紙を待っているポスト
片便りと思う手紙を書いている
どの彩の花とも会話できました

益田市 岡田 たけを

C Tの検査へ死んだふりをする
担当医明日は手術と軽く告げ
全身麻酔のなかで真つ赤な血が流れ
ライナック照射に負けてなるものか
羨まし重患ナース一人じめ

松江市 松浦登志子

束の間の梅雨の晴れ間に木が笑う
すんなりと決めてうんざり悩む癖
どことどことても気になるだれとだれ
物心ついたころより敵つくる
描きやすいように景色を移動する

島根県 福岡博利

寝ころんだ田圃大きな道になり
たつぷりと溜めこんでいる冷蔵庫
シヨベルカー蛍の宿をもつて逃げ
妻に注意したばかりに蹴躓き
立ち話のとっても好きな回覧板

鳥取市 福永ひかり

ポリ容器しつかり洗いごみに出す
四車線になって近所が遠くなる
カンフルを何回打てばいいだろう
感謝していたのが当り前になる
パソコンをもはや避けては通れない

鳥取市 谷岡清子

風のまま案山子が踊る天命と
ポケットにチョコ隠しおる児のえくぼ
不況風ネオンは命減るばかり
旗なびき三億円が客をつる
ときめきを忘れど女紅をひく

鳥取市 宮脇道子

内臓もらい手がない齢になる
姿なきローンが重くぶらさがる
預金より夫婦長寿が利得です
南極にゴミが置かれて泣いている
毎日が極楽トンボ髪そめた

鳥取県 加藤公子

悠々と水平線をひとりじめ
隣まで帰って来たとかかる母
老いてまだ一人住まいを主張する
青空を眺める余裕でたベッド
空爆の停止速報はつとする

岡山市 清水金太郎

飼育した蛍飛ばして客集め
運命と諦めながらまだ迷い
神仏に祈る事のみ多くなり
白内障夢ははつきり妻が見え
未だ声に張りがあるよと励まされ

宇部市 高山清子

帰って来たたら一回しのお中元
老いてなお男と女業火燃え
夫あれど女でいたい恋をする
あの世までトキメキ捨てぬ喜寿傘寿
同情が抜きさしならぬ羽目になり

今治市 野村 清美

目を閉じて反省明日のバネにする
口下手の優しさわたし知っている
無視されてじつところえる泣きばくろ
ごめんねとハッキリ言えるお人柄
生き甲斐はフアイトを燃やす趣味がある

今治市 中村 好恵

ポストまで遠まわりする若葉風
免許更新あと十年は乗れるかな
カタカナ語辞典と遊ぶ梅雨の入り
欲がいっぱいあって辛抱しています
しまなみを歩き五感を遊ばせる

今治市 塩路 よしみ

賞罰なくて裏も表もない笑い
坂道を下ると膝が笑い出す
ついでだから洗うと言って脱がされる
耳打ちをされてほんのり紅がさし
妻の座を守り通して梅漬ける

今治市 渡邊 伊津志

赤く咲く花も緑に助けられ
悩むほど人に優しくなっている
ジャンプして架橋を覗く桜鯛
餌次第理解の早い雑魚の群
体ごと海図になっている漁師

愛媛県 中居 善信

終戦日あれは小二の夏のこと
終戦日リングの唄を歌おうよ
八月の夜は戦争語るべし
間違うて押すかも知れぬ核ボタン
テポドンへうっかりしてた平和惚け

愛媛県 安野 案山子

クーラーを入れて風鈴臍を曲げ
仏壇が賑やかになる盂蘭盆会
いざピンチ妻のリードが冴え渡る
太陽を弾く若さに見惚れてる
こつこつと貯めたお金を当てにされ

愛媛県 黒田 茂代

朝顔の涼しさ演じきった青
幻想の螢生み出す水の闇
香りのいい紅茶を淹れて雨の午後
わが道を行け無理すなと娘を思い
執着は包んで神様に任す

香川県 瀧井 勝

女にも道はだんだん広くなり
親の愛された子供の非行歴
辛口が苦い顔して饅頭食う
曲り角突然前に現われる
親の愛雑収入に仕訳られ

鳴門市 八木芳水

女房の髭の動きで舟が出る

プライドを引きずっているバツジ族

最前線で火の矢を浴びる役ばかり

約束を守らぬ鬼の面構え

内心はかまって欲しい切り口上

福岡県 岩崎和女

譲られた席へどうにも落着けず

傷心へ誰の言葉も受けつけず

ライバルが居るからうしろ振り向かず

ピアノ購入人もダンスも追い出され

モナリザの笑み真似てみるコンパクト

北九州市 岡田幸生

戦友と思うペン牝豚いつか消え

老眼が拒絶している説明書

診察に安堵 晩酌五割増し

諍いで別れた友の出世聞く

男にも孤独を埋める長電話

高槻市 左右田泰雄

焙られてくるりとイカの逆上がり

真ん中が恐くていつも隅にいる

メリットのない肩書も無いよりは

この池も調べてくれとめだか達

奔放に生きて世評にこだわらず

吹田市 大谷篤子

父逝って小さくなった母の影

定年にまた新しい明日がある

窓拭いて空もわたしも透き通る

遠い耳友の電話が弾まない

写真からはみだしそうな孫五人

吹田市 三浦 憩

食欲はなくても入るかき氷

バーゲンが忘れさせてる交通費

ヤキモチを妬くと幼い顔になり

冷たさが愛情ですと夏の膳

友達のはなし得難いものもくれ

吹田市 後藤 志津香

なごましてくれる牡丹の前に立ち

牡丹の館しつかりと目に納めとく

大輪の牡丹 手塩にお守りさん

恋をしてオイと呼ばれて五十年

控え目で個性豊かな美人妻

放方市 二宮 紫鳳

ウォーキング歩幅そろえてダイエツト

水田に巷のあかり揺れて初夏

こだわった方が負けだが流せない

そつのない生き方をして友いない

大役を終えてビールが快い

総理殿気合一杯たのみます

きれいな事言つても退職金は取る

新築に招かれ賛辞ありつたけ

あの指のひねりが魔力名投手

ママさえも持てぬビトンを娘がさげる

老いの技子等に残して竹とんぼ

電話口裸ですねん言わんでも

鍵かけてあるのに叩くなよトイレ

知つたかぶりあとで急いで見てる辞書

嫁はんに話せぬはなし聞いてやり

古稀祝い夢盛る皿は小さめに

息抜きをきつちりと引く時間給

成り行きで他人になれず旅続く

口出しもお金も出さぬ子の新居

完璧な夫の失敗ほつとする

切り抜けば裏で総理の首が切れ

気がついて日めくり束でちぎる母

コソボから見れば不況もまだ甘い

青い目の嫁が精出す野良仕事

幸せに見えてる他家の窓明かり

大阪市 中村 叡子

大阪市 星野 ひさ

大阪市 小泉 ひさ乃

大阪市 大川 道子

リストラをして越後屋の生き残り

ブルーギルびわ湖浄化のために食べ

介護保険私やポックリ逝くつもり

サッチーの話題に電波使い過ぎ

公約の手前覗いた横田基地

これでいいなと思わないのが職人だ

容疑者にしたくはないという美貌

老いの闘い遮断機がよく降れる

男でもない女でもない老いの会

就職内定大学の孫眩しいな

日の丸談義角がくずれる冷や奴

人の傷わかる頃から世に負ける

すぐ二の矢つがえる思慮の浅い鬼

未知数の人が眩しいことを言う

出る杭が打たれる訳を考える

一言がひと味違う男振り

とても長過ぎる転ばぬ先の杖

身に付けた芸と上手に歳をとる

野心家の油断仮面のまま眠る

胃に落ちた言葉赦して陽が沈む

大阪市 平井 露芳

大阪市 尾崎 黄紅

大阪市 一本 勇太

大阪市 三浦 千津子

大阪市 中澤伽羅

お留守番たのまれはった仏さま
わたくしを見たら遮断機降りてくる
ボランティア雑巾縫うたのがはじめ
梅漬ける梅雨を忘れたように晴れ
座ったら大きく見えるお父さん

大阪市 榎本日の出

マージャンもゴルフも知らぬまま生きる
聞き上手話上手で夜がしらむ
タイガース勝ってわが家も安泰に
灰皿を数えて見れば十個あり
棚ぼたの話に母も座りこみ

堺市 矢倉五月

ハイハイと今日は素直な影法師
誰も皆何か難儀を持っている
子離れの手は子供から放される
ポケットにいつかいつかのカード持つ
化粧水パンパン頬に朝の意気

八尾市 田中トシエ

ヒマワリの絵より大きい二重丸
梅雨明けて傘が幾つか入れ替り
宇宙まで飛んだ寝相の孫がいる
泣きに來た訳も聞かずについ叱り
洗車して明日の風を追いかける

八尾市 與田明

錦鯉つつじの花を飲んでいる(玉串川・川床附近)
反省はしてるが減らぬゴミの量
妻の愚痴もスイカの種もグイと吐く
ド忘れに辞書が笑ったやさしい字
膝小僧かばって歩く万歩計

藤井寺市 岸本寿代

模様替え気分も若くなりました
張り切った若いポーズでぎっくり腰
傘マーク運の強さで決行す
寝つかれず闇よりの声夫の顔
口下手であいそもないがよくはやる

羽曳野市 川田晋

減量を指示する医師の太りよう
決意して下戸になりきる休肝日
わざとらしく英語をつかう旅がえり
議論より事前根回しする会議
抜歯した悔いを入れ歯が噛みしめる

羽曳野市 西村りつえ

太陽もうつぶん晴らす磁気あらし
ひとりこけきりきり舞いの核家族
誘われる時が華よとことわれず
慣れすぎた家で躓きケガをする
つぶやきでスター再生月見草

富田林市 大橋 鐘 造

露天風呂浮世忘れた顔が浮き

5センチの高さ気になる車椅子

夢抱いて走り続ける走馬灯

目をつむり妥協する手を叩いてる

お互いにとぼけ上手で回る独楽

富田林市 山 原 昭 水

後輩から世渡りのコツ学んでる

生命保険満期のお金で夫婦旅

水曜は美人看護婦いる内科

言い訳を考えながら梯子酒

悲しいな喧嘩の元は金のこと

河内長野市 印 藤 智 子

防寒具持って乗り込む冷房車

健康になる番組のはしごする

雨の日は電話魔になる老女たち

大きめで老いてもだっこされ難い

ストレスは自慢じゃないが持っている

河内長野市 木太久 正 一

リストラの野茂は再起のトルネード

難聴の母と娘のフアクシミリ

娘の背中大きく見えて二児の母

老夫婦生きてる証ごみの量

新幹線のサンドイッチが好きになり

横浜市 三 村 八重子

造っては壊す歴史をくりかえす

駆け込んだドアがバッグを離さない

落ちてなお妥協はしない紅椿

表札にまで年輪が浮いている

横浜市 福 田 由美子

目覚ましの代りに起こしおこられる

高校生先輩はみな神様だ

見舞金多くて熱がまた上がる

おまかせのコースに頼る洗濯機

横浜市 田 中 笑 子

カウンターぶらぶら踊る脚の位置

年金をあてにしている旅支度

太陽と風が洗濯機を回す

横浜市 小 野 句多留

たっぷりのバターに妻の嫌味節

一〇〇円店駄菓子屋気分ホイホイと

お互いに機嫌とるより御勝手に

デパートで時間を決めて散る二人

横浜市 秋 元 和 可

矢印の通り喪服は曲らされ

ウインドーの中で私が背をのばす

掌で数えて渡すおこづかい

群がって修行一途に座禅草

横浜市 長 島 亜希子

テレビに写る数十秒へ美容院

バドミントン口で半分勝負する

趣味までも婦唱夫随で平和です

同じ値の水とワインを飲み分ける(スペインにて)

八王子市 井 上 京一郎

論客のただ揚げ足を取るうまさ

一球の怖さ孤独な投手板

まあいいや妻の記憶へ妥協する

紫陽花へ降れば優しい雨となり

日立市 加 藤 権 悟

良く笑う美人で値切るのがうまい

返信の封書がボクを弾ませる

縄のれんここにも地域振興券

年だなと思う動悸の歩道橋

秋田県 湊 修 水

年金の枠をはずして花見酒

休耕田汗の匂いが消えている

万緑に心を染めて山歩き

あごの髭ネクタイ代り年の功

徳島県 安 宅 美代子

ネクタイは渋いが赤い血がたぎる

許し合う二つ並んだめし茶碗

当然の事さえ曲がる袖の下

弱点を庇い合ってるやせ蛙

香川県 原 賢

山ひとつ越えればきつと旨い水

修羅越えた男は後をふり向かず

求人欄見て一日が動き出す

ライバルを見つけスピード上げる音

愛媛県 宮 本 末 子

蟠螂は斧を使うて愛撫する

毒茸の色増すほどに毒が増す

春愁やひとり奢りてビール抜く

降り出して衣を替えたお茶の会

松山市 山之内 八重美

勇気出し若い仲間の輪にとける

やり直す勇気は妻の助言から

無口でもバランスとれた老い二人

太陽の恩恵受けた健康美

今治市 加 川 はく文

泣きながら帰った怪猫じやらし

身の内の性善説がゆれている

目の上の瘤が手に負えなくなつた

屁のような男が導火線になり

今治市 越 智 青 園

詮索をされて伸びたい芽がちぢむ

ライトアップ消えて大橋眠くなり

ストレスを浮かせて一人のむワイン

心配の種はつんでも直ぐ生える

樹齡七十 兎小屋での床柱

高知県 桑名孝雄

灼熱の恋ももうすぐ要介護

熱八度否応なしの休肝日

不況風ケチが大手を振っている

高知県 百田幸

ほめ言葉探すに困る披露宴

振興券普段買えないものを買う

大ざっぱ太氣の嫁と同居する

人生にこんな良い日もあったんだ

高知県 近森功

死神が迎えにこないのも困る

アリバイを知ってる僕の影法師

病窓の朝日に命噛みしめる

ついて来た妻に今では手をひかれ

出雲市 加藤スズコ

青空に周り気遣う煙草好き

新婚の思い出残し逝った亡夫

正直に育つ笑顔のブチトマト

特攻の里に平和の鯉のぼり

安来市 原 煩惱児

戦争の歴史続ける地球人

慈雨を得て骨休めする農婦症

東西の横綱を張る元外人

家事介護田圃畠と農婦症

長い髪切って気持ちさをグッシユさせ

倉吉市 大下智子

長いこと食べていません厚い肉

良心は田舎に置いて町に住む

父の日が昨日だったか田植時

鳥取県 鳥羽玲子

エレベーター緊張感が満ちてくる

親の敷くレールに乗らぬひとりっ子

一着の服で吉弔間に合わす

達筆の横へ縮んだ自署となる

鳥取県 鳥羽直市

無職です初風呂なんて気がひける

金婚の赤飯特に味がある

耐え抜いたマラソンだから拍手する

行革のゴール見るまで惚けられぬ

鳥取県 藤山弘子

一面の牡丹に見とれ食すすむ

生真面目で不器用すぎて影薄い

長い目でしっかり見よう反抗期

長い道楽しくすごす知恵くらべ

鳥取県 竹森 富久江

雨だれに目を白黒とかたつむり

人間と気まま道中やっている

円心がゆれる波紋の中にいる

負けた日は人間くさく堰をきる

米子市 小 塩 智加恵

安売店元校長もティッシュ提げ

二度聞いて納得出来ぬ介護保険

料亭で一番安い鯛茶漬

家一軒壊され空が広くなる

米子市 森 脇 麗

おんなです華やかまとい生きてます

ピンクまだ似合うか鏡に問うて見る

長い髪バツサリ切って初夏の旅

川柳にのめりこみ辞書フル回転

鳥取市 夏 目 健 一

夕立の始めと終わり血が踊る

新聞紙敷いて老人ジベタリアン

恋しさをぼつり漏らしたわが不徳

近ごろは負の臭いするサラリーマン

鳥取市 録 沢 風 花

堂々と征った学徒が還らない

すいとお粥に耐えて山河あり

さつま芋飢餓を救った誇りもつ

不死鳥が焼土に翔んだ半世紀

鳥取市 中 村 金 祥

ナイフ持つ子供に愛の鞘探す

平成の景気潮目を抜け出せぬ

神様もスランプなのか寝てござる

ライバルの手口を真似てずつこける

鳥取市 山 本 益 子

晩酌で働く明日へ活を入れ

人生の早い流れに乗りきれぬ

まだまだと厨譲らぬおばあさん

何くそと燃える気迫は衰えず

倉敷市 家 守 政 子

そろそろと信号チエック古希の坂

核家族 親孝行も死語となる

人生って喜怒哀楽のフルコース

心のファッション言葉きざんで呆け防止

岡山県 国 米 きくゑ

花の下団子兄弟踊りだす

母退院わが家に戻る笑い声

ラップして昨日の鬱は冷蔵庫

吾が城の地鎮祭です陽燦々

岡山県 土 居 ひでの

不況風案外強い小商い

ノホンと急かす力まずマイペース

良妻のシナリオにあるビタミ年菜

ダイオキシン放置の付けが回される

奈良市 田 中 賢 治

外交は爆弾の雨試しおり

人の子かゲームのように弾を撃ち

不審船忘れた頃に日本海

プロの唄 長崎の雨旅誘う

京都市 高村 吉之助

思ひ出を束ねる紐は赤い色
美しい筆跡またの日を約す
ネクタイにもう用のない仏顔
人生の続編自然のままに生き

京都市 勝山 美千代

新緑にカラフルな髪きらめいて
紫外線七十路でも気にかかり
軒下のじつと我慢の回覧板
三世代波風たてぬ気の配り

高槻市 江原 秀夫

インターネットないが愛するひとといふ
残り少ないページをめくる梅雨の朝
片思い奇麗な花は胸に咲く
畳替え決まったらしい話

吹田市 須磨 活恵

切なさを残して傘の雫切る
断つた後の淋しさ髪洗う
優柔不断そんな私を持て余す
どんぐりの背くらべ軽く笑えない

豊中市 岸田 知香子

三兄弟池の緋鯉も曲に乗り
衣食住見渡す限り赤信号
定休日それぞれ好きな道へ散り
すれ違いざま携帯に驚かされ

交野市 森本 益弘

高山に来て高山を見ぬツアー
バスツアー土産物屋は忘れない
飲む量が減った減ったとOB会
胸の内盗み聞きして欲しい人

寝屋川市 井上 すみれ

ムキにはならずされど川柳
妥協せぬはずが向かいから目配り
足もとがサッサ歩きは夢の夢
病のコレセットシメユルメ楽しんでる

東大阪市 北村 賢子

百度踏むおもいへ神は味方する
プロポーズすんなり受けてすぐ離婚
堰切つて小鳥がしゃべる梅雨晴れ間
笑った日泣いた日みんなとおしい

八尾市 山本 宏

しくじりの海に自信が溺れてる
まじめでもあくびをしたい時がある
諦めて腹をくくると先が見え
子の方にいつもはためく母の旗

八尾市 高橋 明子

竹藪へへそくり入れて置きたいわ
不況下の猫も杓子も空の旅
青空へトキも鴉に負けぬよう
倒産とこっそり金を握ってる

低金利どこまで続くぬかるみぞ
八尾市 井尻民子

偏差値と違う知性を求めている

遠雷に雨が近いよ鬼ヤンマ

高速道新車ばかりがつつ走る

松原市 和気慶一

倒木が旅人拒む畝傍山（大和三山巡り）

香久山に衣は消えて球の音

夢を消す耳成山の公園化

藤原宮栄華の跡に塚一つ

大阪市 伊藤博仁

夜の電話入れ歯補聴器と大慌て

お隣に謝ったこと猫知らず

ベッド駄目床に毛布でよく眠れ

戒名はもらったけれどまだ行かぬ

大阪市 立蔵信子

途中から説教されるほうになる

リーダーの気配り皆が知っている

気まぐれなおとこと遊ぶイヤリング

あいづちを打つと後が甘くなる

大阪市 熊代美智子

何時までも持っていたいな好奇心

病む夫の影ほそりたるいとしさよ

球根はやっぱり春を知ってます

古稀すぎてまだ迷いますわが余生

空襲の悪夢コソボで蘇り

絶景は帰って篤とビデオ見る

計報欄つい年齢に目がとまり

紫陽花の色鮮やかで雨宿り

堺市 見本ちや子

嬉しくてちよつと寄り道して行こう

夜景の色素敵に酔わす摩天楼

財布の紐しっかり締めて行っただけ

道草のつけアレルギー連れ帰る

富田林市 中井アキ

あやとりで遊んでくれた姉が近く

口答えされて本気に怒り出す

口が裂けても言えぬ亡夫の秘密

存在が大きくなって恋になる

藤井寺市 太田扶美代

私も持ってますごく微量の毒

残り時間へ割り込んできた手術

口元をきれいにさせる京言葉

このままで気がおさまらぬ雑巾がけ

羽曳野市 森田四三郎

お互いに葉見せ合う医者帰り

難聴を隠し笑顔で答えてる

昨日菖蒲今日はバラ見る万歩計

ダイオキシンの裏山が今末期ガン

羽曳野市

川口信子

岸和田市

木村正剛

どくだみの花ブライドを持っている
日曜の靴ゆつくりと呼吸する

雑草があした見たいと背を伸ばす

苦も忘れ鼻唄も出るしまい風呂

河内長野市

水谷正子

岸和田市

宮野みつ江

旅バツジだけが頼りのシャトルバス

釜山ならアンニョン ハセヨ使わねば

旅四日キムチ キムチで風邪治る

シヨッピング勧め上手でドルが減る

河内長野市

柏本靖子

貝塚市

吉道時子

菜園をほめて貰った茄子胡瓜

首縦に振らぬがあれば許す顔

ゆつくりと母の歩幅で散歩する

揺れている心見抜いていた相手

河内長野市

杉谷カズエ

泉佐野市

備後三代子

カタログのモデルと歳が違い過ぎ

沖縄に住んだことある話好き

この人に会うと何でかしやべり過ぎ

ポストまで休みやすみの杖をつく

岸和田市

村垣鹿太郎

泉佐野市

大工静子

ボケ防止趣味の仲間と英会話

恙なくど忘れ多く生きています

俺だけが辛抱すれば丸く済み

息抜きと姑さんは旅行中

ボキヤ貧で相手の出方を探ってる

入社式ネクタイ締めてヨーイドン

たんまりと残りそうだよ負の遺産

父の名を一字もらった不肖の子

岸和田市

宮野みつ江

眠られず夜明けの散歩など想う

雨続き欠伸しているスニーカー

狂言のはずの薬が致死量で

犬と目が合うと散歩をしてしまふ

貝塚市

吉道時子

三猿でだんだん狡くなる私

イヤリングしている方が息子です

愛だけで生きて行けると信じた日

敏感な鼻を持つてるアレルギー

泉佐野市

備後三代子

いつからか棚に座った万歩計

お守りを忍ばせて臥す手術台

激痛が走り夫の手にする

物忘れしても独り居わらうだけ

泉佐野市

大工静子

両の手に杖髪カット面映ゆい

妹ののど聞きバスの旅終る

蟻一匹栗の役を努めてた

小さい家大きな声の犬を飼い

泉佐野市 稲葉 洋

夏だけの祈りでないよ黒い雨

平凡の良さに気づかず追うスリル

今度こそと構えた時は来ぬチャンス

お題目上手につけている酒席

大阪府 澤田 和重

血圧を庇って妥協ばかりする

トップより無事完走を願う妻

封を切るまではわくわくした手紙

壊れないように介護の母を抱く

尼崎市 清水 久美子

赤潮で浮いた魚を跨ぐ猫

空梅雨に感謝している物干場

土壇場で妻のパワーにぶら下がる

好転の兆しハイエナ寄って来る

尼崎市 軸丸 勝巳

新緑が紅葉に勝るもみじ寺

顔だけの仲間ひと声散歩道

どの順に捨てよう書庫の前に座し

赤穂城本丸跡に人がない

兵庫県 谷田 多美子

百合ボタン昔の美女の露天風呂

利子つかぬ現金袋軽くなり

二〇〇〇年正月曾祖母となる予定

死亡欄知り人一人また一人

兵庫県 広瀬 房江

相槌を打った火の粉の熱いこと

さつま芋の苗は予約と偉そうに

花苗の彩にドキドキしてしまう

月が瀬のくず餅恋しい御堂筋

篠山市 倉垣 恵美

百足でなければ死なずにすむものを

息詰めてきりとり線を切っている

ひよどりも食べたらいよいよと言う孫と

一行のメモがばあを喜ばせ

篠山市 円増 純子

十二単脱ぎ捨てたごと牡丹散る

ショック療法それから余生歩き出す

せつかくの湯治で湯疲れをおこし

舞う種の落ち着く場所は風まかせ

和歌山市 福重 美子

留守電と話すのにかしこまり

一輛に一人貸し切り終電車

短距離を詫びて車の客となり

メンバーに犬も連れてく行楽日

和歌山市 上地 登美代

納得の行くまで伸びる豆の蔓

ど忘れが多くそら豆食べている

ピコグラム可愛く呼ばれ怖いやつ

信念を通せば友がひとり去り

和歌山市

上地

忍

お世辞から本音ちよろちよろ息苦し
豪邸に住んで負債を出す社長

夏休み計画先に歩き出す

顔の染み消えたらベル嘘ばかり

和歌山市

土屋

起世子

浜露店で買った目刺しで差し向い

虫喰いの青菜も並ぶ無人店

廃校のブランコ風と遊んでる

まだ青春弾む二人の時刻表

和歌山市

武本

碧

父さんを嬉しがらせる娘のお酌

九十の母から見ればまだ子供

レモン湯で明日の背骨整える

偏差値が摘み取っていく個性の芽

和歌山県

中村

君枝

リストラに根こそぎ夢をもぎ取られ

気どつてるそんな指摘も愛の鞭

旅立ちはまだ未だ先と見る油断

しょうぶ湯に手足伸ばせる幸思う

和歌山県

村中

悦男

たてまえの会議はおどる楽しげに

浅漬けの小皿のなすを半分っこ

余生とか言ってる暇のない多忙

異議なしとさくら大きな声を出し

横浜市

川島

良子

血圧が朝の機嫌を左右する

いい姑になろうなれそうなれるかな

マンションがつつぎ売れていて不況

横浜市

保田

絹子

症状に医師もこっそり虎の巻

枕辺に置くだけでいい安眠剤

空いている車内の寝息釣られそう

横浜市

荒井

広和

沈黙は金と口下手遣り返す

活用が出来ずもつたいないで溜め

器量人などと煽てて使われる

静岡市

中西

雅

顔の皺佳き日のために磨いとく

包帯の長さのわりにかすり傷

食進み浄土まだまだ遠いとこ

静岡市

増田

扶美

山並の新緑に座し生きる幸

旅帰りホッと夕食冷やっこ

それぞれの持葉花咲く同期会

静岡市

大村

正雄

階級章むしる兵あり終戦月

墓磨き心で話す盆供養

遠くから拜んで帰る奥の院

尾張旭市 三浦きぬ

不器用な人も混じって温い仲

微笑みの謎が解けないまま別れ

亡夫が見ていると思えば生きられる

三重県 尾崎勤

どのように切ってもスイカ揉めさせる

本当は黒と眉毛のひとり言

欲しい顔して駆け引きに負けている

鳥取市 松本つね子

法華經に会えて祈りを朝な夕

老いてなおかたみ宝石手ばなせず

独り居のヨイショヨイショで心和ぐ

鳥取市 福島庸二

失敗を薬と念じ立ちなおる

しっかりとしすぎ良い時悪い時

他人にはごみに見えても宝物

鳥取県 橋谷静江

価値観の違いで客間あれている

独りごとってストレス流してる

柳友はとことん話し合える仲

鳥取県 平井栄翁

居酒屋の暖簾素直に宵を待つ

子を庇う屋根も老いたか雨がもる

気の長い返事は聞かん事にする

鳥取県 西垣美知子

たのしい日鏡に笑顔だけうつる

母さんの笑顔に押されファイト湧く

鉢植も背すじ伸ばしたにわか雨

宇部市 中田忠夫

りきんでも若い力に勝てやせぬ

突き抜ける空の青さに負けそうだ

好き嫌い何て今更いえぬ年

熊本市 北川一進

茶のみ友だった二人が今夫婦

繁華街女のような男の子

笑顔だけ忘れぬレジのエチケット

唐津市 岩崎實

病院で退職校長二三人

欲しがらぬ孫へ無理して買ってやり

あり金で半額セール買わされる

倉吉市 牧野芳光

地球の裏の戦争よりも花粉症

何回か落ちたことある綱渡り

よく吠える犬飼主とそのまんま

米子市 猪森スミエ

貧乏ゆすりパパ禁煙の実施中

一張羅の顔して父の参観日

いわし雲梢の背伸び呼びながら

香川県 向山治延

下味をつけるお酒をぬすみ呑み

老いらくの恋の噂が実を結び

縁有つて迎えた嫁が杖となる

奈良県 上村季世恵

毒含む白い煙がこわいです

人々に笑いふりまき由利が逝く

商いの老母日除けの頬かむり

篠山市 仲井素水

手術台白寿へつなぐ意気に燃え

病む床に川柳付き添いしてくれる

運命を懸けて今日乗る手術台

川西市 田中喜俊

クイズ好き雑学からのしぼりこみ

こんどこそ買わぬときめた宝くじ

ボーナス月関係ないが思いだす

兵庫県 北川とみ子

落ちこんで明日が見えぬほどに酔い

売り言葉買つて明日の虹が消え

消えそうで消えぬ絆の温かさ

伊丹市 榎谷郁子

すんなりと伸びた手足に陽が眩し

怒らない父の背中さはさびしそう

掌の中で泳ぎ上手のお父さん

尼崎市 河津正治

剪定の鋏 若芽に思案顔

一生の絆をくれたレモンティー

イメージが先走りする医者嫌い

兵庫県 徳平毬子

トキの雛不況日本に灯をともし

みどり児を抱いてあやして日が暮れる

嫁と姑がまん比べで和を保ち

尼崎市 尾宮弘治

野地蔵か天使か泥の子の寝顔

デパートを出て駅裏でうどん食う

娘似の孫段々と婿に似る

和歌山市 吉村さち子

疲労回復いきいき旬の夏みかん

拒んでも手を変え人も変えて来る

銀行へバス往復で消えた利子

橿原市 西本保夫

セクハラなど無かった時代男女別

好かったねチャーターしてた車イス

あくまでも顔には出さぬ不仲説

和歌山市 和田美寿子

白鷹は一途にとんで春来る

人の事程々にせにや迷惑に

命より大事なわたしの預金帳

大阪市 榎本舞夢

青春をお金で買っている紳士

自分史を書くため文字を習い出す

色々と揉め事あってまだ夫婦

大阪市 木村青生

ストレスも写ってほしいレントゲン

気心が分かって舌がよう回り

頃合いに母の知恵借りゴールイン

大阪市 安達はじめ

汗を拭く喉へビールが音をたて

初めから泳ぐつもりのないビキニ

真夏日が続き今夜も冷や奴

高槻市 西谷治三郎

前夜からなぜ並ぶのか宝くじ

生前に下見しておく葬儀場

留守しても空巢入らん交番所

高槻市 執行稲子

太鼓橋の辺り亀さん別天地

明け方の夢捨てに行く昼下り

友人のカメラ真ん中憚らず

高槻市 乙倉武史

体力に自負ありエスカレーター横目

熊が出た話お山も不作だな

退職金目当てふわりと天下る

八尾市 鷺見章

蛙鳴き鳥も鳴きだし初夏になる

五月晴れ雲湧き出でし信貴生駒

新緑の光まぶしくあたたかし

八尾市 中島春江

春日傘初任給でとプレゼント

表札の苗字ふたあつ仲よくて

ハイキング方向音痴山笑う

東大阪市 今岡貞人

辛抱と我慢でへばりつく会社

使い残しの命に酒を酌いでやる

浮き沈み荒波越えてきた傘寿

和泉市 横山捷也

妻臥して花見便りを遠く聞く

ネクタイを外して女房の愚痴を聞く

五月雨の棺の母に傘をさす

岸和田市 亀井皎月

欲望が消えた老いにもある願い

朝市が生きた魚を焼いて売り(大阪湾小漁港)

夏を請い木陰をもらう木を植える

枚方市 大昇隆広

里人は村が総てで充分で

同窓会過去の甘さへ集う宵

雑草と区分けされても花つける

鳥取市 西尾 敬之介
携帯が細かい指示を与えてる
面倒な管理がいらぬ花を買う

鳥取市 森 本 和 子
ただひたすらに走る名馬に膝ぬらす
北斗七星見つけた孫の声はしやぐ

鳥取県 高 尾 京
いもづるも食べた金沢乙女の日
精霊舟平和な海へ流したい

島根県 松 本 聖 子
万歩計買った矢先に足痛め
初盆を迎える準備急かされる

島根県 武 島 ちよえ
七坂を越えて息つく句読点
ゆくゆくは事は怖くて口にせぬ

松江市 福 間 芳 枝
助かって体験談が笑わせる
手拍子に誘われやおら安来節

松江市 小 川 注 湖
まな板の音に味噌汁匂う朝
過疎の里メダカもない子もない

出雲市 梶 ミ ツ エ
ワープをやる事知らず七十坂
過ぎし日のアルバム友と語る夜

出雲市 板 垣 夢 醉
無施錠さ押して駄目なら引いてみな
梅干しと梅酒で夫婦意見割れ

倉敷市 森 本 文 子
忘れろと砂に書いてる蟠り
永らえた命に咲かす花を選ぶ

横浜市 福 島 かづ子
老母の知恵受ける器のない私
角がとれ夫豆腐を好んでる

横浜市 生 坂 サト子
見送ったテールランプの元気良さ
雨雲を左右に分けて見たくなる

横浜市 伊 藤 ふ み
絵手紙へ釣れた魚を描きあげ
少年のバイク響かす闇の中

千葉県 大 川 晚 翠
貸し渋りサラキンだけが花ざかり
花形も何れ減びる変革期

東京都 清 原 悦 子
旅先で決心ついたプロポーズ
日記帳やめて自由に生きてます

京都府 前 上 英 一
阪神が強くて老いの毬弾む
コンビニの前を通れば足が向き

兵庫 高見末野
雨風に吹き飛ばされて根付く種
ハイハイと言いつつ走る電話口

兵庫 西山八重子
涙もろい母が火種を持ちつつけ
春うらら日向ぼこではもの足りぬ

宝塚 飯西ミサヲ
このままで六十代よいつまでも
諦めた求人欄をまた見てる

箕面 唐住実
新世界芝居小屋とてビルの中
目かくしにするひまわりを移植する

豊中 みきわきみ
この不況なけりや余生が楽しめた
懸命に生きて未練のない老後

大阪 中井正秀
真つ赤より薄紅の梅が好き
おお寒い猫も動かぬお水取り

堺 荻野正雄
乳飲ます娘の肩越しに孫覗く
田植え機へ注いでやりたい缶ビール

羽曳野 山本たけし
釘文字も折目正しい祖父の遺書
来世紀担ういのちをそっと抱く

第11回兵庫のまつり ―ふれあいの祭典― 川柳祭

とき 12月3日(金) 午前10時半開場・1時開会
ところ 兵庫県民会館9F大ホール

神戸市中央区下山手通4-16-3

◎事前投句 (JR元町・阪神元町駅から徒歩7分)
各題1句・3人共選

「男」 小松原爽介・中塚 礎石・坂本須磨代
「担ぐ」 去来川巨城・遠山 可住・石井 冬魚
「重い」 泉 比呂史・赤井 花城・平山 繁夫

応募料 1000円(郵便小為替を句稿に同封)

応募方法 所定の用紙、または400字詰め原稿紙

右半分に作品、左半分に住所・氏名・年
齢・性別・電話番号・大会の出欠を明記

応募締切 8月31日(火) 当日消印有効

応募先 〒675-0065 加古川市加古川町篠原町83-2-308
泉比呂史方 ふれあいの祭典川柳祭係

◎当日投句 各題2句・大会出席者に限る

「胸」 齋木 敏子 「宝」 かなもりかず枝
「急ぐ」 奥田みつ子

出句料 500円 出句締切 午前11時半

主催 ふれあいの祭典実行委員会・兵庫県ほか

大空の、、ろ

(103)

橘 高 薫 風

福田山雨楼の随筆『保土ヶ谷より』から。

初代川柳の墓碑

川柳始祖の墓碑が大震災の損害も受けず東京浅草龍宝寺内に現存していることは悦ばしいことであるが、碑面の法号は『契壽院川柳勇縁信士』となっており、同寺の過去帳及び祖翁に關した著述「元祖」二世三世川柳墓参法筵会——九世川柳著——にある法号『契壽院川柳勇縁信士』とは一字違っているのである。

祖翁の幼名は勇之助、俳号を縁亭と称していたのだから「勇縁」の方が授けられた法号に相違なく、墓碑のは誤字を刻んだものと言われている。けれども苟くも墓碑を刻むからには、そう軽々しく間違つものではないかと言と考えられ、碑面が正当なのではないかと言う気もするのである。これは何人かの努力によつて確証を得ての誤りなら、誤りであるとはつきりして貰いたいものである。

次に句碑「木枯しや跡で芽をふけ川柳」であるが、従来大破しているのを今般全国川柳人の支援と「きやり吟社」の斡旋によつて

再建の計画が運ばれつつあることは同慶の至りに堪えない。しかるにこの辞世は柳多留にも其他の印刷物にも載せられていないらしく、菩提寺龍宝寺内に五代目川柳が、祖翁の五十周忌の追善に建立した「木枯し」の碑を信するからに過ぎない有様だ。この辞世についても何か他に嚴とした文献明証が望ましい。

川柳翁の史実

初代川柳の偉業を追慕讃仰するわれ等川柳家にとって、翁の全貌はおろかその片鱗でも正確なことはわからぬと言つ状態は甚だ遺憾千万な次第で、芭蕉翁が俳聖と尊崇され、その一挙一動に至る迄審かにされた文献資料があるのと比較すれば、実に変な相違である。

しかも川柳翁の史実探求はこの上究めようたつてもつ既に絶望の淵に立っているのであるかも知れない。諦めの一手より外に残されていない訳だ。しかし只諦めただけではいけない。万句合を通じ柳多留を通じて、翁が残した不朽の精神をさへ受け継いでおくならば、よしこの上の史実探求が徒勞に終つると

もわれ等の詩川柳は益々確固たる根を張り花を咲かせてゆくことが出来ると思う。

今日までの史実では柄井八右エ門翁の歩んだ道は、当時の町人の生活以上に出ていない。

俗人として俗社会の雑踏にもまれたのに過ぎない。しかも、その生活の中から民衆詩川柳を拾いあげたのである。われわれは川柳をその草創の期にあつてよく育ててくれた祖翁の偉業に満腔の敬意を表するものであるが、彼もまた一個の市井人に過ぎなかつたという点において、寧ろ百万の味方を得たようならこびに浸り得るのである。祖翁の史実が審にされていない不満を打消して、猶余りあるよろこび（誇りですらある）を抱いている。

長野県の川柳村

長野県東上郡に川柳村という村がある。その読み方も正しく「せんりゅうむら」でわれらが詩川柳と何等か縁があるのではと……友人に調べて貰うと、川柳村は「川中島の古戦場」に近い寒村だが、「將軍塚」という古墳のある所、そして村名の由来は、往年のこと「石川」という字と「ツツ柳」という字を合併して出来た村に「川」と「柳」と合わせ命名したらしく、いわれを聞けば失笑を禁じ得ないが、それでも何となく懐しく機會があれば一度訪ねて見たいと思つた。

沙湖抄

八木千代選

白で咲く理由があつたアマリリス
 ほどく時とてもキリキリする拳
 アメリカンチェリーの赤は大人だね
 雨に濡れると蛇の匂いのする手足
 影は正直 肋骨が透けている
 T字路の多い町だな五十肩
 生き方は晴雨兼用傘の中
 うしろには青い思い出しか見えぬ
 竹の秋 差し出し人のない手紙
 階段の途中でひいたアマダくじ
 抹消してあるあの時の一行詩
 小さくも銀河にひとつずつの顔
 これだけの器と思う夕焼けよ
 糊代に真つすぐ糊が貼れません
 握つての特急券は火薬だぞ
 歯が生えて何でも噛んでみる花子
 早食いに慣れた私の不憫な胃
 図書館で会うもう泳げない魚
 呼び止めて下さる方と歩を合わす
 開くたび本はかすかに呼吸する

西宮市	牧瀬富喜子	和歌山市	古久保和子
鳥取市	上田 宣子	大和高田市	鍛原 千里
和歌山市	川上 富湖	鳥根県	松本 文子
鳥取県	新家 完司	あきる野市	佐藤 季穎
同		弘前市	一戸 ツネ
		富田林市	池 森子
		鳥取県	鈴木 公弘
		大阪府	神夏磯典子
		鳥取市	坂田和歌子
		松原市	小池しげお
		米子市	鷺見 正子
		大宮市	新井 朋子
		和歌山市	福井 桂香
		藤井寺市	高田美代子
松江市	川本 畔		

野茨のすこし汚れし白さかな
 無抵抗に絹豆腐崩される
 現実を直視している時刻表
 やがて私も低い椅子にこしかける
 背を押してくれる夕日もつれてくる
 空っぽの頭で卵割っている
 螢火のその先にある熱帯夜
 捨て切れぬ物に足場を奪われる
 老母はまだ大きな石を抱えてる
 鳥は歌 人はころろを失つた
 夏が来る老いのたつきに変わりなく
 間引かねばますます庭が狭くなる
 お母さんと呼びたいこと母もある
 愛は哀なりわたしの変換キー
 まな板の音がくるつていない今朝
 許せないことを許してこそ母だ
 菜の花の過去にランブの炎あり
 ひまわりに薔の夢の無限大
 足洗う今日の貴重な距離の垢
 疵だらけのまま窓際へ移される
 この柱この机との汗をふく
 神さまの応えも明日になりそうだ
 姉一人守りきれずにきた暦
 七曜のめぐりの中に風の日
 出会い頭に壁にぶつかるこれも運
 死ねば損だから必死で生きている

和歌山市	木本 朱夏	和歌山市	奥田みつ子
八尾市	高橋 夕花	和歌山市	川上 大輪
海南市	三宅 保州	米子市	木村富美子
米子市	政岡日枝子	寝屋川市	籠島 恵子
寝屋川市	森 茜	鳥取県	谷口 次男
		尼崎市	春城武庫坊
		富田林市	藤田 泰子
		鳥取市	石上 悦子
		吹田市	山本希久子
		米子市	白根 ふみ
		守口市	結城 君子
		弘前市	斉藤 為
		香芝市	大内 朝子
		弘前市	蒔苗 果林
		砂川市	大橋 政良
		米子市	茂理 高代
		鳥取県	土橋はるお
		米子市	青戸 田鶴
		和泉市	中川 楓
		和歌山市	桜井 千秀
鳴門市	八木 芳水		

合掌をしても涙が出てこない

怒声聞こえそう伝言板のなぐり書き
介護から少子化 死ぬとは生きるとは

絹糸のもつれ切らねば治まらぬ

ちぐはぐの記憶つないでゆくこより

だるまにはだるまの願い起き上がる

糸と縄の間に紐が一つある

読書して蛍のように光りたい

良い顔をしてると鳥の絵に見入る

意識して日に五回ほど背を伸ばす

想い出は水の形で掬われる

真っ白い画布をくすぐる花言葉

形状記憶又すかたんをくりかえす

謀られたあなたが悪い花言葉

立ち読みの昨日の本が見つからぬ

雨天中止それ程深い仲でない

我が身さえよければなんて薔薇の刺

人脈を辿れば神の瞳に出会う

だんだんと潔癖感が曇る老い

始めて逢うた日のことばかり師も老いて

鏡の奥 影の私が覗いてる

耳栓の隙間に入る鈴の音

太陽の道から神が昇る夏至

露天風呂 熊野の星を畏れつつ

一人では生きていけない紅生姜

私の死角で火打石が鳴る

鳥取県 土橋 螢

寝屋川市 江口 度

八尾市 高杉 千歩

和歌山市 山口三千子

堺市 桜沢 千世

米子市 中井 ゆき

鳥取県 林 露杖

米子市 林 瑞枝

岡山県 江口有一朗

米子市 光井 玲子

和歌山市 吉村さち子

横浜市 菱田 満秋

松原市 玉置 重人

岡山県 小林 妻子

西宮市 西口いわゑ

鳥取県 上田 俊路

尼崎市 長浜 澄子

綾部市 藤田 芳郎

鳥取県 西原 艶子

西宮市 門谷たず子

池田市 栗田 久子

鳥取市 徳田ひろこ

出雲市 竹治かし

和歌山市 楠見 章子

横浜市 清水 潮華

鳥根県 伊藤 寿美

ムツゴロウとトキの命にある落差

地球儀の何処かで花火揚げている

総裁にだれがなろうと西を向く

脳に冬 人事でない話だな

健康を重たいものとして捉え

一生が両手に余る数え唄

気がかりだ祖母が御飯をこぼしてる

正念場ころにわさび塗って出る

足を鍛える買物だつていいじゃない

弟の墓地のことから揉めてくる

転んだら只では済まぬ年である

ディケアー素直に言えたあたりがどう

持っていて良かったことに娘が一人

ふるりの海を奇麗に書き残す

飼われているように蜥蜴が足もとに

誘拐をされたか鉢が戻らない

行間に残る証を炙り出す

身の回り整理せねばと熱の夜

ミサイルでないから我慢する黄砂

風下で残りの愛をてのひらに

開き直ってサラサラ茶漬流し込む

仰向いて己れをさらすすかし百合

嬉しい日もやはり十八番のマイウエイ

自分史の出発点を亡父母に聞く

ストレスは釘を一本打って消す

向かい合う影にも活を入れておく

吹田市 石原 靖巳

和歌山市 福本 英子

鳥取県 乾 隆風

米子市 澤田 千春

倉吉市 野口 節子

川西市 松本ただし

唐津市 井上 勝視

鳥取市 岸本 孝子

尼崎市 春城 年代

米子市 門脇 晶子

大宮市 八田 敏

米子市 石垣 花子

横浜市 後藤 早智

鳥取市 富山檳榔樹

横浜市 金森 徳三

黒石市 相馬 一花

横浜市 保田 絹子

和歌山市 上地登美代

唐津市 久保 正剣

岡山県 山本 玉恵

羽曳野市 吉川 寿美

鳥取県 石谷美恵子

藤井寺市 太田扶美代

京都市 都倉 求芽

横浜市 川島 良子

横浜市 三村八重子

幸せを少しほぐしておすそ分け
引き潮に連れていかれた小石たち
山がそこにあっても登らないわたし
楽な下り考えながら登る坂
いい恋をしているな それはうちの猫
常識が抱きしめている非常識
宇宙から見る人類はカビだろう
人間に生まれたことを悔いる森
わたくしに天が与えた役回り
何か少し足りないものを探求する
如露の水 雑草一度かぶりたい
欲を追う他人の姿はよく分かり
別人のようねと写真褒め殺し
生きるため迎れば欲につきあたる
キャベツ乱切り男のためになど切らぬ
くずれてる豆腐の角は楽天家
ゴマをする男は俺の敵じゃない
雲の上のお人となってから無沙汰
サークルにときどき起きる乱気流
そむかない みんな右巻き豆の蔓
紙一重そんなに恥じることはない
まなうらに私の過去が集い合う
ラッキーチャンス足が速くてつかめない
知らぬうち軌道修正されていた
古釘がさびつき我が家支えてる
きょうだいの仲のよいのが遺産です

鳥取市	夏目 健一	鳥取市	池田寿美子	和歌山市	武本 碧	和歌山市	早川 盛夫	大山市	中後 清史	和歌山県	村上ミツ子	八尾市	志田 千代	堺市	吉道 時子	貝塚市	板東 倫子	大阪府	福士 慕情	弘前市	福士 慕情
愛媛県	中居 善信	和歌山市	田中 みね	和歌山県	堀江 光子	今治市	月原 宵明	今治市	富坂 志重	岡山県	野村 京子	今治市	小塩智加恵	米子市	山門 タミ	唐津市	安平次弘道	美祿市	北村 賢子	東大阪府	植田 一京
和歌山市	宮崎シマ子	八尾市	宮崎シマ子	岸和田市	宮崎シマ子	八尾市	宮崎シマ子	岸和田市	宮崎シマ子	八尾市	宮崎シマ子	岸和田市	宮崎シマ子	八尾市	宮崎シマ子	岸和田市	宮崎シマ子	八尾市	宮崎シマ子	岸和田市	宮崎シマ子

あつさりと切れて淋しい電話口
捨てた恋が泣いております僕の雨季
猫の背がアジサイ時雨もち帰る
流れ星 十指の罪を消すように
行くあてのない手鏡と見つめ合う
そよかぜに輝いているマタニティー
サン格拉斯ひと日を神に背きつつ
難聴に一人遊びが上手くなり
同じ道とれば敵とも味方とも
失敗を覚悟で背伸びばかりする
ポケのメモ意味の分からぬまま過ぎる
退院を許されましたガンだろうか
ど忘れを私の武器として生きる
季がめぐり杖つく姿気に止めぬ
甘え知らぬ娘に老いて甘えてる
松坂のファンになって若返る

牧瀨富喜子さんの白いアマリリスには理由があります。富喜子さんは七月号の「えこの花」など、うっかり見逃すような花々と対話のできる能力があるようです。花々も気を許し本音を吐露してしまおうでしょう。白い花弁は随意に、見つめるひとの心の色になります。白はそんな色、ましてアマリリスです。上田宣子さんの拳をほどくキリキリの音がここまで聞こえてきます。振り上げる寸前まで握りしめて忍んできた拳は、怒りの形に硬直してしまい、よほどの度量がなければ解けはしません。川上富湖さんの作品はお洒落ですね。初々しいサクラランボの淡紅色も好きだけど、アメリカカンチエリーの赤はわけしりの大人のよう、少しはみ出たような。出ないような。

— 水煙抄

秀句鑑賞

— 7月号から

西原 艶子

少子化のこれから担ぐ荷が重い

與田 明

昔、どの家庭でも子供は五人も六人もいた。今はせいぜい二人か三人。確実に少子化が進み大きな社会問題になっている。高齢化も進み、子供達はその重い荷を背負うことになる。

炎の中へ投げる懺悔の二つ三つ

円 増 純子

炎はマッチやガスコンロの小さな炎ではなく、護摩供養のような大きく高く燃え盛る炎。その中へ胸にわたかまる悔いを投げ込んで燃やしてしまうことができたならと作者は願う。

きりがない思案の果てに切手貼る

藤 山 太朗

どなたにあてた便りだろう。思案の果てに心を決めたとあり、迷いに迷った心の動きが読み取れる。私もよく経験するところであり、投句では投函する前まで思案が続いたりする。

熟年のハードル越えて欲が出る

宮 脇 道子

子も独立、職も退きだんだんと古い先が見えてくる。あれもしたい。これもしたい。生きている間にやりたいことがたくさんある。

平凡に終った日記書きにくい

橋 谷 静江

種蒔いた芽吹いてきたと書く日記

中 澤 伽羅

平凡な一日の日記は書くことがない。でもどんな小さなことでも、短くても書き残したい。読み返すと作句のヒントがあることも。

お互いにあげだこげだと立ち話

福 間 博利

電線の鳥もあきれ長話

坂 東 和代

前の句は方言が使われ、後の句は鳥の気持を想定しての風刺。共にユーモアがあつて楽しい作品だと思つた。

少しずつ自我を削つて丸くなる

杉 山 精子

自我を出し過ぎるとぶつかり易い。

それなりに燃えた日もある落椿

西 山 八重子

真紅の椿が咲き切つて落ちている。作者自身が心を燃やした日とダブリしさがあふれる。

大きめの制服親の期待着る

有 沢 せつ子

せつ子さんの川柳眼はとても確かで、作品はとても素直な作風。ブカブカの制服の姿が目につかびほほえましい。

ささくれた心を癒やすありがとう

鈴 江 純子

ありがとの一言が人間関係を円満にしてくれる。森中恵美子先生の句「人間の技の一つにありがと」もあり共に反省させられる。エレベーター互いにそっぽ向く他人

大 橋 鐘造

ガラクタを捨ててガラクタ買つて来る

水 谷 正子

前の句も後の句も何げないことに目が注がれていてなるほどと頷かされる。

一幕へ愚鈍の日々をくり返す

藤 田 芳郎

人間の一生は一幕の劇に似るといわれる。作者はきつと賢い生き方を模索しておられるのだと思つた。愚かなこともあつて人間らしく生きられるのでは。

タンポポが森の小径に楽譜書く

井 上 つよし

タンポポがポップポツと咲いてまるで五線譜上の音符のようだとほほえましい感性だと思つた。

首香のむ

西出楓楽選

嫁がせて少しお辞儀が深くなる

デジタル時計遊び心が萎えてくる

老眼鏡拭けば真意が見えてくる

気づかずに傷つけている五月闇

欲を抱く瞳は生き生きと光ってる

イヤリング揺らし謎かけ上手い風

引き返せない位置に来て自答する

糖衣錠の中に仕掛けが入れてある

いつまでをおんなの匂か紫陽花よ

花いちもんめ笛の音色がやせて行く

花柄の皿で幸せごっこする

中心に据えられやがて忘れられ

言い訳の嘘があまりに下手すぎる

ゆさぶつてみれば噂が落ちて来る

さようなら小骨は喉に刺したまま

躓いた石に本音を悟られる

戦場へ熱いコーヒー飲んでから

喜怒哀楽の空気が少しずつ洩れる

胸のうち話して明日の風を待つ

藤井寺市 太田扶美代

和歌山市 福井 桂香

弘前市 佐治千加子

西宮市 奥田みつ子

富田林市 藤田 泰子

和歌山市 古久保和子

大阪市 神夏磯典子

今治市 野村 京子

西宮市 門谷たず子

米子市 石垣 花子

和歌山市 川上 富湖

寝屋川市 坂上 高栄

八尾市 宮崎シマ子

岡山県 大石あすなろ

岸和田市 宮野みつ江

出雲市 園山多賀子

和歌山市 木本 朱夏

米子市 政岡日枝子

鳥取県 土橋 睦子

振り返る過去も私のいのちです

円周を出ないわたしの保身術

これ以上無理だとDNAが言う

もう少し大人になろう影法師

叱られる子へ婆ちゃんの役どころ

フーリング水と油がよく混ざる

体重を計った後に食べる菓子

愚痴入れたポッケが重くなってきた

一杯のコーヒーからの会者定離

塵ほこり払う程度のくりかえし

無人駅 時計真面目に動いている

あるがままを迎えてくれる終い風呂

遍歴の数だけ隅にあるルーージュ

惑星の森にこのころの城がある

私はわたくしなのだ変えられぬ

逆境の時はエナジー溜めておく

モザイクをかけて下さい欠伸中

臆病でその他の中にいるわたし

どちらかが折れぬと風は治まらぬ

続編は顔を洗って書くつもり

時々は釘を打ってる亡父の影

濡れ衣の乾かぬままに雨しとど

いつまでも一つの影が悩ませる

宇宙遊泳ああなたの胸ですつもり

父のナイフにいのちをもらう竹とんぼ

わがままを許す嫉の匙加減

大和高田市 鍛原 千里

寝屋川市 籠島 恵子

吹田市 山本希久子

尼崎市 長浜 澄子

米子市 鷺見 正子

芦屋市 黒田 能子

横浜市 田中 笑子

鳥取県 石谷美恵子

熊本市 永田 俊子

西宮市 牧淵富喜子

和歌山市 福本 英子

和泉市 中川 楓

和歌山県 杉山 精子

米子市 林 瑞枝

西宮市 西口いわゑ

箕面市 出口セツ子

藤井寺市 高田美代子

米子市 白根 ふみ

八尾市 生嶋ますみ

大阪市 辻川 慶子

岡山県 福原 悦子

羽曳野市 吉川 寿美

米子市 木村 春枝

富田林市 中井 アキ

八尾市 村上ミツ子

大阪府 大森 年子

投げた石 回りまわってとんで来る
物思う草に例えて耐えている

愚直の人 火の粉とどかぬ距離にいる
花をなでると明日はいい花咲くんだよ
一本の道を教えた父の背

一呼吸置いて自分が見えて来る

あいまいに生きては居れぬ世の流れ

仲直りでできますように貼る切手

不幸さきつと五分五分なんだろう

転んだらただで起きようもう八十路

不器用に生きても満ちる夢がある

煩惱と言う代物に毒される

影法師先へ先へと邪魔をする

風の向きばかり気にして生きている

話し中ばかり息災らし電話

講演へ出かけ居眠りしてしまい

まだ地球大丈夫かと陽が昇る

待つことに慣れて可憐な月見草

ドナーカード子は賛成をせぬと言う

新しい風に駿河の茶の香り

口開けて待つ雛が居てがんばれる

真剣に聞くヒートアイランドの話

ささゆりと内緒話をする古道

テンションの上があった声にとび起きる

喜寿迎えあちこち修理忙しい

ドナーカード持つて臓器を意識する

和歌山県 坂東 和代
和歌山市 桜井 千秀

大阪市 川久保睦子

鳥取県 さえきやえ

鳥取市 岸本 孝子

岡山県 土居ひでの

岡山県 矢内寿恵子

香芝市 大内 朝子

鳥取市 植田 一京

寝屋川市 太田とし子

和歌山市 吉村さち子

倉吉市 野口 節子

徳島県 安宅美代子

愛媛県 黒田 茂代

寝屋川市 森 茜

鳥取県 西原 艶子

和歌山市 山根めぐみ

今治市 野村 清美

寝屋川市 岸野あやめ

横浜市 後藤 早智

東大阪市 北村 賢子

大阪市 町田 達子

和歌山市 楠見 章子

横浜市 福田由美子

和歌山市 福重 美子

池田市 栗田 久子

ぬかるんだ日もあったよな共白髪
泣き顔を笑顔に作りし帰り

どくだみが負けじと白い花咲かす

視野変えて日々新たな散歩道

ひまわりに負けてはならぬ月見草

殻やぶるトキの誕生みまもる目

とっておきの小紋楽しく茶会待つ

捨てきれず子猫三匹もち帰る

半袖に替えてひじにもマツサージ

それぞれが携帯出したベルの音

特売でオパタリアンの鉢合わせ

恐山いたこの声が身を削る

過ぎし日々静かに思い飲むお酒

倉吉市 米田 幸子
東大阪市 田中美弥子

横浜市 清水 潮華

交野市 山川日出子

大阪市 板東 倫子

枚方市 森本 節子

大阪市 鈴木トヨ子

鳥取市 坂田和歌子

横浜市 山梨 雅子

大阪市 松尾柳右子

大阪市 津守 柳伸

弘前市 一戸 ツネ

和歌山市 和田美寿子

扶美代さんの句―娘の幸せを祈る心が謙虚な姿勢となり、気が

がつけば回りの人達に、お辞儀が深くなっていたという、母親

の切々たる心情であろう。また、結婚した本人を詠んだものとも

解釈できる。その場合、幸せを得た自信と落着きと見えるが、

前者を採りたい。桂香さんの句―作者の鋭い感性による見付け

の句。デジタル時計は刻々と時間を数字で表示する。遊んでいる

と置いてけぼりになりそうな切迫感が、中七、下五でよく伝

わる。千加子さんの句―老境に来て世間や人間が見通せるよう

になった面白さが、「真意」にぴたりはまって、含蓄のある

句。みつ子さんの句―気づかないまま人に傷つけていることは、

往々にしてあるだろう。その怖さを、最も闇が深いという「五

月闇」で表現したところが心にくい。この欄の選者は一年交替のため、九月号から宮西弥生選となります。ご投句有難うございました。

敵

青枝鉄治選



有頂天死角の敵に気がつかず
竹槍で敵懐心を煽り立て
敵対心あるとは見えぬよい笑顔
天の邪鬼敵が居るほど燃えてくる
ライバルに敵視されてる棒グラフ
敵陣へ塩を送った後日談
消去法こころの敵は金だった
四面楚歌味方も敵に見えてくる
手を組んで昨日の敵とうまい酒
ボクを敵にまわせないのはわけがある
考えりや自分以外はみんな敵
恋敵が影を潜めていて不気味
敵にせぬ肌と肌とで語り合う
左遷地の星の下にも敵は居る
恋敵彼奴一人でなさそうだ
輪の中の敵を上手に泳がせる
着飾った女おんなを敵にする
ライバルの達筆すでに負けている
敵はまだ駅のホームに立っている
身の内の敵に気付かぬ自信過多
堂々と敵から風邪をつつされた
七人の敵へ七種の変化球

潮義美セ狸早健愛千杜みめぐ正柳たあず大さち日枝俊
華男子子子村智一論代的ねみ劍弘つま輪子枝子

闇の中敵美しく見えてくる
一生の敵はお金と妻だろう
理解者が敵の中にも一人いる
肅々と敵地乗り込む持参金
天敵のように呑む友呪む妻
暮敵をやつと倒した茶のうまさ
七人の敵へネクタイ替えて出る
一番の敵はもう一人のわたし
敵にうしろ見せ殿の持つ気迫
ガイドライン仮想の敵に無理が
どの顔もやがては敵の入社式
出迎えの中に敵意の風もある
七人の中に女の敵が居る
目に見えぬ敵がいちばん恐ろし
空となり心の敵を追い払う

佳

敵に背を向けぬ男の土性骨
ライバルと同じ空気を吸って勝
敵さんもかなり刃こばれしてい
敵陣にたつぷり塩があるあせり
百万の敵に刃向かうペンの先

人

八人目の敵が臓器にしのび込む

地

癌告知でつかい敵だなと思つ

天

軸

ちらちらとガイドラインの仮想
中道を歩いて左右敵にする

典子 芳郎 圭郎 遠野 輝夫 白光子 重人 美代子
シマ子 勝美 宵明 政良 しげお 保州 玉恵 高夫 充子 寿美 あずき 寿恵子 計光 和重 中後清史

許すたび自分の殻が薄くなる
十分間廊下に立つて許される
新聞に許すあつた尋ね人
パパの服ベランダならと許される
負けて来た勇気をはめる子の喧嘩
三兄弟団子を食べて仲直り
許す気の母はことと小豆煮る
誠実に見えていたから氣を許す
許せない傷の深さが酔わせない
しきたりを時の流れに許される
みぞおちはもう許して朝の膳
迫いついてそつ手を出す交差点
何もかも許して紡ぐ愛の糸
許されぬ恋は昔のメロドラマ
言い訳はもう聞き飽きた始発駅
許してはあげる忘れてはあげない
わが罪を許すか海が風いている
ど忘れをしたと許してくれている
お互い様許す言葉にある温み
許す氣へゴメンナサイがなぜ言えぬ
許されることはないけど水子寺
ええいいわ言つた笑顔に嘘がある

勤 宵明 大輪 寛子 久仁於 多賀子 (安)美代子 義男 吉之助 ますみ アキ 由一 俊子 倫子 芳郎 扶美代 圭一郎 和重 勝美 勇太 (出)千代 和歌子

許

榑原秀子選



勤 宵明 大輪 寛子 久仁於 多賀子 (安)美代子 義男 吉之助 ますみ アキ 由一 俊子 倫子 芳郎 扶美代 圭一郎 和重 勝美 勇太 (出)千代 和歌子

花泥棒言えは許してあげたのに

初めからバレーてる嘘で許してる

小さい嘘許して下さい閻魔さま

許し合う心地球は丸いはず

真つ白な鳩は原爆許さない

あいまいに許してしまふ通り雨

許してるらしい親父のコップ酒

罪一つ許されそうな庭の花

めがね拭き許す言葉を選っている

許されぬかも知れないがそれも恋

沙羅双樹許すことにも慣れてくる

許されぬ足に驕りはなかったか

親だけは許す積み木を積み直し

ばくならばきつと許していただろう

許す気になってころは風になる

佳

許された自分が悲しくなってくる

這い上がる敵には腕を差し出そう

モノクロにすれば許せることなのに

嘘ひとつ傘の広さに許される

笑っただけで許すとは言っていない

人

みんなみな許す気である花時計

地

何もかも自分を許すから怖い

天

許すとは言わぬが父の目が優し 木村あきら

軸

許し乞うようなことなどせぬつもり

島

時子

寂子

煩悩児

雅城

隆風

権悟

有一朗

よしみ

ちかし

寿恵子

めぐみ

正剣

たもつ

剛治

あずき

雄々

保州

たず子

螢

しげお

ただし

たす子

雲

小熊江美選



真綿のよな雲ともうすぐ母になる

日本の進路を変えたきこの雲

雲を詩にロマンのあつた幼い日

雲がくくれる日本が狹すぎる

七つボタン雲の彼方へ行ったきり

雲行きが怪しくなつて貝になる

割り切れれば心の雲が消えて行く

雲掴むような話は聞き流す

遠い日の誓い忘れぬ茜雲

富士山を隠してしまふ憎い雲

リストラをされたか君もちぎれ雲

積乱雲も一度仕事したくなり

西方の浄土を映す茜雲

ちぎれ雲古里に老母一人住む

カップルに夕焼け雲が赤くなり

夏雲が祭り囃子をつれてくる

誘うごと故郷へ伸びる飛行雲

残照に雲は動いて明日を読む

ふる里へ便りを乗せて緋雲

青雲の志なら負けはせぬ

浮雲のように余生を送りたい

入道雲を見ると元気が湧いてくる

雲行きがあやし計画練り直す

入道雲亡母の童話がよみがえる

飛行雲B29もああだった

謎遊び雲と行方不明の無人駅

旅人も雲の行方は解らない

富士山はアクセサリーに今日の雲

雲に乗り一人歩きをする噂

ちぎれ雲子の住む方へ飛んでゆく

黙禱の脳裡に消えぬきの雲

流れ雲おやじは今も達者かな

さしのべて払つてやりたい月の雲

母と娘の絆は断てぬちぎれ雲

雲足の速さに本音言いそびれ

あかね雲に浮かぶは母の蜃気楼

おい雲一度お茶でも飲みましょか

佳

雲行きばかり読んで自分を見失う

疑いの雲が重なり雨となる

流れ雲子はそれぞれの夢を追

浮雲が明日への希望乗せている

悠然と我が道を行くちぎれ雲

人

ブランコが弾むと雲も踊りだす

地

明日を読む茜の雲にある希望

天

ちぎれ雲西方浄土行くのかも

軸

茜雲美しく燃え勇氣沸く

花匠

悦男

虹郎

勝巳

義男

清芳

さち子

しげお

愛論

多賀子

正雄

隆風

杜的

たもつ

螢

哲子

輝夫

重人

正剣

たす子

山門

タミ

初歩教室

題一姿

吐田公一
はだ きん いち

課題吟の場合、私たちはややもすれば頭の中で現象を浮かべながら作句することとなる。

これは当然のことのようであるが、川柳塔五月号巻頭言の末尾で薫風主幹が述べておられるように、川柳には真実、感動、出会いが大切なのであり、須崎豆秋さんのように、雨の題が出たら雨の日に街へ出て作句するような、真実の出会いを求める作者になりたいもの」とある。

出題によっては真実との出会いがむずかしい場合のあることは百も承知だが、できる限りご自身の体験を通した作句であって欲しいもの。

添削句

○干支聞けば後輩だった禿つぶり つよし
干支・後輩とやや理屈っぽい。もう少し単純に。着想はいい。

▽先輩とばかり思った禿つぶり

○美しく装う姿美しい 舞夢

辞書を繙かれると解りますが、装うには美しくという意があり、この句は同義語がトリプルされ、結果として内容が乏しい。

▽装えばまだまだ若い妻である

○六道へ心の姿美しい トシエ

六道は天国も地獄もあり、この場合は美しくとすることによってその目的とする意志が表現できるのでは。見付けはいい。

○追い越せぬ父の歩んだ広い背な 賢

追い越せない父の姿を詠んだ句は今までも非常に多い。着想を少し変えてみると

▽追い越すのを待ってる父の広い背な

○仮縫いに姿勢正して問う鏡 茂代

句が堅い。仮縫いの嬉しさを詠みこむ。

▽仮縫いの鏡が微笑みかける服

○一周忌母の姿見捨てかねる 美智子

下五に余韻がない。作句に心掛けねばならない一つに余韻がある。

▽姿見に亡母偲ばれる一周忌

○ヤングの愛求める姿蝶に似て 靖雄

できるだけ破調句は避ける。

▽求愛のヤングの姿蝶に似て

○浴客のゆかた姿が下駄鳴らす 栄翁

句に情緒が乏しい。殊に下五に一考を

▽くつろいでゆかた姿の旅の膳

○蠅叩き持てば姿を隠し蠅

てにをはの使い方に配慮を

▽蠅叩き持てば姿を隠す蠅

○緊張の姿勢の極み足先に

中七の表現が余りにも固い。

▽張りつめた姿が並ぶ面接日

○姿見は金婚の辛苦知りつくす トヨ子

姿見はと姿見を主格に持つて来られたのが失敗

▽姿見に写る苦勞の皺の数

○ライバルの姿見つけて角まがり 山雅子

○見えたのに姿見つめて消える友 タツエ

二句を合成すると

▽ライバルの姿が消えた曲り角

○姿顔より心優しい娘に決める 四三郎

上七を凝縮すると

▽容姿より心優しい娘に決める

○美男子の孫が生れて世話をする 政子

世話をするを少し敷衍すると

▽美男子の孫で世話やき甲斐があり

○姿見に心の底迄見透かされ 省子

中八の迄ををに変えると中七

○正視して後姿を考える 煩惱児

何を正視するのか考えあぐねる。余りむず

かしく考えないで。句意は異なるが

○妻ぐちる入り切らない姿見へ 正雄

下五と上五を入れ変えてみると

▽姿見へ入り切らない妻の愚痴

○とりとめた命姿見満足し 西八重子

リズムがブツリブツリと切れている。句は

流れが大事

▽とりとめた命を姿見に写し

○待っている佇む母の夜の駅

駅で待つ時は大抵佇んでいる。だから佇む

は冗長

▽娘の帰宅待つて母の夜の駅

○猫背では老けて見えると妻叱る 章司

語順を変えて反芻してみるといい。一度詠

んだらそれっきりというのでは句に進歩が

ない。着想はいいだけに惜しい。

▽老けるよと猫背とがめる妻の声

○立ち姿朝餉の支度妻元氣

リズムがときれ勝ち 賢治

▽キッチンに今朝も元氣な妻の音

○寝姿も自分に似てると満足し 青生

棒詠みの感じ(説明句)

▽寝姿も妻に似てくる齡となり

○寝姿も女らしさを醸し出し

▽振り廻す傘でフォームをチェックする サト子

振り廻す傘はただけでない。

○涙つば覗けば祖母の姿あり 禮子

祖母の苦勞の姿を涙壺で表現するとすれば

▽夢に見た祖母の姿は涙つば

○姿見を割られて母は耐え忍び 美弥子

割られてもとすべきで、次の語呂の関係上

母はのはを削除するといひのでは

▽姿見を割られても母耐え忍び

○姿見て駈け寄る程に姉に似て 美恵子

似てとあれば姿を詠まなくても(同義)

▽声かけた姉と間違うほどの人

○姿見をのぞくと髪が薄くなる 泰雄

薄くなるでは意が通じない。

▽姿見に髪が薄さが目立ちだし

○容姿より中身で勝負売れ残る よしこ

下八にやや品がない。参考句は反対の視野

だが

▽容姿より中身を買ってくれた人

○古の友の姿甦る 美寿子

中六の破調。もう少し感慨を詠み込めば

▽夢にまで見たなつかしい友と逢う

佳句

古里の味がしみ込む姿すし 純

折角の容姿を隠す厚化粧

見舞客店すまい正す老母の意地

マゴトで母親擬きよく叱り 勝久

すんなりと肢体楽しむウインドー 美也子

スタイルを写して歩くウインドー 民子

七十の年齢を姿勢で若く見せ

姿見に女がのぞく三歳児

後ろ姿に惹かれ急かせる万歩計

丸くなる背中に母をグブらせる

リクルート親には夢の晴れ姿

(心待ちした日)

手内職亡母の姿を思い出す

(苦勞した母の姿が彷彿と)

娘が嫁ぐ亡妻の姿が重なって

(父親の複雑な心境を)

姿見に子猫も並ぶ七五三

(ユーモアのある句)

娘の姿日毎に亡妻と近くなる

(着想の似た句はあったが)

姿見の帯を叩いて心決め

(決心が如実に)

小さくて仏のようになった老母

(老母の姿を上手に)

亡夫に似た姿も混じる梅田駅

(ジーンとくる句)

尾があれば尾を振る姿かもしれぬ

(一段と進歩・着想がいい)

私の句
アメリカの病める姿の銃社会

美也子

民子

宗明

西八重子

正雄

君江

宏

ひさ乃

一典

賢治

純子

要子

彩子

郁子

志重

『川柳からつ』二百号 記念句会走り書き

仁部 四郎

川柳塔唐津支部の月例会の句誌『川柳からつ』が、平成十一年六月号で二百号になりました。

その記念句会を六月六日に、唐津シティホテルで開催しました。主幹の橋高薫風先生をはじめ川柳塔の仲間が関西各地と熊本から計十一名、佐賀県内の人は番傘の人が多いのですが、二十一名、福岡県からも二名の参加がありました。総計で五十名の句会でした。

『二百号』は十六年と八ヶ月の時間がかかっているわけで、その間には〇〇周年の句会を幾度も開催し、前主幹の西尾葉先生にも来てもらったことが二、三回はあるのですが、二百冊の句会誌を重ねてみると、また特別の感懷を覚えるものがあります。全冊、手書きというのも貴重品かもしれません。毎月の日曜日が例会の日で、その日に冊子に載っている各人の句を互選・合評する楽しみを二百号に向けて持ち続けたいものです。

今回の記念句会では、主幹のお話に特に感銘を受けた人が多かったようです。「人間陶冶」という麻生路郎の言葉を改めて噛みしめたことでした。

選者を務めてもらった、前たもつ、高須賀金太のお二人にも衷心からお礼を申し上げます。

敵 井上 勝視 選

人 三の矢が怖くて敵と握手する

鶴久百万両

地 ありがたい敵だわたしに火をつける

永田 俊子

天 敵ながら天晴れうちの娘に惚れる

白水 盛雄

軸 天敵のような女と暮らしてる

やっぱり 山口 高明 選

人 流暢なあゝの声やっぱり葬儀屋さん

緒方美津子

地 特老の庭にやっぱり恋の花

宗 弘

天 大物のやはり大きい慰斗袋

前 たもつ

軸 宣誓の証人やはり偽証する

雲 田口 虹汀 選

人 少年に梯子を貸そう雲の峰

仁部 四郎

地 気に入った雲が私についてくる

高須賀金太

天 曼陀羅の雲の櫛へ父と母

浜本久仁於

軸 地固まる雨を誘ってくれた雲

記念 前 たもつ 選

人 記念日になりそう夫から花もらう

松尾ユリ子

地 記念写真ボクはトイレで間に合わぬ

田代 松子

天 幸せぶとり記念の指輪はずれない

土井 洋子

軸 唐津焼き記念に妻に買うてやり

許す 小松 多聞 選

人 花野行く外出許可の車椅子

市丸 晴翠

地 五十年まだ許されぬ傷のあと

吉田 敏子

天 いまもまだ許してくれぬムツゴロウ

橋高 薫風

軸 もう許そ花の季節も終わるから

雑詠 高須賀金太 選

人 寝たふりをしてる耳がよく動く

木本 朱夏

地 火葬場でポキンと折れた音を聞く

撫尾 清明

天 花骸異臭を放つのはわたし

川久保睦子

軸 地下鉄の窓でネクタイ締めなおし

麻生路郎師句碑建立50年記念 第51回西日本川柳大会参加

吟行のお知らせ

JR弓削駅前の路郎師句碑建立50年記念の句碑まつりに皆様の御参加をお待ちしています。

とき 平成11年9月4日(土)・5日(日)

行先 岡山(弓削・津山)

宿泊 津山市ホテルα1(津山市大谷190-16)

電話 0868-24-7733

予定 4日 新大阪集合9時 新大阪発9時28分 岡山着10時10分

岡山周辺観光後弓削行き

句碑祭 16時-16時半

にぎやか祭 21時まで(夕食) 津山宿泊

5日 津山発9時11分 弓削着9時35分 句会(川柳公園散

策・交歓) 弓削発16時06分 新大阪着18時15分

解散

費用 宿泊代約6000円(食事は別)

乗車券は割引等の関係で個人的に購入していただきます。

特急券・乗車券往復で約13440円。

申し込み 8月15日締切

川柳塔本社事務所まで 担当 前 たもつ

残暑御見舞

はびきの市民川柳会

安芸田	泰子	森田	四三郎
芦田	絢子	山本	たけし
内田	さとみ	吉原	辰子
川田	晋	榎本	吐来
立藏	信子	酒井	一壺
徳山	みつこ	清水	利武
西村	りつえ	塩満	敏
三好	専平		

第23回 茗人賞川柳大会

とき 8月29日(日) 午前9時開場

ところ 白兔会館(鳥取市末広町556)

兼題と選者(各題2句・席題なし)

ゆとり 小林由多香 覚める 小西 雄々

鳩 林 荒介 貫く 森山 盛桜

厳しい 谷口 次男 光る 門脇かずお

味 野口 節子(欠席投句拝辞)

午前11時半締切 会費 2000円

路郎忌

本社 七月旬会

七月七日(水)午後五時半
アウイーナ大 阪

梅雨もひと休み、久々に星の輝く七夕まつりとなる。路郎忌七月旬会は百十四名の参加により、にぎやかに開催された。

番傘本社より八月水府忌との交換選者として田頭良子さんを迎える。また席題選者は中田たつお氏に務めていただく。

お話は河内天笑氏。昭和54年に当時番傘旬会部長の中田たつお氏と川柳塔の高杉鬼遊氏との話し合いから交換選者を出すことになり21年目を迎えたいきさつ、第一回目は西尾菜氏と金泉萬葉氏がその任に当たったことから路郎忌に因む話は始まった。

昭和43年の『川柳塔』に三桑東洋樹氏(時の川柳社の創設者)が「路郎先生の思い出」と題して書かれた一文を紹介する。東洋樹氏は常々路郎に心服し、心の中では師と仰いでいた。川柳雑誌の不朽例会に誘われたこともあると言ふ。

終戦後まもない頃、東洋樹宅へ、泊まりが

けで川柳仲間が集まり、柳談をしていた夜、玄関の客人の靴が盗まれ恐縮したが、路郎と足のサイズが全く同じで、新品の靴を差し上げ以後愛用されていたエピソードもある。

川柳塔となつてからも同人数は着実に増え続け、路郎を知る生存者は少なくなつたものの、孫弟子、曾孫弟子等が活躍している今日の川柳塔の発展を路郎師も草葉の蔭から喜んでおられるだろうと結ぶ。

初出席に和歌山市の前岡健三郎氏、東大市の中井孝美氏を迎える。

月間賞は和歌山市の川上富湖さんに輝く。(司会—金太)(記名—いわさ・澄子)(受付—澄子・義子)

席題「星」

中田 たつお 選

しまなみの灯りは橋か綺羅星か
ガンダム(の)星座は何処とせがむ孫
この歳でまだヒコ星を慕つてゐる
星屑をみやげにキャンブから帰る
彦星とまだ出逢えない娘が一人
流れ星 妙見さんの方へ落ち
星占いおとめ座というおじいちゃん
朝顔の宴へ星の雫など
職探し星にも願ひかけている
少年は星を眺めて模索する
朝星と夜星嘲っているバイト
流れ星喪服の人とすれ違ふ
七夕の星を拝んで夜勤する

新星発見道はつきないまま探す
天の川あたりで待てと読む帛辞
シベリアの星が知ってる虜囚の詩
蠍座のおんなに借りた恩がある
もつ二度と人は恋うまい流れ星
星月夜泣いてばかりはいられない
六郎の絵のお星様笑つてゐる
シャガールの馬に跨がり銀河まで
星ひとつ描けば闇夜を抜けられる
星を見ている人間の目も亀の目も
新しい星が光つて一つの忌

てのひらに星のひかりを溜めてゐる
流れ星 あなたも行方不明なり
流れ星疑問が一つ解けてくる
まばたいてあなたの星でいたいから
私を磨くと星になれますか
生きて死ぬ星から見れば小さいこと
告白をしたあと星がよく光る
流れ星男の鱗かもしれぬ
ふるさとに星をながめる指定席
執着を捨てて北斗の星になる
シリウスの溜息をきく低気圧
野心なお明日へと燃えている昂
一等星ばかり眺めていませんか
星の位置いつかわたしのためにある
明星に祈るしかないガン告知
天に星この世は欲に満ちている

軸

流灯の行方にぬくい星がある

良子 洋人 重人 保子 重人 しの 萬的 和湖 富輪 美代子 咲子 昭子 千子 公子 保子 靖巳 信子 桂子 恵子 森子 桂子 正雄 保子 恵子 房子 希久子

人

人形も死角で殺意抱いている

地

人形にならねば越せぬ橋もある

天

すすり泣く波音越前竹人形

軸

ジュサプロー動けば人形蘇生する

兼題「酒」

高杉鬼遊選

嫁がせて嬉しい酒となる

酔うほどに日頃の不満目を覚まし

阪神に酒も延長戦になる

男って得ネ未練を溶かす酒

要らんこと喋ってしもた酒の罪

現金で酒代払うのも佗し

後味の悪い別れの酒を酌む

りストラの不安を抱いてはしこ酒

よく笑う女と酒を追加する

ゆとりない酒に通天閣が浮く

思いっきり笑いたい日のワンカップ

酒好きでいつもにっこしています

仏壇の冷酒の瓶が大分減る

息子には飲みすぎると言って呑む

大ジョッキ女にもある喉仏

男の美学などと呑みたいだけのこと

かりん酒ですこし多弁になるおんな

忌がめぐる十和田湖の酒思い出す

天下とるような気になる三本目

寿子

楓楽

萬的

庸佑

剛治

充子

正雄

美代子

千歩

萬的

千里

完次

勇太

泰生

保生

寿美子

保州

和子

倫子

たつお

恵美子

あやめ

樽からの酒は日本の音で出る

屋台酒話相手を選ばない

会費分飲みこしてまだ手を叩き

胃袋を酒で洗っているような

生涯にいく度か酒にけつまずき

惑星の地酒みやげに貰う夢

病院の前の自販機酒がある

乾杯へ一番元気なのは下戸

野田聖子さんと飲みたい止まり木だ

カラオケの魅力二次会ついで行き

酒とろり愛を煮つめてゆくふたり

酒好きと思われているお中元

酒の匂いに集まってくる淋しがり

佳

五臓六腑大吟醸を迎え撃つ

割り勘と聞いてピッチの上がる酒

トントンと背中を叩くのは酒か

六甲おろしのつづき梅田で飲み直す

居酒屋の風は小骨をとってくれ

人

お父さん飲もうと嬉しい事を言う

地

阪神の貯金で旨い酒呑める

天

好きなだけ呑んでね保険かけてある

軸

只酒をよばれ自前で飲み直す

雅文

しげお

一二三

かすみ

武庫坊

弘一

慶一

文

正一

梨里

アキ

アキ

扶美代

柳弘

靖巳

富湖

たつお

典子

典子

まつお

たもつ

たもつ

希久子

希久子

希久子

希久子

希久子

希久子

兼題「天才」

田頭良子選

天才も二本の箸で食べている

天才に百号打たれおめでどう

天才の親も普通と掛け離れ

天才じゃないと荒れた手を見せる

天才が隠れて使う広辞苑

門前の小僧天才うならせる

立ち直り天才だなあお母さん

うりの憂にはうりしか成らぬそれでよし

天才をちやうはやしめて成らぬそれでよし

やり繰りの天才妻が走ってる

俺の子だ天才であるはずがない

名匠もお寺の屋根に忘れ物

天才がある日答案白で出す

天才も流感らしい熱と咳

天才は余計な色を使わない

人真似の天才自分見失う

天才の努力はいつも無視される

十桁の暗算答え出す少女

天才が天才になる努力する

天才に負けぬ五体を親がくれ

天才にされて煙草にむせている

沈黙を大事にしてる天才だ

天才と誕生日だけ同じです

うちの天才どこかで油売っている

天才の嗅覚がある家の妻

天才と錯覚をして子を育て

天才の言うこと最初わからない

天才の陰で泣いている人もいる

天才の臓器移植は欲しくない

たつお

満州

充子

萬的

和子

千里

ダン吉

月子

いつふみ

恭昌

典子

雅文

あやめ

紫香

みつ子

天笑

雅文

雅文

蛭

一歩

一二三

信子

義

房子

泰子

房子

弘一

正坊

靖巳

猫のヒゲ抜いて天才日が長い
天才と同じ数だけ食事する

一二三
扶美代
保子

へマをして今日も天才愛される
天才のレシビにはないサシスセソ

惠美子
森子

天才のタマゴを抱いてのカラス
翔べる日はなかつた天才のつばみ

森子
たもつ

僕も天才暗示をかけて生きている
天才の心はいつも濡れている

咲二
舞夢

天才も三度の食事嬉しがり
天才は無いが焦らずついて行く

満州

天才でなくてよかつたやさしい子
軸

いわゑ

天才は騒ぐ世間が腑に落ちず

兼題「ころ」

橋高薫風選

ころして喜寿を迎えん路郎の忌
喜怒哀楽みえぬころの持ちおもり

正坊
保子

ころ今日本海に浮いている
ころ知る人一人居て支えられ

満津子
蜚

真心をこめてサンマを焼きました
優優と名付けてあげたそのころ

幹齊
義

ホームページころどこまで覗けるか
透き間なく母さんからの送りのもの

千歩
かすみ

別居してころを合わす嫁姑
水鏡ははのころが見えてくる

夕花
咲二

ころから今頃詫びる親不孝
ころもち丸うおなりでもう傘寿

章久
あやめ

大好きな人と笑っているころ

信子

ひと言で女ころは弾んでる
土足厳禁僕のころはデリケート

いわゑ
大輪

きつちに西瓜を切っているころ
夕陽背に澄んだ心で山くっている

しげお
一歩

落柿舎のノートに置いてきたころ
冷泉文庫の紙魚からたどる歌ころ

たつお
たつお

良心が近頃横を向きたがる
氣持よう喋って母は寝てしまひ

靖巳
月子

空一杯におむつを干しているころ
なるようになれて暗々としたころ

哲夫
度

心理学専攻怖い女の子
石庭の筋目に心洗われる

正雄
慶一

まころが分かつてくれぬ通過駅
献体にも従って行けたらなあ

しげお
吐来

毒舌の裏のころを噛みしめる
動物園檻の中にもあるころ

澄子
弘一

遠花火恋しい人に馳せる胸
捕われのころを準備した蜚

セツ子
瑠美子

どの恋も愛してました心から
佳

公子
泰子

人は人 私は私平常心
モナリザところの奥を探りあう

和子
萬的

禅の心教える石と砂の庭
優しさの怖さを知った恋心

満寿蔵
一二三

食べてゆきかねて心売りに出し
逃げ水を男ころは追いかける

金太
地

栄華には揺れぬ心が子にゆれる

一歩

天
脳死論ころの行方など想う

軸

血圧にはやくもころ見透かされ

(清記・希久子)

水府忌

番傘川柳本社8月句会

とき 8月6日(金)午後6時

ところ 三井アーバンホテル

地下鉄中央線・JR環状線弁天

町駅すぐ ☎ 6577-1111

宿題

煌めく 野里猪突選

広い 中尾飛鳥選

知らん 岩井三窓選

ブロ 橋高薫風選

誰 磯野いさむ選

ほかに席題1題・各題2句

会費 1000円

しめきり 午後6時50分

本誌最終のカラーページ(129)は

二賞選考 応募用紙

その前ページ(127)は

第五回川柳塔まつり事前投句

および懇親会・宿泊申込用紙

その前ページ(125)は

毎月の川柳塔・水煙抄投句用紙

お間違いないよう、お願い申し上げます。

老地獄

毎月25日締切・30句以内厳守

編集部

川柳高知

川竹

松風報

まだ未練命の修理する八十路

良縁を父の未練が洩りだす

金槌の夫婦で漕いだ舟も着く

舟を漕ぐ程は居眠り出来ぬ席

二代目が漕ぐとまっすぐ進まない

春うらら長い読経に舟を漕ぐ

海水の汚れを嘆くあさり貝

貝塚が縄文のころ喋り出す

貝料理穀も貰って名を覚え

二日酔しじみの汁が腑にしみる

貧乏が貝になれない痴話喧嘩

女系家族父は時々貝になる

埋立てへ貝の悲鳴が聞こえるか

川柳会製花

石上

悦子報

姫御前の足は毛氈しか知らぬ

毛氈に酒をこぼして吸い付いた

もうせんが古くて雛が目立たない

花廊邸世界の花がお興入れ

和枝

一夫

蟹郎

玲子

子

松風

良雄

子龍

美々

京子

千鳥

てるみ

酒仙

圭風

孝雄

幸風

功

快

功

幸

雄

雄

雄

雄

雄

雄

雄

雄

雄

雄

独り占いそそろ飽きがきた眠気

占いを信じて生きる厚化粧

いい日だぞ黄味が二つの目玉焼

占い師自分の事は当たらない

ゆつたりと息抜きしてる仕舞風呂

息抜きに核のボタンは押さぬよう

息抜きは美人の膝が性に合い

婿殿が息抜き増えつゝ縄のれん

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

息抜きは美人の膝が性に合い

白光子

洞庵

みつ江

東雲

狸村

ダン吉

甚一

鹿太郎

美智子

鱒二

美ツ千

よしえ

節子

正和

一枝

石花菜

かつみ

忠良

求芽

典子

和歌子

ただし

睦子

悦子

東雲

美恵子

蟹

蟹

蟹

蟹

蟹

本物と知らしてくれた棒グラフ

恋人に会えた喜び菩薩様

和を以て初心にかえる塔の下

走つたらあかんと妻に叱られる

本物はこんなところで慌てない

二人三脚隣が走るから走る

本物の歯でいただけ朝御飯

才走り過ぎて小さく生きている

才走っても終電車には間に合わない

暴走のトップを止める綱がない

藤の木は蟻も何やら謎めいて

憶病なくせに美人となら喋る

山に向き会話が出来る歳となり

旨い物食べて会話がよくなる

武者飾ると祖父の会話がすぐはすむ

あれその会話で夫婦ことが足り

ハウアーユーハワムッチだけ言えるわい

亡き母の会話が耳に生きている

親と子の会話ときれて全自動

込み入った会話かトーン低くなる

満ち足りて占い要らぬ老夫婦

そよ風に襟足匂う春の宵

襟足の色香に負けた純な僕

美しい襟足のぞく江戸小紋

襟足に憂いが残る京女

さよ子

盛之

東吉

辰郎

萬郎

洋

千梢

さと美

舞夢

比呂志

正坊

正雄

周信

絹楽

楓

伽羅

靖己

みつ子

蛙報

金太

一齋

呂万

苑子

一弥

蛙城

基

敏光

昭二

洋

萬郎

辰郎

東吉

盛之

さよ子

さよ子

さよ子

さよ子

心で叱る母本物の平手打ち

本物のバラが持つてゐるバラの色

法隆寺駅を下りれば奈良の風

食べることおしやり楽しむが花

物忘れうなす給う半跏像

炎天下百済観音涼しそ

ヒリで良し完走できたことほめる

走つてゐるつもり言う事さかぬ足

沢庵が旨い自前の歯で食べる

土べいがつづくいかるが時止まる

出来すぎる贋作妬むほんまもん

煩惱に負け迷走の続く夏

終幕のベルへ私も走らねば

斑鳩の風によろめく鬼ごころ

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

心から許すに傷が深すぎる

泣きに來い母は大きく手を広げ

断ち切れぬ愛が重たい血の絆

携帯で監視してゐる妻の知恵

胸奥に他人に消せない火がついた

万愚節女の嘘が欲しくなり

ライバルが頭半分先をゆく

一歩二歩三步尻もち初あるき

何はなくともチューリップ真つ盛り

どの手にも握手返して老い一人

いつからか年が言わせるヨイコラシヨ

耐え抜いた倉がボツンと終戦日

後継の子に見合せて農機買う

東雲

蛙

義

春

喜美子

会美

日の出

叔子

石舟

蕉子

恭昌

澄子

希久子

鬼遊

文仙

かおり

ひかり

まさる

坊太郎

治

あきら

治延

吟笑

マツエ

放任

輝夫

勝

満ち足りた思いで老後過したい

橋が出来海の島々青目立つ

ささやかな倅せさがす迷い道

温泉に今日の疲れを置いてくる

選挙戦途切れた縁も掻き起こす

味自慢母の手料理この一品

日本経済応急処置では間に合わぬ

噂され七十五日の長い事

リストラの噂国中吹き荒れる

前職を生かして二度の職につく

川柳塔みどくち

小西雄々報

水空気がわがアドレシスはみか旨い

影武者が見え隠れする箱がある

転勤の住所へ夢と希望湧く

請求書住所違わず舞いこんだ

住所録思い出ばかり詰めてある

この町の鬼に一札住みつめた

住所録同期の桜散り始め

転居してやさしい風に気が晴れる

ガムに付く昔の住所あのあたり

花回廊の隣の住所空気が澄む

高柳川柳サークル卵の花

川島諷云児報

泡吹いて蟹に不平があるらしい

饒舌な女が吐いた泡の数

口角に泡が飛んでる負けいくさ

無党派の泡がマグマを噴き上げる

午後に逢う約束があるレモンティー

寿々女

チカエ

よしみ

正雪

貞月

なみ子

くに子

抱楽

はつ恵

いさむ

鈴枝

弘子

公美枝

久光

正光

智恵子

康女

和代

豊枝

雄々

白溪子

稲子

重人

靖巳

石舟

カレンダーを埋める午後からの出会い
ら抜き語が飛びかう午後のお茶店
軽い嘘ほんのり香る午後のお茶
実家まで叱られにゆく午後のお茶
惚れ抜いた女にメリッ介者が邪魔になる
メリッという厄介者が邪魔になる
いい仲間メリッ抜きで握手する
メリッの無い母さんの深い愛
メリッを両手に提げて天下り
真ん中でスリル味わうかずら橋
同心円廻るばかりでじれったい
真ん中の人があくびをこらえてる
真ん中に立派な鼻がある写楽
551のある時真ん中で笑う
座る席真ん中よりも端えらぶ

佳句地十選 (7月号から)

坊農柳

オキシフルで洗う昨日の恥その他

騙された胸のしこりへ縄のれん

ゴミ抱いて川も疲れているだろう

漁り火がチラチラ揺れている旅愁

長生きをせねばドナーに相済まぬ

なんべんも釘をさされる浮気癖

噛み合わないだまて私告ビール

遺伝子のコピイ忘れて子を叱る

脇役で数をこなして生きている

気くばりの妻に差し出す感謝状

節一

義夫

しげお

晴美

吉之助

志女

芳子

砂輝守

波留吉

あやめ

紫香

光穂

半蔵門

治三郎

弘

朱夏

雄々

富湖

石舟

あやめ

賢子

民子

芳江

房子

狸村

無防備で真ん中にいる自己過信
自信あるから真ん中を歩いてる
軽くよろめく風と私もボヘミアン
ともすればよろめく心凍らせて
よろめいて下さい膝が空いてます
人妻のよろめき時刻表を買う
誓い合う愛がグラスの音になる
大津絵の鬼と新世紀を覗く
警察に以た妻がいて恙なし
貧乏神を酔わせて雨期をやりす

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

萬的 諷児 澄子 泰雄 とし子 和子 満寿蔵 おさむ 森子

暫くは余韻にひたる旅帰り
母さんの永眠ふる里は消えた
代り映えせぬ連休をただ眠り
優先座席座れば眠くなる仕掛
うたた寝の一番好きな昼食後
柴又に消えて淋しい旅艚
大の字に眠る児(や)あり鯉のぼり
面壁の達磨むじじい三年目

城北川柳会

神夏磯典子報

香住 慶子 欣史子 あずき 能子 喜美子 シマ子 弘直

幼子に心許して鳩が寄る
息抜きをすとと痴呆になりそうて
料理番組毎日見てて何もせず
いくたびも挫折かさねた遠い道
いっぱい香りの中で息を抜く
不況対策五月の鯉の愁い聞く
男への距離をゼロまでセットする

チサ子 政子 登美子 久留美 静枝 達子 史風

充電に見えないものがが見えてくる
五体満足父母を鏡に虹を見る
余りある苦勞も今では語り草
会者定離桜に思ふこと頻り
いかに歩幅合わせるもどかしさ
距離置いて猫の助走を眺める目
花ばさみ花のいのちへ手が惑う
夢でしか逢えない人へ不眠症
楽をして儲けた金は身につかず
ツッコミとボケで東と西の知事
美しきものみなここに五月なり
ポリシーを持って負け大演じきる
減塩に慣れて動きが鈍くなり
目の届く距離に夫を泳がせる
佻しさを知っているのは影法師
お茶漬けをたつた一人の音で食べ
正論も時には曲げて世に流れ
旨い話に乗っかって話せる年となり
すぎた苦を笑って話せる年となり
風車 不況風にもよく回り
フルムーン互いに意見ゆずらない
葉さくらが花の盛りをふと思つ
一心に祈れば神も近くなる

東大阪川柳同好会

森下

愛論報

母子手帳胸にあたたか春を待つ
暴言を吐いた男の寒い背な
呆けるなよ言ってる方が呆け始め
無理やりに曲げた枝にも春は咲く

たもつ 萬的 柳宏子 千里

曲がり道息子は厳しい方を選ぶ
故郷を出る子が振り返る曲がり角
表札は真つすぐ柱曲がってる
人間の弱き誓いが守れない
おとこ男の約束だぞと誓わされ
守らない誓いの言葉読んでいる
太陽に背を向けた日の曲がり角
メルヘンの風を泳いでいる少女
メルヘンの丘のキッスで目が覚める
三月月でブランコしてのお星さま
大胆な夢に誘われ目が冴える
鬼も仏も誘うて春の旅プラン
本命のおんなを誘う金曜日
誘い銀一手遅れて敗けました

竹原川柳会

時広

一路報

しまなみも見える通学電車です
ラッキーマが空から落ちてこないかな
太陽も妻も笑っている朝の駅
春色でみな生き生きと朝の駅
朝の庭種のひとつが伸びなやむ
朝からの散歩でリズム戻りだし
変身願望夜明けを待っている私
オハヨウと元氣飛び交う通学路
白い髭だから毎朝剃っておく
勤勉な靴に朝から急かされる
町並みの味ビル一つ目にさわり
三世代同居はじめぬ味もある
味しめて見えなくなつた落とし穴

シマ子 恭昌 庸佑 文秋 東雲 弥生 朝子 美弥子 賢子 定男 湖風 治也 愛論 大史子 高千枝 蘭幸 貞子 鬼焼 美佐雄 力 正宏 熱 節夫 節生 笹舟 菁居

ぬくもりの流転の果ての女の味
オムライス盛る白い皿おしやべりで
武家屋敷奴も出そつたはずまい
しまなみのパノラマ瀬戸に住む果報
二人旅初心にかえる九州路
竹祭り先祖の故郷と旅の方

霧が深く明日の港がよく見えぬ
道草をしたねと愛の手が深い
会者定離心に深いふかいキズ
罪深い私と思うお養錢

深爪のイタミまだ死なぬまだ死ねぬ
都市砂漠深いところで飢えている
田辺聖子の深さの中にいた川柳

三幸川柳教室

三宅

保州報

養毛剤売ってる人を見てやめる
髪洗ひ女は次の手を決める
朝シャンが二倍の仕事してくれる
髪に手をふれて女を演じよう
現状に揺らぐ日もあり束ね髪
黒髪と話のつきぬ黄楊の櫛
五センチの段差が泣かす車椅子
百歳の記憶引き出す日向ぼこ
消化せぬ言葉三時の茶で流す
失敗の数がピエロの芸なのだ
丁寧にお辞儀をさせている数字
一病を抱いて旅路の保険証
多数派の波に飲まれてゆく小石
約束を破り脳味噌落ちつかず

不朽 比呂子 夏喜 汎美 淑子 喜久恵 喜美子 一枝 房子 栄恵 静風 笑子 一路 和代 豊太郎 満洲子 桂香 公子 百合子 起世子 美子 忍 正一 和子 嘉平 町子 めぐみ

怒り心頭胸のマグマが破裂する
ご破算で再出発の新世纪

環境破壊次第に歪みゆく地球
半音階下げてやさしくなる破調
破れた記録破つて恩返し
殻破る勇気を今は溜めている
力作もいまだチャンスに恵まれず
立ち上がるチャンスをつたえ

シャッターチャンスなものでない指の先
チャンスよりピンチの方が慣れている
チャンスだとけしかけにくる影法師
着地するチャンス逃がしたシャボン玉
今がチャンス光る言葉をかけてみる
チャンス待つ腕立て伏せを欠かさない
八起きめのチャンス怖くて握めない
今日生きているのが何よりのチャンス

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太郎

今頃になって夏風邪五月病
頑固さが消えないうちは大丈夫
一通のレターが招く雨期乾期
信念を通せば頑固馬鹿にされ
お連れさん何処へ飛んだか百貨店
うっかりと聞いた話に責められる
うっかりも過ぎて我が身の恥を知る
紫陽花に笑顔も添えた雨の朝
留守電の一つが午後を波立てる
中傷も柳に風と吹き流す
うっかりと妻と違った手を握る

みね 初子 当代 孝子 千秀 碧 かず子 利治 章子 正匍 鉄治 鉄子 マリ子 朱夏 登美代 保州 江美 一閑 鹿太 哲嗣 モトコ 亀与子 百合子 イサミ 幸子 まさ 勇次郎

カーテンを閉めて着てみる赤い服
うっかりと口すべらして火傷する
法守る顔は頑固が良く似合う
食欲をテレビで見せるトキ一羽
それからのページへ雨が降りつづく
熟年の妙薬歩く朝の道

倉吉川柳会

松本よしえ報

これ以上上がらぬ暮らしくじを買う
成績が上がり小遣い増えました
泥澤も甘く見すぎた罌が待ち
夫婦愛泥澤危機を乗り越えた
ぬかるみにはまった時は騒がない
泥澤を這いまわせた敵の弾丸
ばあちゃんが箸の上げ下げやかましい
ぬかるんだ心のまんま地獄行き
菖蒲湯に夜毎つかって病がち
何時までもじめじめするな夏よ来い
ぬかるみに落とした紙幣窓にはる
ぬかるみが生れ故郷のむつごろう
菖蒲田は植えてはならぬ訳がある
ぬかるみでやんちゃな未来の夢を捏ね
ぬかるみの中で生まれたヒット曲
男の子いないが菖蒲湯だけはする
ぬかるみの向こうに不老不死の村
菖蒲湯が不倫の臭い消しそうだ
すっきりと生きる菖蒲の葉のように
逆上がりはじめて出来た子に拍手
梅雨明けに君を口説くと予告する

弘治 夢之助 正治 満寿蔵 澄子 十四郎 智子 天雀 雄々 小生 秋人 喬水 幸子 喜美子 節子 秋草 久子 かつみ 康子 和歌子 ちよ子 石花菜 十三男 完司 ゆり子 季芳

泥濘を抜け出すための断酒会
ぬかるみの遊び知らない平成児
紫陽花の青で染めたい梅雨の空
雨上がり急ぎ田んぼの土に居る
くたれた菖蒲湯に入る二日酔い
グミ捨てた人を見ている花菖蒲
愚痴言うな瑞穂の国は梅雨でもつ
ぬかるみの深さ知ってるのはカッパ
梅雨の部屋本もわたしもカビくさい

川柳後楽吟社

従野

健一報

鏡与えると猿が人間臭くなる
力では開かない心ある扉
追い風の情けをもらう五十坂
単調なりズムに酔った春の旅
正直な男で器用な嘘言えぬ
仕方なく土地があるから米作り
捨てられた石にもあるさ明日の夢
尻っぱ巻く負け犬あすは勝ちに出る
正直が一番と子に諭せない
休職を控え独り言増える
まだ僕を支える水が湧いている
落日に元氣を出せと万歩計
歩みきて足あともな風羽の浜
無器用な父が折つてみれば同じ国
しまなみも渡つてみれば同じ国
不発弾捨てて未練のない余生
良い言葉使つていてもネギ坊主
雑踏を知らずに一生終えてゆく

玲子 悠子 紀美子 賀寿恵 一夫 次男 玲坊 明美 和枝 草風 道博 健一 拓治 浄美 秋月 美智子 桃風 信善 忠成 正秀 照路 邦季 まさお 佐加恵 吉則 博友 一夫

懐かしいたより何度も読み返す
独立のきびしさ知った独り寝の夜

川柳塔唐津支部

松涛庵正剣報

誕生の祝いの電話孫も子も
抽出しがいくつも欲しい独り者
記事のせいか此の頃どうも胃が重い
選ばれもしない御仁がしゃり出る
旅の空々焼小焼け里恋し
預け先迷つていたが当たらない
かあさんがなめると傷はすぐ治る
遺言を書く程資産ありもせず
エービーをいろはに戻す筆を購う
口下手の男は敵に回せない
連休の許可が孝行させてくれ
砂風呂に老いを時たま埋めに行く
廃兵は三猿主義をよく守る

大原川柳社

矢内寿恵子報

衝動買い溜飲さげてまた溜めて
溜飲がさがり今夜は眠れそう
一発で溜飲上げたホームラン
溜飲を上げて本音で向い合う
口説いてた癖に案外酔い潰れ
ゆっくりとしている老母にそつが
開けてみて案外だった遺産分け
ちぐはぐの夫婦案外仲がよい
溜飲がちくりちくりと胸を刺す
溜飲のさがる思いの話聞く

柳五郎 進 實 あき 勝視 輝夫 タミ 幸夫 晴翠 高明 久仁於 水笑 虹汀 正剣 四郎 矢内 喜美子

楽天家案外うるさい人だとか
案外と甚六うまく世を渡る
案外なところで見せた母の意地
下戸ですと云うて案外いける口
旅立ちの子は案外と親ばなれ
茶髪の子案外礼儀正しくて
溜飲を下げにきたのか里帰り
居候案外長居でねばり腰
溜飲を下げて明日へ深呼吸
大ジョッキ女溜飲下げて
溜飲が下がるアクセル踏み続け
すがすがしい気分になって画廊出る
ひと言を刺して溜飲下げている

京都塔の会

松川

杜的報

貴婦人の香りする花 我と比ぶ
杜家の庭目を引く初夏に楓燃え
初夏の風たっぷり吸った鯉のぼり
雨上がりひとときわまぶし賀茂の木々
唇を噛みしめ泣かぬ女になつて
唇が乾く何かを待っている
どこまでも向き合うつもり紅をひく
赤ちゃんを撮った残りで祖母を撮り
大笑いしているとこを撮られたり
ハイチーズカメラ慣れたVサイン
たっぷりと草木が萌える京の雨
たっぷりとねむるとプラス指向湧く
来年も咲いてとたっぷり御礼肥
たっぷりと寝る久々のさとの家

こふゆ 敏子 南花 みさえ 美佐子 たづ子 昭子 絹子 はるみ あすなろ 和子 寿恵子 満子 柳宏子 百合子 吉之助 正坊 葉子 シマ子 紫香 萬的 友照 楓楽 美穂 寿美子

スケジュールたっぷり余生とは楽しい親切がたっぷりすぎて肩が凝る

むかしの彼が賀茂の河原にいそうなり唇の草笛ふるさとも感じてる

撮って欲しい人はとりたくないカメラ唇の盗人に魂までに抜かれ

くちびるをきれいに塗ってさようならお色気はたっぷりあってまだひとり

唇に歌を持ってる日の余裕たっぷりお客楽しませ近く枝雀

帰る孤児写すカメラも泣いている唇の緩みに腹を探られる

み仏の唇おことは聞けそうてたっぷり叱言を聞きに里帰り

百選の水たっぷり瓶に入れ振りかえり振りかえり行くいい別れ

尼崎いくしま川柳会

春城 年代報

ぼそぼそと話す姿は母に似るぼそぼそと鬱憤はらすひとごと

ぼそぼそと二浪暗記の午前二時ぼそぼそをやめた十も若返る

泣きに來た川が知らん顔してるせせらぎに若鮎躍る五月晴

川岸に事情語らぬ青テント川のない橋でかぬ買った坊さん

解禁の鮎釣る川の青きこと川明けに鮎一匹を釣りあげる

人間のエゴを見つめて川流れ

ベ女 輝美

求芽

芳子

欣之

波留吉

英一

巨詩

修水

ただし

達子

典子

飛鳥

水客

節子

千恵

浮き沈みして花びらは魚になる企みの川すげ替えている仮面

借りた本かたみとなりて友の逝く立ち読みで好きな作家と向かい合う

積み読の本も処分は気が重いつきめきを秘めてリルケを読む少女

悲しみの底で六法書を聞く民族浄化生るあしたを否定され

体温が伝わる女と隣席で世紀末塔が傾きはじめてぞ

日めくりの真ん中へんに坂がある胃を病んで虚飾の街の天井棧敷

立て膝のテトラポットに波の私語走るともう汗臭くなるさつき空

川柳ささやま

酒井

いづれ疲れ消えて想い出だけ残る満ち足りて舞うひとひらの花弁にも

深々と下げた頭が風を切る深入りはよそう寄附金やってくる

一軒家ブームとはかり蛙鳴く貧乏をしはし忘れるお湯加減

古い二人思い出ばかり深くなるブームなど知らない姑が土を掘る

さわやかな園児の顔がほころびる深いわけ知らずにうわさ先走り

芸の道深くなるほど艶が出るふところの深さあらため友を知る

深入りはしないでおこう他人ごと

芳子 歌子

愛

年代

静

富美子

久子

紫香

光穂

惠子

薫

義芳

比ろ志

純子

惠美

多美子

伴せも埋めてあります深い皺終る日の恙無い足透かす風呂

深い谷覗いて孝行強いられる花束の深い絆で姑となる

突き落す深さは神の愛だろうふるさとの味が煮詰る深い鍋

今日の悔い仮面を流す終い風呂

川柳塔ふくべ

橋本多哥由報

校門の桜登校拒否を知っているほどに白黒つけぬことにする

馬鹿だとは言えぬおんなじ仏の子親馬鹿でみんな我が子がよく見える

給食があつて学校好きになる学校で習った事は忘れない

ほどほどの人生だから悔いはないときめいた思いほどどつて来る

道楽もほどほどにして立ち直る女学校というのがあつた頃の青春

古傷にふれて前には出られない

うぶみ川柳会

上田 宣子報

脇役に丈夫な手足ありがたい決心を伝え晴ればれ青い空

常識を伝える笛が休めない伝言を忘れて家に舞いもどり

いじめつ児増えて嫉を陽に晒す伝説に次つぎ嘘が加えられ

房江

美緒子

君代

富美

芳郎

可住

靖子

節子

螢

きみ子

春恵

信子

昭恵

かつみ

明美

伝来の農にメダカも良く遊び

ひと筋に手間ひまかけて伝授する

腋の下くすぐる孫がふたりいる

湯豆腐がゆらゆら話まともらず

へそくりが増えたる旅に出たくなる

逃げ水がゆらゆら軽いめまいする

伝統の村の祭りが消えてゆき

米増産はげんだ頃がなつかしい

ひと言が枝葉増やして舞いもどる

脇道へそれて涙を捨ててに行く

二人の春がゆっくりストローを伝う

かわはら川柳会

上田 俊路報

初恋の貴方にまさか逢おうとは

いじめつ子まさか我が子と気がつかず

精検のまさかが晴れて仰ぐ天

還暦を新茶乾杯四世代

乾杯のグラスに一つ過去を捨て

乾杯にいばらの道をかみしめる

長すぎる乾杯音頭待ち遠し

乾杯に涙こらえるお父さん

完走の汗に乾杯してやろう

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

雷が鳴って迷いがふつ切れる

雷が朝から落ちる杜長室

遠雷に故郷の老母を思いやり

老妻はカミナリだけがまだこわい

遠雷は無沙汰を叱る友の声

天人

あづま

蜚

雅女

孝男

葉士人

くにお

ユリ子

雄人

洋々

宣子

余吏子

ふじ子

正子

悦子

泰良

寿子

登聰

俊路

一生

一風

とみを

たもつ

シマ子

隆盛

葉の裏で夢を見ている昼蜚

胸底をあなたのホタル離れない

人間の愛に戻ってきた蜚

一匹の蜚を籠に入れかねる

何回も咲く気構えの花菖蒲

遠い日の菖蒲が浮いていた風呂屋

菖蒲束乗って沈めてよく遊び

しみじみと昔は遠き菖蒲の湯

しょうぶ湯はいのち育む香りする

花菖蒲そのやさしさに気を許す

括弧の中で七転八倒した喜劇

束ね髪ゆっくりほどく日の終り

その他大勢で一括された僕の位置

満場の笑いのうずで締め括る

幸福なナイフりんこの皮をむく

紙だけでペーパーナイフ飽き足らず

真夜中にナイフを研いでいる不気味

自信ない子ほどナイフを持ちたがる

鉛筆をけずれないまま母になる

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

この縁ほんに仏の引き合わせ

五月晴れだるまは今日も笑わない

薔薇バラと私真つ赤なバラを抱く

木の机あるじと別な息をする

シヤガルもドリも見てきて疲れきる

ふじつるをからませ恥をカバーする

払う金無くても遊ぶ金は有る

朴の花見下ろしている花回廊

勝美

洋

欣之

和歌子

柳伸

恭昌

東雲

春蘭

千里

柳弘

年人

民子

三男

春子

剛治

柳宏子

弥生

度

ますみ

玲子

春枝

麗

千代

田鶴

寿々子

花子

ふみ

背伸びしてほんの少しの陽を浴びる

絡みつくものをほどいて花の中

ちまき食べ大きくなった鯉載

悲喜劇のまあ中程で今日も暮れ

ひと時を舞う旅を練る花ごよみ

ガラスに映った背伸びをする私

まぶた裏竜が踊って眠らせぬ

しばらくは魚になって水に浮く

正論をかざしてカラ血むが若い

何かして居ないとあふれ出る涙

ひたすらに虹の真下に向いてゆく

天もストレス溜めたか今日も曇り空

追憶は浮世橋を離れない

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

近すぎて何もわからぬ近所です

ご近所を上から読んでる鯉のぼり

近所まで来たからと言いつ父が寄り

近所から届く野菜で足りてます

陽が昇り足の痛みも知らん顔

ポケットへ近所の噂おしこめて

また今日もうるさいほどに案じられ

正直に生きたいと近所うるさがり

うるさいが妻にも五分の理を認め

近所です犬の叱言も聞いておく

サークル檸檬

小林 一夫報

ジャガ芋の生命力に負けている

憎しめは封筒に入れ固く封

日枝子

千春

八重子

すみえ

てい子

蘭

天雀

恵子

瑞枝

富美子

ゆき

晶子

荒介

聖子

恵美子

好栄

ちよえ

鈴江

はるみ

かつ子

博利

清泉

白汀

澄子

みつ子

氷ゆつくり溶け慣り薄くなる
ベイエリアの夕日 約束なんて反故さ
薫

コソコ貯めていたのは枯葉かも知れぬ
楓

封筒にしのばせた額きいたかな
雅子

封筒のしにんだ文字にある怒り
房子

封をしてしまえば絆切れる文
いわゑ

達筆をしばらく眺め封を切る
義子

茶封筒つい勘違いしてしまつ
あずき

封筒のような男で出世せず
靖巳

ときめきの封書あじさいは今ピンク
希久子

ほたる川柳同好会 田辺正三郎報

切れ味のするどい頓智で庇われる
吉太郎

チャップリンの帽子に詰っている頓智
喜美子

不況風飛ばす頓智を待つ庶民
竹二

この急場何とか頓智出ぬものか
正安

もつれ糸頓智でほぐす苦勞人
ただし

頓智から名案が出てお開きに
見清

菖蒲園傘かたむけてすれ違ふ
敵子

傾いた軒にもつばめ来てくれる
保子

傾いた銀行同士の縁結び
祥風

蛇の目傘傾けて雨の先斗町
蜚柳

曲り角傾きすぎて倒れこみ
善守

傾いた傘に隠した意地がある
よろう

傾いた首もとされて降りる駅
まみ子

反骨へ乙女心が傾斜する
正三郎

傾いた方が負けです恋ゲーム
セツ子

母に似て首傾ける仕草まで
雪子

道ならぬ恋の傾斜に胸焦がす
柳童

退院後ソフトになった毒舌家
直次

古里のソフトな風は母の声
馬洗

クラス会ソフトな風は母の思いやり
桂子

意味ありげあのソフトさは何だろう
久子

交渉事ソフトに腹を探られる
千里志

パソコンのソフト命令無視ばかり
肋骨

川柳塔なら 坊農 柳弘報

商売の上手な嫁がしきつてる
李世恵

週刊誌不倫離婚が飯の種
天狗

国土荒らし民は反省しています
さと美

説明のうまい話術につられ買つ
幸代

連休のあり余る暇もてあまし
春蘭

四季のある国でうれしい春のいろ
美和子

朝夕に同じ話で呆けた老母
たけし

くどい事は言わん肝つ玉かあさん
春

国言葉丸出しにして受けている
悟郎

外国ともめんといてや都知事殿
巨牛

何回言つたら気が済みさんのや自慢
桜竜

揉み手する数だけ稼ぐ小商い
孝子

時差ボケの顔で国際線降りる
茂雄

吉本のくどい笑いに身をまかせ
真理子

リストラの風よ私に向かないで
あやめ

小商いの心を買いたがる
とし子

日の丸と君が代国の未来問う
洋子

日の丸を掲げ国とは日本とは
良一

出血と書いて利益はちゃんとある
眞生夫

行商で生きる女の束髪
道子

くどいほど確かめて出る火の用心
絹子

新世紀国境などはない宇宙
常念

くどい上司を脅かしている縄のれん
一風

凝り性の話念には念を入れ
直子

野仏の膝をかすめて行つた風
美千子

天国の予約今から出ますか
昇

四面楚歌風よ動いてくれないうか
朝子

店じまい月に何度目として儲け
和子

ブランコをゆすると亡母の風になる
千秋

人間の脆さを風に教えられ
千歩

川柳大阪 坊農 柳弘報

歩んで来た道はもう振りかえらない高2
主

念入りの化粧で隠す顔のしわ
照月

紫陽花の季節来たかよ雨の庭
隆司

言い訳をする度化粧厚くなる
信醉

氣付いてよ口紅ちよつと変えたのに
まゆ子

精一杯妻と歩んで来た人生
河南子

独り身の時は気合が入つてた
雅紀

お化粧ののりも嬉しい初デート
真果

化粧して人生楽し酒に酔う
芳香

桂馬より常に持ちたい歩の心
叭笑

化粧して更に優しくなれました
楽子

過剰米飢えてる民になぜ行かぬ
かよこ

ライバルはいつでも一歩前を行く
青道

口紅が最後で気分引きしめる
柳昌

ああ平和熟女同士が泥仕合
美花

五十年歩幅のおうてきた夫婦
本蔭棒

光る汗明日を見つめる試歩の杖
朝子

まつお

川柳に自分の歩み残しおく
卒寿まだ色艶余す舞を見せ
先輩に一步譲つて花もたせ
血の汗で歩んだ平和崩せない
同権を唱えてゆれるイヤリング
あなどつた歩が逆転の位置に待つ
字余りが今日のリズムを狂わせる
核を抱く地球にせめてもの化粧
化粧した妻へうっかり会釈する
厚化粧落とせば貴女となてす
化粧室仮面がひとつ捨ててある
週休二日ヒマ持て余す空財布

川柳塔鹿野みか月 土橋

新しい町に古城がよく映える
海峡の向こうに母が老いており
タレントが今日はゲストでよくしゃべる
朝露の紫紺の茄子をもぎに行く
一番取りの茄子は先祖に先ず供え
焼いてよし煮てよし茄子でタイエツト
茄子漬けの一切れはけてる藍の色
焼茄子が好きで丹精込め作る
自我の芽も伸び反攻の三歳児
ストレスで投げた小石が輪を広げ
しがらみも柳に風と応えよう
仰向いて涙の粒を花にする
仰向けに寝て神さまと差し向かい
空想の翼で空を飛んでみる
年老いて翼広げる意地失せる

川童 一風 鉄心 希久志 洛醉 比呂志 一步 ダン吉 柳宏子 金太 重人 柳弘 螢報 武子 喜与志 明美 野草 かつ乃 節子 汲香 実満 弘子 幸枝 富久江 富み子 完司 みさ子 八重子

エンゼルの翼おだやかにも夫婦
片肺で翔んだ翼も古稀をゆく
繕つてまだしばらくは要る翼
終業ベルなつて元氣のでる翼
陽の沈む頃が翼のひろげ刻
念仏がうわ言までに沁みこんで
謔言も言わん丸太と夜をあかす
うわ言につられて笑い合っている
謔言にお隣さんが飛んでくる
おさな子の謔言にけんかが続き
嬉しさのあまり謔言から転び
謔言で叱られているのは誰か
うわ言の端が仏にひつかかった
住職の耳まで謔言がとどく
仏壇の前で謔言いつている

川柳塔わかやま吟社 牛尾

母と児の時計乳房ははつてくる
狂わない時計がいつももある厨
おしゃべりな時計私を振り回す
貧乏の名残り確かな腹時計
三つある時計がどれも狂つて
待ち合らす約束がある花時計
人嫌いの詩人は時計持たぬ主義
峠越えぬの鼓動聞く時計
住職に近く順番を聞きにくく
兄弟で頼む僧侶がまとまらぬ
高僧も練金術にたけている
日曜も先生僧として走り

緑良報

諷人 睦子 和子 くに子 はお 菊茂 菊野 由利子 孔美子 保子 初子 公子 盛桜 隆風 螢 和子 さち子 精子 武春 愿 三男 萬的 富美子 しげお 豊太 泰子 正博

小僧からたたきあげても寺継がず
世を捨てて妖しい光持つ尼僧
いつもより木魚が弾む布施の額
真実を決め手に持っている僧侶
目の奥はもう許しているゲンコツだ
奥の院敵も味方もなく眠る
結局は妻の奥の手効いてくる
奥伝に活けられ花の満足度
反論へつぎの奥の手揃えとく
奥深い道に戸惑い行き昏れる
胸の奥に今も炎の雨が降る
住みついた野良が我が家のアリンセス
ややこしい時には貝になる同居
ほどほどに賑わう街に住んでいる
健康な顔が住んでる陽の匂い
一家団欒こんな倅せある我が家
ひとり住む家に大きな犬の小屋
人情が欲しくて村を出ない母

はまゆう川柳会

中後 清史報

胸の中言わぬ男の笑い顔
胸つまる思いで見てた君の名は
胸キュンとレモンのような恋をする
胸の傷癒えるひまなし今梅雨
見栄張つたある日の胸が今疼く
食い違ひ胸三寸に治めとく
内紛の犠牲は子供胸痛む
候補者の開いてみたい胸の中
胸の中みんなさして言いたい

君枝 射月芳 大輪 めぐみ 富湖 和重 紀久子 鉄治 高夫 寿子 稚代 英子 紀美女 千寿子 吞天 紫香 保州 修也 平和 国彰 すみれ たけし 華水 雅視 雄造 サト美

老眼に一寸気取った色がいい
老眼になつても見えるいやな事
その裏を読む老眼が冴えてくる
学ぶこと多く老眼休まれず
抵抗があつた老眼鏡合わせ
まず眼鏡二歩も三歩も後れとる
現実のしがらみロマン忘れさせ
神宿る熊野ロマンが客を寄せ
ロマン追いつける夫と苦勞する
ロマンには縁遠くいる共白髪
地図にない道にロマンの夢がある
指切りの小さなロマン振り返る
命がけ男のロマン山にあり
目を閉じて未来へロマン欲しいまま
老いの眼にまだ残つてる日章旗

川柳塔まつえ吟社

恒松

町紅報

王将の座を狙うのはコンピュータ
王道を知らぬ律義な駄馬の汗
王様も所詮は妻の掌に踊り
王様とむかしはなしをする絵本
王様の溜め息知っているガウン
王様に近い男の振る反旗
手づくりが得意の亡母の絹手毯
へそくりが得意の母に助けられ
得意など持たぬ男の菜っ葉服
カラオケで得意な喉を披露する
お得意へ配る団扇に夏が来る
口笛が得意女を呼んでいる

さだ代 比斗志 利ぼん 太一 佳子 恵美子 優子 公治 五雄 慶一 てる坊 生来子 美佐子 苗子 清史

茂美 螢

まな板の音が知らせる低気圧
内緒こそまな板だけが知っている
まな板の出番が減つた均等法
偏差値のまな板にのる子供たち
不機嫌なまな板に寄せつけぬ
まな板を陽に干している梅雨晴れ間
邪魔になる小銭笑つて役に立つ
帰るひまなし一円玉の旅がらす
消費税小銭が重い財布布
神様へ小銭で願ひ事をする
小銭入れ我が家の暮らし知っている
バスカードなくし小銭のありがたさ
ビールの栓みんな抜いてる慌てもの
音たててこぐり飲み干す野良帰り
この男騙しやすいとビール注ぎ
缶ビール持たせ体よく追いはらう
汗かいて冷えたビールの旨いこと
結婚は当分しない大ジョッキ

南大阪川柳会

吉川

寿美報

多賀子 登志子 知恵子 小枝 久枝 久枝 米子 注湖 静恵 桂子 すみこ 静江 煩惱児 たけし 与根一 ひふみ 町紅

文秋

併用の素材が生きた炊き合せ
別居とは無縁空気がという夫婦
エプロンが縦結びです別居中
別居中カニを満腹食べました
親はなれ子ばなれ別居するもよし
不器用な夫が赴任する別居
突然の変異へ動けない度量
ええ方に変異してほし新世紀
突然変異今年はトラが貯金する
突然変異ソクラテスの子がひとり
ダイオキシンきれいな土が減つてくる
鳩減らすこと考えているお寺
時々上京減つていません母の愛
無事平穏祈るかたちの道祖神
平穏が続いて明日が怖くなる
一徹な私を変えた滝しぶき
ネクタイの趣味が変つたお父さん
なぜ急にそんなに勉強しだしたの
変異とは息子ハーフに変わる朝
兄弟が併用している父形見
別居より泣きも笑いもある同居

はびきの市民川柳会

安芸田泰子報

下の座に母さん当り前の顔
大猿の亡姑の着物が良く馴染む
連立という輪の中でもめている
ノムさんがトラの野生をとりもどし
合格が親戚中をかけめぐる
子供の日わが家にミニの鯉のぼり

遠野 朝子 雅文 東雲 志子 志華子 庸佑 柳宏子 慶一 寿美 信治 度 柳伸 たもつ 凡子 和歌子 日出子 清成 悟郎 久子

昭平

弥次郎兵衛の傾き変えるイヤリング
肩たたきやった上司が先に辞め
若葉の香通院途中ベダル止め
愛というマニュアルのないむずかしさ
竹馬の友が喪状に乗ってやって来る
手話自在バイリンガルと胸を張る
舗装した川に言いたいことがある
じいちやんのアイドル膝に乗っている
自由とはいひなカモメが飛んで来る
青年の自由は空をかけめぐる
自由でも繰る糸がたえぬだけ
自由すぎ少し狂うた中にいる
盆栽は自由にさせぬ枝を切り
ちやはやと煽って梯子はすされる
本人の為とちやはやとしない
ちやはやと育てた子供に捨てられる
ちやはやとされて財布が軽くなり
ちやはやと迎えられる過疎の嫁
偏差値に嫉妬した塾カバン

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

満寿蔵 俊男 辰子 一壺 吐来 かつみ 重人 敏 元紀 利武 たけし 敦子 洞庵 昇 庸佑 光宏 志洋 泰子 りつえ

遺跡発掘ギッシリ記録する手帳
あの時の自分を手帳から拾う
手帳にはうそを書く人まずいない
ゴミ回収太ったカラス屋根で見る
暮し向きつぶさに覗く回収車
廃品回収あのおじさんはもう来ない
梅雨の冷え回収できぬのは噂
父の日はせめてゆっくりひとり酒
戦友会ゆっくり歩く人が増え
知らぬ間にゆっくり老いて来たわたし
ゆっくりと古都の鐘きく旅浴衣
世の中もゆっくり回れ観覧車
三分粥愛がゆっくり胃にしみる
ゆっくりと時間かければ澄んでくる
ありがとうほんの五文字に血が通う
らんちゅうの豊かに泳ぐ自尊心
スパーへ財布持たずに従いて行き
恋日記私ひとりの文字となる
潮騒の音がかすかにする電話
何もかもお笑い草になった嘘
跳べば跳べそうなどぶ川 忸然し
「おかえり」と戸口にひびく孫の声

岩美川柳会

石谷美恵子報

萬的 求芽 哲嗣 トミエ 澄子 正坊 みつ子 鹿太 武庫坊 江美 曙蝶 信子 正とし 比呂志 周信 涼子 松煙 メ女 諷云児 春蘭 てる 愛紀子

花時計恋の行方を見届ける
飛躍する思いで夏を絵に描こう
カタツムリ飛躍したくて木に登る
ツメまつ赤下駄が全然似合わない
目を閉じて文豪たちの下駄の音
散りばめたダイヤの時計よく狂う
幾山河越えて悟った親不孝
タレントに育てた親の明と暗
古希となる悟りへ一つ恋をする
飛躍した嘘で山から下りられぬ
悟っても手の鳴る方へ足が向く
下駄草履手作りだった子沢山
振り子時計ゆっくり止まる日の美学
下駄履きで行けるところに母がいる
跳んだ日も泣いた日も知るちびた下駄
最後には金だと悟る帰り道

富柳会

池

森子報

圭一郎 きみ子 静生 一夫 和歌子 忠良 蟹郎 睦子 一京 一瑤 公乃 芳江 明美 節子 裕子 美恵子 一夫 たかし 夕子 幹夫 勝子 宏 三和子 けい子 和子 勇太 東雲

この不倫はれば海へ鯨が待つ
 風花のはじめは軽い片想い
 後編のもしもが暗い絵図となり
 うっかりと泣かせてしまふ花の首
 七転び八起きでことんする挑戦
 読みとれぬカルテもしもと抱く不安
 待つ待つ残り火までが夜叉になる
 もしも寺に生れていたら破戒僧
 カルテから挑戦状が来て困る
 宇宙船もしも乗れたら火星まで
 いつも一緒わたしの影も花になる
 豊かさの中で女の赤ワイン
 真相は糸のもつれの奥にある
 手を触れぬ距離で馥郁たる香り
 一本の葉にすがっているもしも
 身辺をいつもきれいにするもしも

川柳塔打吹

米田

幸子報

信博 春蘭 ひろこ 夕花 義清 信子 アキ 昭水 登子 文子 紅紫朗 シマ子 欣之 花梢 森子 孝恵 博丈 玲坊 和歌子 一夫 よしえ きみ子 睦子 螢 季芳 克枝

寝たままの母今この時を守りたい
 臆面もなく言ってしまつて恥をかく
 臆面で人の意見も聞く耳で
 言いたげな臉の裏が今わかる
 園だと分かつていても食つてみた
 正直な人で園によくかかる
 臆面な二人は愛し合っている
 あさひるばん臆面もなく飯を食う
 花園を臆面もなくよばよほと
 一進一退もう臆面でいられない
 まちまちな羽音を立てて子は育つ
 まちまちな八つ子生む人捨てる人
 友釣りの園にされるやるせなさ
 臆面の顔で上がって飲む茶の間
 閑魔騙して臆面もなく極楽へ
 臆面の芽が鳩尾の奥で伸び
 臆面もなく人前でアイラブユー
 臆面もなく人前でアイラブユー

川柳塔おとり

原みさを報

セツ子 京子 逸子 順子 しろ子 芳光 勝見 完司 石花菜 玲子 節子 一枝 康子 久芽代 和枝 かつみ 雄々 幸子 孝子 由多香 雄々 ゆきの 伝住 風花 富貴子 和子 崇

不況風ローンのチラシきて誘う
 好きだから少しの無茶を言ってみる
 無茶と無知とこが境か分らない
 無茶ですす嘸き合える年になり
 空爆の無茶かコソボに人住めぬ
 汗の出る仕事はやはり米のめし
 いのししも米が食べた家族連れ
 点滴と廊下を歩く回復期
 すれ違ふ廊下にかおり残す女
 高校の廊下で拾う青い恋
 二世帯の廊下は家の交又点
 飾り物すると廊下が他人めく
 二世帯は渡り廊下でこんなにちは
 ひそひその話廊下の壁が聞く
 看護婦が廊下を走る救急車
 廊下からひそひそ見舞客送る
 厨房の匂い廊下を渡りくる
 蛭たち森の廊下で恋をする
 雨の日の廊下を占める洗い物
 渡り切るゝ靈安室につく廊下

横浜あおば川柳会

菱田

満秋報

邦昭 雅通 千秋 小生 義弘 仁子 彰雄 登美 艶子 庸二 黙光 紀子 宏章 舎人 野草 清子 道子 敬之介 省子 雅子 句多留 亜希子 八重子 絹子 あかり

好きな色身につけ幸せ呼んでいる
手まねきの先に花香の落とし穴
定年へ試行錯誤の予定表

許してはいるが一応妬いてみせ
亭主留守 気の合う友を呼び寄せる
ゆつくりと回る地球が騒がしい

茶断ちした夫に新茶いれて出す
二歩三歩 歩けた夫に応援歌
方便の嘘許される聴診器

お返事のよい事だけは群を抜き
ゆつくりと起きて早寝の定年後
再就職つき呼ぶ靴を履いて行く

温暖化やがて大地が減る地球
悲しみもやがて笑いのネタにする
すぐそこに扉が見える新世紀

孫連れてきたから敷居またがせる
爺さんと他人が呼んだら返事せぬ
後輩にリードを許す気の弱り

わだかまりとけて介護の手が温い
麻酔から覚めて実感取り戻す
許すこと多くて丸い石になる

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

最後まで座る味方の顔をして
世話好きの座る席には風が舞う
きゅうり なす朝どり 持つて友が来る

カタカナの野菜が増える膳の上
こだわりとフライド 捨てぬ京野菜
等級外 野菜にもあるおちこぼれ

かず枝 街湖 笑子 和可 道子 達也 のぶ子 広和 土風 かづ子 純子 徳三 鈴美 サト子 満秋 充子 潮華 政勝 早智

手応えは図星 反応を待つ明日
図星ささいいい線ですと逃げておく
時折は図星を外すキューピッド

図星でもはじらい見せる可愛い娘
母の愛 図星はささぬ思いやり
心得を噛んで含めて送り出す

ライバルの含み笑いが気にかかる
銭別にお礼心を含めとく
含み針わざ鮮やかな宮大工

年とって含むものなし本を読む
雨降りを含めて旅装束なる
但し書きあれこれ含む公文書

解釈に含みもたせて歩みよる
含み針ちよつと化粧が厚すぎる
欠点も含めて妻を愛してる

不甲斐ないわたしを嗤う昼の月
趣味一つ心に齢を取らせない
通り魔のように花の香に打たれ

還暦を若いと思う齢となり

川柳塔みちのく

小寺

花峯報

にぶい奴だが己を守る角二本
パーティーの最後は妻とスロースロー
腹立てる時期を失して平和なり

ふる里は鈍行でいく無人駅
炊飯器女の勤を鈍らせる
冷房を女で冷や酒冷や奴

あの鈍い音は背骨の軋む音
手をとったフオークダンスはレモン味

求芽 庸佑 周信 和歌子 きく子 肋骨 吉太郎 英子 杜的 路児 紫香 一箱 正三郎 重人 楓云児 石舟 夬女 寿美子 正坊

柳々 慕情 敏人 凡々子 岳水 大吾 紅雨

トコテンつるつる咽喉を0秒5
医者どうしのヒソヒソ話に気がかり
満天の星が見ていたピアガーデン

肩たたきだろうか小さな声で来る
ささやきを信じて闇に迷い込む
諸行無常ささやいている母の数珠

終着駅ラストダンスの墓になる
絵手紙を抜けたしてくる西瓜割り
沈黙の部屋でささやく一輪花

香水をつけてささやく毒キノコ
上京のロビーでささやく津軽弁
ジルバにはついてゆけない紙おむつ

川柳クラブわたの花 吉村 一風報

病む川にホタルさつきと見切りつけ
偕老のちぎりそれきり沙汰もなく
首くくりとなりまんまと儲けてる

ストレスの真っ只中にいるわたし
留守電の白けた風におおられる
ありがとごめんさいの言える子に

溺愛のあとの喉に泣いている
ストレスがしげきになって若返る
噛み合ってうまく行きそう新所帯

別姓の結婚なぜか寒そうだ
目の弱い老眼鏡の曇りふく
結婚を迫られゆれる心電図

娘の結婚父これごもの一人酒
ああ不況結婚金も儘ならぬ
ナイフより鋭く妻が問い詰める

北歩 隼人 順風 銀波 ふさふ 花匠 ツネ 黙人 花峯 一花 五葉庵 島

友甫 朝道 一 幸枝 隆盛 寿代 信子 司 友甫 朝道 一 幸枝 隆盛 寿代 信子 司

流行の帽子ひとり歩いてる

結婚をせず輝いて娘たち

ふるりの蜩見せたいひとがいる

詫び祈り歩く遍路の孤独感

コーヒーで結ばれ酒で固められ

錆ついたナイフのような外交戦

披露宴父が小さく隅にいる

新婚に均等法がいてる

父さんの涙もらって角隠し

戦時中お見合灯火管制下

三度目の結婚指輪買いかえる

川柳ねやがわ

江口

日もつらら童謡はずむピクニック

青空を笑いころげるピクニック

修理品札を言うのが早すぎた

どう見ても修理している高い鼻

修理する度に買おうか買おまいか

そそくさと脳の修理をする日記

止まってる父が受賞の金時計

捨てるには惜しい男で焼き直す

仏様修復されて笑み給う

ムード派で音楽入れるお葬式

割り勘と聞いてムードが消えていく

受付のムードで分かる杜の景気

当確に明るいムード満ちあふれ

一喝をされそうまたの日にしよう

溺れてはいけない束の間のムード

ムードでは食えぬと女手きびしい

春 江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 宏 剛治 ミツ子 道子 鬼遊 度報 高栄 朝子 重三 順三 博泉 とし子 一笑 亜成 かすみ たもつ 弘一 波留吉 三郎 仁清 恵子 あやめ

如才ない男ムードに逆らわず
橋くぐる水上バスは背をちぢめ
新しい橋新しい灯がともる
三本も橋を作ってみな赤字
明日の空見たくて渡る太鼓橋
坊ちゃんの下駄の音する瀬戸の橋
天満橋通り抜けだけ渡る橋
吊り橋の向こうに好きな人が待ち
さまさまな別れを見てる秋の橋
陸橋で泣くだけ泣いて終る恋
明石大橋をまだ見に行つてない人魚
九十で現役幸せな人です
鉦の音から夫婦の朝が動き出す
と金への夢を歩なりに追いつつけ

堺川柳会

河内

月子報

庸佑 小路 光子 勇太朗 一風 良知 忠央 茜 度 冬葉 磯 文秋 時弘 洋 春蘭 紀美女 哲平 健吾 朋月 靖雄 勇太 半銭 文 小雪 五月 かりん

平らかの多きを願う持ち時間
気立てよい妻に足りぬは色香なり
傷ついて強がりがかり言つてみる
時は残酷私のいのち切り刻む
その時はその時の絵を描くつもり
身の回り整理しとけと時が言う
プレゼントすぐ値踏みする癖がある
今日もまた恙無きよう祈るのみ
人相でどこか犬にも吠えられる
買った値の半値を言うて服見せる
ホツとする時間たくさんありすぎる
大統領地球の値段いくらです
十五歳怪しいものがむずむずと
青春に巻きもどしたい古時計
君だけのつもりだったがいつか冷め
豊作も値崩れしては喜べず
頭取が決めた配当怪しいぞ
任されてリストラ策が乗る軌道
川柳藤井寺 高田美代子報 大八

ああ不覚任した人が陰り出す
任すたびに男の顔になつて行く
横道へそらす話は任しとく
姑に留守を任せてとんでいる
任しとき返事はいつも威勢よい
あきらめなやあいな任すうたから
傷心を丸ごと任す胸がある
任せると言つてあれこれ口を出す
任されて私の癖も移しとく
任された仔犬もわたし嫌つて
大切な密使がまだ戻らない
ようこそと固い握手で吐きぐる
ようこそと諸手を挙げる過疎の村
ようこそその話が弾む遺墨展
割り切れぬ端数を抱いて生きている
遺児のため端数はみんな瓶に入れ
ブチトマト端数はぽんと口に入れ
掛け算をすると哀しくなる端数
捨てられた端数が見てる花吹雪
端数だった頃は自由で奔放で
端数まで食べてしまったギリギリ
底辺に生きて端数が持つ温み
一株を抱いた市況が気にかかる
意地のある端数が崖をはい上がる
音楽会ジープンはいて来た端数
切り捨てた端数派のあとがある
端の端まで割つて女の気が晴れる
チューリップが一束残る寒い街
端数ではないぞとアルミ貨が叫ぶ

終一 修六 敦子 よしえ かつみ 六代 扶洋 志洋 桂子 昭子 悦子 正一 昌子 利武 瑠美子 美代子 絹歌 和子 アキ 婦美枝 花梢 和樹 美造 鐘子 良子 元紀 重人

『犬吠』創刊三〇〇号記念
全国誌上川柳大会

課題 (二句詠)
『明日』(五人共選)
選者 斎藤大雄 大野風柳 今川乱魚 森中恵美子 橘高薫風

用紙 自由(ワープロ清記します)
投句料 一〇〇〇円(郵便小為替)
締切 九月十五日(消印有効)
賞 各選者特選三句・総合二十位まで
発表 各選者特選三句・総合二十位まで
投句先 『犬吠』十二月号(三〇〇号)誌上
〒299-0117 市原市青葉台二一九一二
主 催 津田暹方『犬吠』誌上大会係
千葉県川柳作家連盟

ローズ川柳会 山崎 君子報
未だ怒る元氣残して母傘寿
洗濯の白がうれしい青空よ
白いのもカラスの勝手と自然界
蹠いた靴に高さを教えるこむ
繋かれた犬も欠伸の梅雨に入る
にわか雨を迎えいらぬミニの傘
師を乗せて遠くへ去りぬ白い馬
胡蝶蘭おんなは愛を信じている

哲子 藍 てる ミサヲ 藍 哲子 トミエ 貴代子 まさお 澄子

第30回 奈良新聞川柳大会
とき 8月22日(日)10時開場
ところ 奈良県文化会館小ホール
バス「県庁前」下車北へすぐ
お話 「健康アラカルト」
前奈良県立医科大学学長辻井 正氏

席題 「流れ」 黒川 正之進 選
宿題 「期待」 福田 秋雄 選
「河童」 北野 眞生夫 選
「気楽」 鶴本 むねお 選
「揃」 宮口 笛生 選
「抱く」 杉森 節子 選
「答」 西村 茂 選
田中新一 選

各題2句 出句締切11時半
会費 3000円(昼食・発表誌呈)
出席申込 8月11日まで左記へ
〒630-8686 奈良市三条町606
奈良新聞社文化事業部川柳係
欠席投句 5000円(発表誌呈)
欠席投句送り先(8月14日必着)
〒630-8261 奈良市北市中町71 杉野睦朗宛

どの色も白があるからよく映える
割れせんべいに遜色のないマイファミリィ
流行の白で装う若がえり
白旗はいつもアイロンかけておく
車椅子ちよっと斜めに夏帽子

武庫坊 年子 義子 雅子



矢野佳雲さんを悼む

月 原 宵 明

川柳塔誌で活動している愛媛県人二十数名の内、最も古参で、同人として大活躍の矢野佳雲さんが、五月三十日夜逝去されました。

大正五年七月一日生れの享年八四歳で、昨年より体調を崩し食欲不振の処、専心療養に努めましたが、肺炎を併発したのが死因で、誠に呆気なく悲しい限りであります。

佳雲さんは愛媛師範学校卒で、約四十年間教育に挺身し、小中学校長を四校歴任し、今治小学校長を最後に教育生活を終え、昭和五二年河野記念館支配人の頃より、川柳と絵画を趣味に真剣に取り組み、その頃汐風川柳社に入会し、川柳活動を始められました。

元来教育者として文芸に素晴らしい素質があり、推されて昭和五五年汐風川柳社役員となり、その頃から柳誌汐風の表紙絵を描き始めて約二十年間続け、遂に五月号グラジオラスの表紙絵が絶筆となったのであります。

又、五五年十二月、汐風叢書として出版の

『月原宵明—その人と川柳』句文集のすの文
章は、当時編集委員佳雲さんの担当で、実に
立派に書き終え、誰もが感嘆したものでした。

その頃から川柳塔社に投句を始め、実力と
熱意を西尾栗主幹に認められ、昭和五九年二
月遂に同人に推せんされました。
その当時の句は次の通りです。

母追うて走った道よ烏瓜

立っていりや柱寝ころびや丸太ん棒

花柄の花瓶が花の氣に入らぬ

大あくびつぎ足すように妻がする

立てるより腹は抱えて笑うもの
平成に入り佳雲さんの活躍は続き、平成四
年度の晴れの路郎賞を遂に獲得致しました。

◎頂点に立つといくつも影が出来る

四十年間教員をした佳雲さんの句は、素質
の上に推敲と悟りがあり、言わば苦勞の賜物
だと思われます。

又、佳雲さんは路郎賞の榮譽を受けても、

同志に対し別に披露もせず、只、黙々と勉強
を続け、万事謙遜して表へ立たず、自己を慰
める好きな酒も、誘われると応じるが、決し
て自分から発起せず、その場所も他人と逢う
事を好まず、座して同志と静かに語り、大声
も歌も唄わないのが常でありました。

黄金時代の句は次の通りです。

酒癖のさまざま酒に罪はない

黄砂とは知らず賞めてる春霞

訳言えと言うから嘘を考える

変り身の速さで雲は勝負する

木から落ちた猿に学んだことがある

体調を崩した最近の句です。

旅もしつくし栖山だけ残り

家中が乗り気本人だけ嫌気

看病三日されて死んだらなと思ひ

この歳までもった夫婦の化かしあい

深い川誘う男の聲がする

御子息は別居、俳人の奥さんと二人で俳と
柳を語り合ったお宅も、今は奥さん一人とな
り、淋しい矢野佳雲居となりました。

教堂智勘居士のご冥福をお祈り致します。

新緑が映える湖佳雲近く

温顔を残して星の数に入る

汐風の表紙絵がみな泣いている

惜しまれて六月の闇葬がゆく 宵明

柳界展望

玉利三重子

聖夜ほか 応募先 下929

扶養家族の欄から果立つ

一羽二羽 稲葉長生

川下でひとつの答待つて

いる 塩谷幸子

亀石を慕いてふわりわた

ぼうし 松田巨牛

★6月27日、西宮川柳同好

会創立50周年記念大会は西

宮市民会館で124名の出

席を得て開かれた。本社関

係の受賞句は次のとおり。

戦禍聞けば今更ながら第

九条 松下比呂志

五十年今更愛を言わずと

も 門谷たす子

夢中にはなれない雨が怖

いから 田辺 鹿太

背信を口に含んでから雨

に 田辺 鹿太

★第4回「鶴杉」川柳大賞

作品募集 締切8月2日

現代を鋭く諷刺した新感覚

の未発表の川柳2句 投句

料1000円 賞 大賞1

点2万円ほか 選者 細川

舞扇芯の強さは覗かせず

杉森節子

島は坂道貧しい話聞いて

吉川寿美

切り取り線を越える誘い

同大会の秀句は次のとおり

承認され大会に報告された。

「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

された。大会に先立ち、連

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

なら」の加盟が満場一致で

盟理事会において「川柳塔

新同人紹介

安達 はじめ

—公一・典子・白峰推薦

唐 住 実

—薫風・正雄推薦

①小池しげお②安藤寿美子

③玉置重人・藤村メ女・川

島諷云児④田中正坊・辻川

慶子・松本ただし

★NHK学園発行「川柳春

秋」第54号の「わたしの柳

号由来」に本社参号の小林

由多香氏・同じく波多野五

楽庵氏の記事、また、川上

大輪氏の「一人50句—二十

五時」が掲載されている。

★「こんには川柳塔です」

第4号が7月に発行された。

▽人事往来△

■6月5日、薫風主幹は尾

道市文学の館を訪れ、同市

ゆかりの各文学者展示室の

麻生路郎揮毫作品・著書な

どに師の足跡を偲んだ。

■6月6日、唐津シティホ

テルの「川柳からつ」20

0号記念句会に、薫風主幹

は大阪の同人と参加「お話

をして地元の柳友と交流。

■6月13日、薫風主幹はサ

ンルーラル大湯で開催され

た第23回全日本川柳秋田太

会に出席、第2次選者の責

を果たした。

▽計 報▲

■内海良佳さん（参号内海

幸生氏夫人・八尾市）は5

月30日、病気のため急逝。

享年70歳。

■辻キヨさん（参号辻白溪

子氏夫人・高槻市）は7月

2日、病気のため死去。享

年78歳。

■本田恵二朗氏（元相談役

倉敷市）は7月6日、病気

のため死去。92歳。7月8

日、岡山市平井の井上エバ

ーホールの葬儀には柳友、

歯科医師会の多数がお見送

りした。昭和44年4月号か

ら昭和59年3月号まで16年

間、本誌の初歩教室を担当

その間、440名余の人々の

指導をしていただいた。

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 みちのく	7日(土)午後4時から 泡・脱ぐ・ぶらぶら	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ二階「川柳道場」 〒036-8202 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
川 柳 塔 わかやま	8日(日)午後1時から 札・素顔・緩い・「そのうち」	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
川 柳 ねやがわ	22日(日) 正 午 から 裸足・他人・鉢・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 ふうもん 吟 社	22日(日)午後1時から しょせん・リハーサル・背	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
高槻川柳 サークル 卯 の 花	19日(木) 正 午 から 食欲・コピー・逃げ腰・ うろうろ・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
西宮北口 川 柳 会	9日(月)午後1時から ベルト・結ぶ・自然・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	22日(日)午後1時から わざわざ・スーパー・ 応援・「町会」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
東大阪市 川 柳 会 同 好 会	28日(土)午後6時から 夕立・ひたむき・飲む・耳	東大阪市立社会教育センター2F 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
富 柳 会	7日(土)午後1時から 光・可能・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
ほたる 川 柳 会 同 好 会	10日(火)午後1時から 養う・挨拶・ファックス	豊中市立蜷池公民館 阪急・モノレール蜷池駅西へ150米 〒560-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
岬川柳会	15日(日)午後1時半から 互選「表情」・以外・賭け	岬町淡輪公民館 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
南 大 阪 川 柳 会	25日(水)午後6時から 見送る・微塵・水着・密集	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
もくせい 川 柳 会	16日(月)午後1時から 問題・うるさい・ 送る・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
八尾市民 川 柳 会	10日(火)午後6時から 波・好き・秋桜・デリケート	八尾市文化会館4F 近鉄八尾駅東へすぐ 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

8 月 各 地 句 会 案 内

(50音順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
尼 崎 いくしま	6 日(金)午後 1 時から 太陽・ふるさと・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F 阪神尼崎駅南西徒歩 5 分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘 5-25-17 春城年代
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	10 日(火)午後 1 時から 起きる・浴衣・自由吟	尼崎市尾浜公民館 阪急武庫之荘南口から 市バス④番尾浜 2 丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江 5-2-47 田辺鹿太
岸 和 田 川 柳 会	21 日(土)午後 1 時半から うま味・演技・ おおげさ・格別	市立福祉総合センター 2F 南海線岸和田駅東歩 3 分 〒596-0827 岸和田市上松町 610-85 芳地狸村
京 都 塔 の 会	25 日(水)午後 1 時から 減る・葉・こんがり	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札東出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町 328 都倉求芽
堺川柳会	7 月 31 日(土)午前 11 時開場 第 17 回夜市川柳大会	堺市総合福祉会館 本文 P120 参照 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町 2-16-3 河内天笑
城 北 川 柳 会	21 日(土)午後 1 時から 痛烈・抜き足・ふく・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅 2 号出口徒歩 8 分 〒535-0002 大阪市旭区大宮 4-10-18 神夏磯典子
川 柳 会 梨 花	21 日(土)午後 1 時から 稽古・違う・ふんわり・雑詠	鳥取勤労者総合福祉センター 1F 会議室 (鳥取駅南) 〒680-0044 鳥取市御弓町 40-3 宮木方 坂田和歌子
川柳クラブ わたの花	27 日(金)午前 10 時から 形・増す・ビタミン	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町 9-3-16 吉村一風
川 柳 塔 打 吹	14 日(土)午後 1 時から だんだん・計・負い目	倉吉市上灘町上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町 21 野口節子
川 柳 塔 唐津支部	1 日(日)午後 1 時半から 西・住む・無理・雑詠	唐津市栄町公民館 〒847-0082 唐津市和多田満町 1-2-13 仁部四郎
川 柳 塔 な ら	5 日(木)午後 2 時から 感 心 ・ 波 ・ 違 い	船橋フロムワン(船橋商店街内) 近鉄奈良駅西・JR 奈良駅北歩 10 分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西 2-4-23 中原比呂志
川 柳 塔 ふ く べ	28 日(土)午後 1 時から ゆかた・シャンプー・ 茶髪・「里」	福部村中央公民館 2 F 研修室 〒689-0115 鳥取県岩美郡福部村細川 16-3 村上信子
川 柳 塔 ま つ え	7 日(土)午後 1 時半から まつり・賑わう・湖上	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0859 松江市国屋町 381 竹内すみこ
川 柳 塔 みぞくち	23 日(月)午後 8 時から 近 い ・ 煙	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口 757-3 小西雄々

編集後記

で出雲市の原章峰さんから
智子さんの三回忌のこの日
に智子さんを偲んで、夕日
を観ましよう誘われた。

★「医学生が希望する進路
は昔は内科医だったが、最
近は放射線科や麻酔科が人
気。患者とのややこしい人
間関係がないから」。これ
は或る新聞に掲載されてい
た。こころからだの座談
会」の記事の一部。

★やはり人間関係はむずか
しい。今更にと改めて言う
までもなく、みなが痛感し
ていることである。しかし
そのむずかしい人間関係に
あえて関わり合うのも、楽
しい、素晴らしい、感動す
ることに合うから。

★六月二十二日、いずも市
日御碕で行われた「北半球
で一番美しい夕日を観る会」
に参加した。この日は小出
智子さんの祥月命日にあた
る。去る三月二十日の川柳
塔七十五周年記念川柳大会

★皆さんの熱意が、雨の子
報を覆し見事な夕日に感激
した。「美しい」の選をさ
せて頂き、軸吟に「美しく
不器用だった人唄ぶ」と詠
んだ。勿論、智子さんのこ
とである。大先輩を不器用
とは失礼この上ないが、器
用な生き方のできない方だ
つたと思う。川柳をする人
は不器用な方が良くと聞い
たこともある。川柳をして
いればこそその感動も多い。

★去年、柳友からもじずり
草を頂き、鉢に植えておい
たら可愛い桃紅色の花をつ
けた。これも感動。(み)

☆「交換キー触れたら愛は
憎になる」最近のある大会
で抜けた私の句である。ワ
ンプロ交換キーでは「あい」
は愛・藍・哀・相など同音
にしか変換されないのだけ
れど……川柳では……。

☆ところが後で送られてき
た大会誌には交換キーとな
っていて、句意が通じない
のではと、ちよっぴり残念
に思った。

☆編集部の一員であり、校
域雨との予報ははずれ、夏
とときでもあった。(希)

☆出雲はやはり神様の国、
梅雨前線北上により山陰全
域雨との予報ははずれ、夏
とときでもあった。(希)

☆「川柳塔なら」が発足して十か
月を迎えようとしている。当初、
句会参加者が予想できず冷や汗を
かきながらの運営もあったが、県
下の番傘、ふあうすと同人的の方
々の温かいご支援もあり、ようやく
安定してきた今日このころである。
大阪からも多くの柳友が句会に
参加されている。訳をお聞きした
ところ、古都奈良に魅力を感じ、

杜寺を探索してから午後の句会に
出席する人。トンネルを越えると
緑が開け、山脈が遠望できる列車
からの空気が新鮮で、ストレス解
消になるとか、町も人も安らぎが
感じられるなどのべられた。

古都の歴史と伝統が息づく土壌
から生まれる文化のひとつとして、
仏の句が多く見受けられるのも奈
良句会の特徴かも知れない。

ひとこと

至の六月二十二日、出雲大
社に近い日御碕にて「北半
球で一番美しい夕日を観る
会」に集まった人々へ、空
は見事に晴れ渡りさわやか
な一日となる。日没前のほ
んの数分間の壮大なドラマ
は、灯台と夕日の小径を散
策する私達に惜しみなく展
開された。「灯台の夕陽神
話を抱きよせる」尼緑之
助」の句に実感を感じるひ

中原比呂志

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（10月号）

地名

雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

第五回 川柳塔まつり

きりとりせん

〔平成11年10月10日(日)〕

ホテル・アウィーナ大阪

NO.	
〒	
氏^{ふり}名^{がな} 住所	
性別	
男・女	
TEL	

懇親宴 7,000円 会席料理
不参加 参加
宿泊 ホテル アウィーナ大阪 シングル 朝食付 8,000円 当日泊 前日泊
◎ 句会費は当日いただきます。 払込用紙で御送金ください。 懇親宴・宿泊の代金のみ同封の

事前投句「追う」

橘高薫風選

(8月31日締切 出席者に限る)

NO.	

考 選 賞 二

紙 用 募 応

○印を入れてください。

路 郎 賞（川柳塔欄・同人）	川柳塔賞（水煙抄欄・誌友）

きりとらせん

地名

雅号

◎裏ページの要項を読んで応募してください。

応募要項

① 川柳塔欄・水煙抄欄に六カ月以上、出句した人に
応募資格を認める。

- ② 平成10年9月号から平成11年8月号までの入選句
路郎賞——同人・川柳塔欄の入選句から8句
川柳塔賞——誌友・水煙抄欄の入選句から8句
- ③ 8句を楷書で書き、8月15日必着のこと

作品募集

10月号発表 (8月15日締切)

川柳塔 (8句)	橋 高 薫 風 選
水煙抄 (8句)	河 内 天 笑 選
渺湖抄 (3句)	八 木 千 代 選
茴香の花 (3句)	宮 西 弥 生 選
課題吟 (3句)	「住む」 森 茜 選
「無理」	山 田 高 夫 選
「無」	早 川 盛 夫 選
初歩教室 「パワー」 (3句)	吐 田 公 一 担当

11月号
課題吟 「野」「出会い」「願う」
初歩教室 「声」

本社8月句会

とき 8月9日 (月) 午後5時半
ところ アウィーナ大阪 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電話06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「欲」

「隠す」	藤 井 正 雄 選
「浄土」	池 森 子 選
「ベン」	江 口 度 選
「いのち」	田 中 正 坊 選
	橘 高 薫 風 選

席題 1題 当日発表 (各題2句以内)

会費 500円 投句料 400円

本社9月句会 7日 (火) 予定

兼題 「残る」「予定」「カクテル」「目立つ」「丸い」

夜市川柳募集

第3回 「頭」 鈴木公弘選
ハガキに3句 8月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

定価 六百元 (送料76円)

半年分 四千円 (送料共)

一年分 七千九百円 (同)

平成十一年 八月 一日発行

編集兼 橋 高 薫

発行人 橋 高 薫

印刷所 美 研 ア ー ト

大阪府阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

〒545-0005

発行所 川柳塔社

電話 (06) 691-1461 四番

振替 〇〇九八〇一五二三三六八番

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友 (誌代半年分以上前納の定期購読者) に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 渺湖抄・茴香の花欄・一路集 (課題吟) および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所 (県・市名) を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

第6回 鳥取県民文化祭主催事業

第23回 鳥取県川柳大会

と き 10月10日(日) 午前9時半開場 11時開会
 と ころ 倉吉シティホテル(☎0858-261611)
 (JR山陰線の倉吉駅から南へ徒歩8分)

講 演 葉文館出版株式会社社長 齊藤俊輔氏
 兼題と選者 「近い」「けむり」「住所」「家」「包む」「影」「やがて」「鳥」

角田次男選 小築雨秋選 金島蘭幸選 河原千寿選 土居哲夫選 森中恵美子選 橋高薫風選

出句締切 午前11時50分(各題2句・席題なし)

賞 鳥取県知事賞 倉吉市長賞 ほか

参加賞 2000円(昼食・発表誌呈)

欠席投句 投句料 1000円(発表誌呈)

前夜夕食会 10月9日(土) 午後6時 6000円

宿泊 8000円程度(朝食代込み)

夕食会・宿泊ともに倉吉シティホテル・要予約

申込締切 8月31日

連絡先 (欠席投句先・夕食会・宿泊申込先)

〒683-0105 米子市段津1712-1 門脇かずお宛

☎0859-28078 FAX0859-28086

主催 鳥取県川柳作家協会・鳥取県文化団体連合会・鳥取県後援 倉吉市・新日本海新聞社 ほか

平成11年度 NHK学園 全国川柳大会 (どなたでもご参加いただけます)

宿題(事前投句)と選者(各題2句・九月十日締切)

①「シンボル」 斎藤 大雄(北海道・札幌川柳社)

②「校」(字結) 唐沢 春樹(神奈川県・川柳白帆吟社)

③「田舎」 八木 千代(鳥取・川柳塔社)

④「らくらく」 鈴木 如仙(愛知・豊橋番傘川柳会)

⑤「成る程」 竹本瓢太郎(東京・川柳きやり吟社)

宿題(当日投句)と選者(各題2句・当日午後0時50分締切)

①「記憶」 鈴木 国松(東京・川柳研究社)

②「ねんころ」 木野由紀子(三重・番傘桔梗川柳会)

事前投句の締切 平成十一年九月十日(金) 当日消印有効

投句は所定用紙を使用し、投句料(郵便小為替または現金書留)とともに送ってください。

投句先および投句用紙請求先

〒186-8001 東京都国立市富士見台二一三六 NHK学園 全国川柳大会事務局

☎04二一五七二一三五一

投句料 二〇〇〇円(入選作品集を後日郵送します)

大会 平成十一年十月三十一日(日) 午前十一時受付

NHK学園新校舎・3F大教室

(東京都国立市富士見台二一三六)

JR国立駅南口下車、④番バス乗り場から乗車

5分「国立高校前」下車、徒歩5分

大会への出席を希望される方は、ご自分の住所氏名

のあて先を書いた返信用ハガキを、投句作品と一緒に

お送りください。入場無料。

懇親パーティー

大会終了後の五時半ごろから、選者先生をまじえて

の懇親パーティーを会場で開催します。会費五〇〇〇

円。ご出席の方は会費を事前投句と共に郵送。

◎昼食は各自でお済ませください。

主催 NHK学園・国立市後援 文化庁・(独)全日本川柳協会・NHK協賛 (株)生涯学習研究社